
エストラーザ戦記

星河 翼

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

エストラーザ戦記

【Nコード】

N8461C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

現実世界でオレは事故にあった。そして、記憶を失って覚醒した時には、緑溢れる『エストラーザ』と言う国の第一皇子『カイト』としての定めを持ってしまった。しかも、最近この国を含む三国、『エストラーザ』、『キリアートン』、『サリバーン』の間の均衡が崩れ始めてしまっていた。このオレの運命は？個性豊かなキャラともにお送りするシリアスファンタジー架空戦記です。

#1プロローグ

プロローグ

この日は今でも忘れられない、そんな日になった。

彼女への想いは本当に純粹なもので、彼女が笑えばオレも嬉しい気持ちになり、悩みを相談されれば自分のことのように悩んだ。

オレはそんな彼女を信じ愛していた。

しかしそれは、この物語の序章に過ぎない。

外は雨。

傘をかざす人の群れの中、オレは駆け足で彼女との待ち合わせの場所へと急いだ。

いつもの喫茶店。

そこは誰にも邪魔される事のないオレたちだけの一時ながらの憩いの場所。

ここでは、そこら辺で流されている有線の曲はいつさい流されていない。この店の売りなのであるうか、それともマスターのこだわりなのか……ソフトなインストロメンタルのみが流れる、心の落ち着く場所。この店に来るお客の大半がその雰囲気を入っているようである。

オレはいつもの窓際の席に座りいつものコーヒーを注文する。

時計の針は、約束のその時間の十分前を指していた。

運ばれて来た、コーヒーカップの取っ手に指を掛けひとくち口をつける。

砂糖やミルクを入れるのは好みではない。

常連となりつつあるオレたちの事を知っているバイト生は、ミルクだけを運んで来る。ミルクは彼女のためのもの。何時も彼女はミルクティーを頼むからだ。

ふと窓際に目を向けた。

ガラスに弾かれた雨の雫が滴り落ちてゆくのが眼に入る。そのため、その奥の状況に気付くのに時間が掛った。するとそこに彼女の姿を見た。

傘をさし、何やら隣の人物と親し気に話しをしている。

そいつが、彼女の学校の部活の先輩と名乗るもので、このオレの唯一の悩みの種でもあった。彼の者が、彼女を好きなのは一目瞭然で、オレの存在さえ知っていながら、何時までも彼女の気を引く事ばかりしている。

よりにもよって今、こいつの婆を見なくちゃいけないのかと一度持ち上げたカップをソーサーへと置き直す。

信号機が青へと変わった。足止めされているのだろうか、彼女は一向に横断して来る気配がない。

オレの中で、『ざわざわ』と何かが沸き起こった。

次の瞬間、荷物もそのままに駆け出す。

店の中で何か叫んでいるのだが、そんなもの気にも止めなかった。背後で店のベルが

『カランカラン』

と鳴ったのが聞こえた。ドアを開け放ち一直線に彼女のもとへと走った。

降り続ける雨。

オレの眼には彼女と、その隣の男の姿しか入らなかった。

信号は赤

その時オレの体は鈍い痛みを残し、宙を舞っていた。

その姿は、彼女の眼に入ったのであろうか。

決して見て欲しくはない。そんな事を朦朧とした意識の中で願った。

オレの意識はそのままフェードアウト。そして真つ暗な世界へと飛び立った。

エストラーザ戦記

そこまでが、今までのオレが覚えている全てだった。

#1プロローグ（後書き）

今迄、恋愛物ばかりを書いておりましたが、今回はファンタジーでお送りします。少し恋愛も含まれたりしますが。。。
気になってたところを少し手直しをしながら、UPしていると思っております。

最後までお付き合い頂けると嬉しい限りです。

#2カイト

カイト

意識の底から声が聴こえて来る。

真つ暗な空間に浮遊している自分の体に気付き、

オレ、死んだのかな？

と、ぼやく。

暫くすると、一筋の光が自分の体を浮き立たせた。

一直線に差し込んで来る光。

オレ悪い事なんかしてないから、これは天国へと導く光なのかな？！

そんな事を何気なく考える。

しかし、先程から聴こえて来るこの声は……必死なまでに誰かを呼んでいる。

そんなに叫んでよく声が枯れないよな

そんな事を人事のように考えてた時、その声がハッキリと耳に届く程近付いた。

その刹那、

「気付いたのかっ！カイト？」

耳もとで叫んでいたのか

とチラチラ眩しい木漏れ陽の中、自らが大きな青空を見上げている事を把坦した。したものの、

ここは何処なんだ？！

体中が痛くて、これ以上起きあがれない。

「このまま眼を醒まささないんじゃないかって、心配したんだよ……」
その声は弱々しくて、しかし何故かしら聴き慣れたそれは、自分を労っている事を知らしめる。

オレは少し横に頭を動かした。

「オレ、死んだんじゃないかったのか？」

とその声の主に問いかけてみる。何でそんな事を言ってしまったのか？そんな事は判らない。

「莫迦！軽々しく死ぬなんてこと言わないでよ！」

さつきとは裏腹に力強い声。

逆光のために、その声の主が誰なのかが分からない。

「雨、止んだんだ……」

先程まで降りしきっていた雨が嘘のように澄んだ青空が広がっている。

「何言ってるの……？雨なんか降ってないよ」

可笑しな事を言ってくれるなという風に、不安な声が返してくる。

「もしかしてカイト、頭をぶつけて変になったんじゃないの？」

「どうやら、『カイト』とはオレの事を言っているらしい。」

「ちょっと待ってくれ。オレの名前はカイトなんかじゃなくて……」

あれ、思い出せないぞ……

これは困った。と眼を閉じた。が、一向に自分の名さえ思い出せない。

そんな時、遠くから駆け寄って来る足音が耳に入ってきた。

「カイト皇子、カイル様！」

その足音で耳横まで来たのが分かった。

『ガチャガチャ』とした金属が擦れる音が耳に響く。

「クルト。良かった……このままカイトが起きあがれないんじゃない、ボク一步も動けないとこだったんだ！」

と、カイルというらしい人間が答える。

「どうやら頭をぶつけたらしくって、カイトちょっと様子が変わんだ。だから早く主治医に見せないといけない様なんだよ」

と、どうやらこの状況を一番把握してるらしいカイルが説明している。

変？とは失礼な……

と心の中でぼやいてみるものこの状況を全く把握できない自分は確かに変なのかも知れない。

しかも、皇子とか言われてるぞオレ……

「そうですか。分かりました。カイト皇子は私がお運びいたしますので、カイル様は暫くここでお待ち下さい。人を呼んで参ります」
そう言い残すと、このオレを抱きかかえその男は歩き出した。いとも簡単にオレの体は『ふわり』と宙に上がった。

その際カイルと呼ばれたその人間の顔を垣間見る事が出来た。

そして驚いた、色白で、淡い緑色の瞳をした少年。柔らかそうな少しウェーブの掛った茶色の髪が後ろで一つに束ねられ、肩に掛っている。

まるで色さえ気にしなければ、何処かで見た事の有る面影である様な気さえした。

そして気付いた。そんな人間がこのオレを焦点のあわない眼差しで見上げていたことに……

一体ここは何処で、オレはどうしてしまったんだ？

オレは、でかい大理石の宮殿に戻されて、主治医と思われるお爺さんに診てもらった。

そこは、天井に天幕が施されていて、いかにも西洋の宮殿の寝室といった感じである。

装飾も艶やかで、自分が本当に何がどうしてこういう事になったのかが凄く疑問で、訊かれる事のみ答えるのが精一杯であった。

「カイト皇子の容態はいかがなのでしょう？」

と、クルトと呼ばれてた男は主治医に尋ねていた。

「詳しくは、カイト様に訊かれる方が宜しいのではないのでしょうか？取りあえずこのまま本日は安静にされた方が宜しいかと思われます。状況がどうなのかと申しますと、全身の打撲と、その時少々頭を打たれたようで、記憶の障害があるといったところですね」

とその主治医と言われる者が答えた。

「そのようですか」

「……」

オレは、何も話しかける事もできず、そのままぬくぬくとベッドの中で話を聞いていた。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。くれぐれも、安静になさっていて下さいよ。カイト皇子！」

いかにも動くこうと目論むだろう事を予測してか、そう言葉を残しこの部屋を二人は出て行った。まだ、外はほの明るく、その光が優しく自分を包み込んでくる。

「一体何がこのオレに起こったんだ？」

ボソリと言葉が口からこぼれた。

静かな部屋の中、腕を額に乗せて考えていた。

そうしているとただ独り残されて外界からまるで隔離されてしま

ったようである。

遠くで、小鳥のさえずりを聞いた。

『カイル』と呼ばれる少年の事がふと脳裏を過ぎった。

あいつ、どうしてるんだろう

何故か気になるあの少年は、あのまま、あの場所で待機しているはずである。

青い空と、緑の大地。彼は、その中に見た幻影であつたのか？

ふと記憶の中にかすかに残っている彼女の名前を思い出そうとするのだが、なぜだかそれさえも全く覚い出せない。

今では本当はこっちが本当の自分で、これまでの一連の世界だったものが嘘なのではないのか？とさえ疑いそうだ。

それともここは天国で、オレは死んでしまったのか？

お手上げた

暫く横になっていたせいか、それとも頭を強くぶつけたせいなのか、深い眠りが襲つて来た。夢を見る事もなく。

「カイト…カイト……」

そう呼ぶ声で眼が覚める。

うすぼんやりとした視界の中、カイルと呼ばれる少年の顔が目の前に滲んで浮かんだ。

「心配したよ。もう大丈夫なの？軽い打撲で済んだって聞いたんだけど……」

あいかかわらず、焦点のあわない瞳の少年がこちらを覗き込んでいた。

「カイト突然叫び声あげて手を離すんだもの、ビックリしたよ。ボクどうすればいいんだろうかって……」

そういつとオレの体の上に身を委ねた。話を聴いてると、どうやら散歩の途中でオレが小さな穴に足を滑らせたらしい。

「オレ、今までの記憶がないんだ」

その事はカイルの耳にも入っているらしく詳しく説明を加えてくれた。

自分が、この国『エストラーザ』の第一皇子『カイト』という者である事と、そして、一週間後には戴冠式を迎える事になっていて、大事な身である事。この『カイル』が、義兄である事など断片的な事であるが少しだけ理解できた。

「この国は外交が盛んな国で平和であるため、周りにある二国『サリバーン』と、『キリアートン』との間で最近平和の均衡が崩れはじめている。現国王の容態が優れない今、カイト、君が頼りなんだから、十分気をつけてもらわないと……」

この台詞で一気に眼が覚めた。

なんてこった。そんな事いきなりオレに押し付けられるなんて…

…

オレは開いた口が塞がらなかった。

「ボクの事は気遣わなくても……もういいよ。たとえこの目が不自由であろうと何とか周辺の事くらいなら自分一人でできる…カイトと遊ぶなくなるのは辛いけど、もうそんな事もできなくなる身なんだから」

だから、違和感があったのか

先程からの、焦点のあわない瞳の理由が分かった。

なぜかしら、カイルの哀しい微笑み。

「記憶がない方が良くもね。ぼくの心が安らぐ」

とつぶやく言葉は小さくて、聴き取る事が難しかった。

「それってどういう意味？」

訊き返すより先に、

「それじゃ、安静にしてて。またここに来るから」

そう言い残すと、カイルはよろよるとこの部屋を後にした。

沈黙がこの部屋に残された。

外はすでに暗くなっていた。オレはいろいろな疑問を残しつつも、そのままうつろな眠りに襲われた。

夢の中、再びカイルと呼ばれた少年の声を聴いたような気がしたが、それが他の誰かの声と重なり……やがて深い眠りについていた。

次の日は昨日の晴天とは裏腹に雷鳴を伴う大雨であった。

宮殿のガラス窓。そこに弾かれる雨粒。

ふと思う。確かにあの日とさほど変わりはない。ただ雷は鳴っていないかったのではあるが。

目を醒ましてから、暫くすると、身支屋の用意を始めた。

侍女らしき女性が、

「カイト皇子、御気分の方はいかがですか？」

と、優しく声を掛けてくれる。

体の節々の痛みも大分楽になり、ぶつけた頭も起きた時にはすっきりとしていた。

ここは自分の置かれた立場を少し考慮に入れようと言葉を選んだ。「大分良いみたいだ。本日はこれからどうするんだ？」

訊き返してみる。

「これから朝食をとって頂いた後、戴冠式のためのリハーサルのようなものが予定されております」

「そう」

素っ気無く答えて、着なれ無い服を見に纏う。

それはずっしりと体を覆い、初めの内は身動きが上手く取れなかった。

「食事には誰が？」

「少しだけ昨日出逢ったカイルの事が気になり問い返す。」

「今朝も、お一人でのお食事です」

「カイルは？」

「訊き返すと、一瞬の事ではあったが彼女の言葉が途切れたのを見逃さなかった。」

「カイト皇子……カイル様の事そろそろ気に病むのをお忘れ下さい。あなたが、この国の王になられるんです。いつまでもあの事を引きずっておられるのでございましたら、カイル様にも失礼ですよ」

鏡に映る自分の姿を見た。それは見覚えのない姿。

肩にかかるほど伸びた少しくせ毛ぎみの金色の髪の毛を軽く払い除ける。すると、目の前に立った侍女は、諫めるようにオレを見上げた。

あの事？あの事とは一体何の事であるのか？

憶えの無い事であればこそ訊き返したいと思った。

「あの事とは？」

侍女にはオレが記憶を無くしている事を知らされていないのか、

「何を仰せられてるんですか？そのために、カイル様は、眼を……」

そしてハツと思い出したように口を噤む。

「どうした？言いかけた事は最後までいうものだ！」

カイルの眼が自分と何か関係があるのか？どうやらそこに、何か昨日のカイルとの会話に関わる何かを見い出せそうだと気付いた。

「口が過ぎました。お許し下さい」

そういうと、侍女はそそくさとこの部屋を後にした。

追いかけて訊き出そうと試みた。が、部屋の扉が閉じてから間もなく別の侍女が、食事の用意ができた事を告げに入ってきて来た。

「お食事の用意が出来ました。部屋を御案内いたしますので、こちらへ」

そうオレを促すと、少し割腹の良いその侍女の後をついて行く事となった。

オレと、カイルの間には一体何があるのか!?

大理石に囲まれた大広間の中央テーブル。

そこには、自分のための食事が用意されている。

しかし、オレには全くといって西洋のマナーなど皆無で、さぞどうしたのか?!

箸の代わりに、ナイフやらフォークやら。そして、平べったい食器の山。

朝っぱらからこの量を食べると言うのか?!

と思うくらいの量の食事が並べられていた。

「オレ、こんなに食えないじゃなくて、食せないのだが……」

慣れない言葉遣いなのだろう、少し正して近くに控えているその侍女に声をかける。

「残されてもかまいませんよ?」

侍女は気軽に答える。

残していいって……そんな賛沢な事したら……

と、気がとがめる。そして訊いてみた。

「残したらどうするの?」

「ごくりと喉の奥が鳴る音が脳に届いた。

「捨てます」

余りにあっさりと答えられ、頭の中が真っ白になった。

「何でそんな事……」

と言いかけたが、これがこの世界の、この王宮の方針であるのだと瞬時悟ったため、これ以上何も言い返せなかった。

「わかった。これとこれ。この分は食べるから、後は下げてください」
幾らか選んだ食器類を掻き集め、残りを下げさせる。

今までこんな事を言う事がなかったためか、訝しげな表情をした侍女は言われるままその言われた以外の食事を下げた。

「これからは、これだけの分量で良い。余ったものは、みなで食せ。いいな！」

オレの言葉に有無を言わさない何かを感じ取ったらしく、反論する声は聞こえてこなかった。

食事は、さすがに宮廷と言うだけの事はある。しかしオレには、この西洋の食文化についていけるのか？それが問題であった。

昨日からのこの変化にとんだ世界、
これが夢ではない事が分かり、

『もうどうにでもナレ！』

と一部投げやりになりつつも、自分の立場はわきまえるしか無さそうだと腹を括ったつもりだった。

「はあ〜」

そのつもりだったが、次にはため息が漏れていた。

戴冠式のリハーサルは、程なく事を終えようとしていた頃の事である。大僧正の念仏はいつまで続くのかと呆れながら頭をまわし肩をほぐす。

横で見えていたらしい宰相の職に付くケルトが、

「ん、おほん！」

と咳払いをする。

長く続いた念仏が終わりを告げ解放されるといいう時、大きな雷鳴

が鳴り響く。そして一人の将校がそれにも負けず大きな音をたて、広間へと入って来た。

ざわめく人々を誅するかのようになり宰相ケルトが、「何事だ！今が何をしている時なのかわきまえよ！」と場を制した。

静まる人々。その中で跪きながらも答える将校。まるで、映画のワンシーンの様に感じる。

「申し訳ございません。只今国内に『クリアートン』の賊が入り、第一皇子を差し出すようにと……さもなくばこの国内を焼き払って回るとの緊急の使者が参りました！」

慌てているためか、広間に響き渡る声。

「なんと……」

「陛下が臥せっている今、このような事態になるうとは……」

この突然の事にケルト宰相は言葉を濁す。

『密告者でもいたのか？』

と周りの貴族達が騒ぐ。

再びざわめく部屋の中、凜と響く声がそれを制した。

「ボクが、身替わりに出る」

それがカイルである事は確かめる間もなく分かった。

「カイル様！」

カイル付きの従者の一人が慌てて止めに入った。

「大丈夫だよ。『クリアートン』とは平和協定を結んではいるけれど、『エストラザ』と殆ど交流がない。それに、人質として誰か一人を手に入れたと思うだけだろうと判断できる。ここは第一皇子であろうがなんだろうが関係ない。だから、心配は要らない」

威厳のある発言。

「カイル……」

オレはそのカイルの様子に息を飲んだ。

「それでは、カイト星子。御決断を！」

『しーん』と静まり返る。誰もがオレの言葉に耳を傾けていた。
「……………」
オレは目を背け黙り込んだ。

なんて事だ。この決断をオレがやらなければならないとは……

眠気なんか一瞬で吹き飛んでしまった

「カイト皇子。ここは、カイル様の言う通り。一時の安定をはかるためにも、この事をカイル様に委ねてみてはいかがでしょうか？ …… 『キリアートン』の真の目的が掴めない以上、カイト皇子に出で行かれては困ります」

宰相ケルトの言葉。その言葉を聞いても、未だオレは考えていた。

…………… 未だに慣れないこの世界でこんな重大な事をひつかぶらなければならぬなんて…………… あ
れっ？でも大事な何かを忘れていている事があるような……………

決断を下せないまま沈黙は続く。

「カイト皇子…………… ボクなら平気です。ですから、このまま言う通りにさせて下さい！」

答えの無いオレに、カイルのその言葉の後を繋ぐかのように、

「カイル様の言う通りです。ここは今暫くカイト様には辛抱して頂き後々の事を考えて頂きましょう」

とは、宰相ケルト。

「…………… わかった。カイルの申し出を聞こう。ただし、条件がある」
言ってみたものの条件とはどうするものなのか？ 適当に言ってみた。

「条件とは？」

「その使者と一同会いまみえての会議だ！」

「莫迦な！！何をおっしやっているんですか！」

宰相ケルトは声を荒げた。

「皇子が出て行く必要はありません！それほどまでに気にされてい
ると言うのであれば、私がすべてを取り持ちます！」

このまま俺の言う事など聴けない！と言いたげに広間の中央に出
て、

「これより、カイト皇子の代わりにこの私、宰相ケルトがこの儀を
取り持つ。今の皇子に決断は任せられぬ事は皆の者も判るであろう。
したがって、カイト皇子の代わりにカイル殿にこの任を仰せ伝える
！」

まわりでざわめきが起こる。

「有り難き宰せ……ケルト宰相！」

カイルはそう言い残すと、隣に控えている従者を三人程連れ立ち
その場を将校と供に去って行った。

「カイル！」

そう呼ぶ声が聴き届けられていないかのように振り返る事なくカ
イルは扉を背にしていた。

それから後、オレがカイルの悲報を知ったのは三日後のことであっ
た。

#3カイル

カイル

緑が色濃くなるそんな時期に産まれた彼は、^{カイル}宮殿の端の暗い部屋で産まれた。

母が陛下の側室であったため、正室である妃の目に触れないようにとの配慮であった。

正室にはまだ子供ができず、その事が特別な意味で重荷となっていたのである。

しかも産まれたのが男の子という事であれば目も当てられない。

カイルの母は野心や派閥争いというような『ドロドロ』とした世界を好まない穏やかな性格で、それは、今この宮廷内にいるような人とは思えない程に……

しかし、生まれた子の事はすぐに宮殿中に広まった。

その事で、正室派の者達から次々と迫害を受け、ついには精神的に参ってしまったのである。

それから程なくして、気の弱くなったカイルの母は、陛下の断わりを受け、この国『エストラーザ』の宮殿を後にする事となったのだ。

もともと宮廷の外で育つて来た彼女にとっては、少しの心の安らぎになるであろうとの配慮でもあった。

しかし、ただし一つの条件がかせられた。

『カイル』は宮殿にて育てる事。

まだ産まれて間もないカイルにとって、母の手から離されて育てられると言つことが、どれほどの悲しみを背負う事となるであろうか？ 生まれたばかりにその事は考えられないにしろ、その後は？

乳母をたて、カイルはその場に残り母のみ宮殿をたった。それは粉雪の舞い散るそんな季節だった。

しかしその一年後、正室に男の子の『カイト』が産まれたのである。

陛下は、内乱を恐れこの子を第一皇子とする事を旨に、ひとまずの内憂になる因子を取り去ったのである。

これがカイトとカイルの由縁である。

カイルが第二皇子としての道を歩き始め、数え年、五年の月日を経た頃、周りもこの皇子の不幸な待遇を思い、母に会いに行く事の承諾を得ようと陛下に意見をもちかける者が後を立たなくなった。

その頃。陛下自身も、成長して行く利発なカイルの姿を見るにつけ、いたたまれない気持ちを日々募らせていた。

それは正妃が目に入れても痛くないというほどに可愛がっている第一王子のカイトを見てきたせいでもある。

「カイルよ、週に一度は、母に会いに行く機会をやるう」

そう言った陛下の顔を、カイル自身幼いまでも心に焼きつけていた。

ボクは不幸なんかじゃない。こんなに愛されているのだから

年端もいかない少年の心は純粹で、一種の悟りでもあった。

そして今でも覚えているこの時の母の悲しき姿。

カイルを手放してからの母ミレディーのやつれ果てた姿が訪れた簡素な家のベッドの上に横たわっていた。

「母上！」

と、駆け込んで捕らえたミレディーの手は痩せ細った骨の固まりで……心労のみがこの姿を作り上げたのだという事を、周りの侍女た

ちより知らされる。

カイルにとつても、周りの侍女達にとつてもそれはかなり居た堪れないものであった。

「ミレディー様！カイル様ですよ！」

そういわれる事で初めて目を開いた。ミレディーの生気の無い瞳。そこに映り込んだ自分の姿が彼女には一体どんな風に届いているのだろうか？

カイルは今の自分を見て欲しいと願い、そして顔を覗き込んだ。

「母上！カイルです！父上の承諾を得て、週に一度母上のもとに通つても良い事になりました！」

未だ小さいその手で、母の骨張った手を握り締めカイルは告げる。しかし、母の声を未だ聴いていないカイルは恐る恐る母の骨ばった顔を見詰めながら、

「母上も、ボクに会いたかつたんだよね……これからは欠かさず来るから、だから早く元気になって、そしてこの手でボクを抱き締めて！」

その時母の顔にかすかな紅が差したように思えた。

「カ……イル？」

弱々しい声だが、カイルの耳にはハッキリと届いた。

「ミレディー様！」

普段、声もろくに出す事がなかったのであろう……周りの者達は嬉々として喜んだ瞬間でもあった。

「ほ、本当に、カ・イ・ルなの？」

細い手に力がこもる。

「私の、カイル。大きく……なつたのね……」

「はい」

「ごめんなさいね……私の心がもつと強かったら……お前と一緒にいてあげられたのに……」

周りから喜びの声と、嬉し泣きをする者の声があがった。

「心配しないで、ボクの事は。みんな良くしてくれてるよ。だから

ほらっ。母上も早く元気になって！」

ミレディーの頬に一筋の涙が伝う。

「ありがとう。大丈夫だから。カイルに会えるんだもの……一刻も早く元気にならないとね……？」

「母上！」

感動の対面をきっかけに週に一度『蒼の日』が来る度にカイルは母の元を訪れる事となった。そしてそれと共に、ミレディーの容態も見る見ると善くなっていった。

三週間もする頃には一人で起き上がって辺りを散歩するまでにも回復していた。

そしてこの日も、カイルは母に会いに城下の家までやって来ていた。片道歩いて三十分程もかかるといふ険しい道のりをモノともせず、一途に通っていた。

この国『エストラーザ』は、北から東を山。西を砂漠と言う風に囲まれる緑の多い平野に位置した国であった。

農作物は、豊かな大地に恵まれて育つ。その、少し下った南には海があり他国との貿易を糧に商人の街としても栄えていた。

ミレディーのいるここは、今はまだ統治はされていない。後『キリアートン』よりの、北に位置する山のふもとにあり、気候は『エストラーザ』の温眼なものよりやや厳しい。

いつしか季節は、秋になっていた。

「母上！見て下さい」

ミレディーの前に差し出されたのは、裏の林の中で見つけて来た野草類であった。

「これって、この時期にしかとれない薬草なんだって。母上、これを飲んでもっと元気になって下さいね！」

「まあ、カイルったら泥だらけになって……ありがとう。そうさせてもらおうかしらね。ふふふ」

カイルは、会いに来る度に元気になっていくミレディーの姿を見

ては嬉しくつてたまらなかつた。そんな二人を、周りの侍女達も暖かく見守っている。

「カイル様。あなたがお越しになるので本当にミレディー様、見る見る善くなられておりますよ」

その言葉に、

「そんな事無いよ。ボクだけの力なんかじゃない。みんなが母上を元気づけてくれるからだよ！これからも母上の事よろしくお願いいたします」

と返す。

「そんな、とんでもございません。カイル様からそんな言葉をいただけるなんて……私どもはなんと幸せ者でしょうか……」

その言葉を聞いては、カイルの身を心から案じた。

本当なら、母子共々同じ場所で育って良いものを……何故に神は、こんな運命の元にこの二人を投じたのか……その事を呪いさえする。それほど、侍女達の目に二人が不憫で仕方なかつたりした。

「カイル。お城では今、どんな事をしているの？」

とミレディーはいつもながらにカイルの近状を問う。

「はい。今は収穫祭の真つ只中で宮中も慌ただしくなっているんです。だから、その準備のお手伝いをしています」

「そう、もうそんな時期になったのね」

と、遠い目をする。

簡素な小屋の窓辺から屋根の上の小鳥のさえずりが聞こえて来た。のどかなひととき。

「母上はいつもどんな事をされていたのですか？」

真直ぐなカイルの視線に戸惑ったようなミレディーは、暫く考えるように目を閉じた。

「そうね、いつも祈っていたわ。来年もまた今年のように豊作でありますようにって」

目を閉じて言ったその目蓋は少し思い出に耽っているかのように揺れていた。

その様子をカイルなりに受け止める。

「母上、明日は獵に出て来ます。昨年、初めて行ったのですが、上手くしとめられませんでした。どうやら狩りは苦手なようです。何だか動物達が可哀想な感じがして……弓が上手く引けないのです」と頬に手を掛けミレディーの事を見た。

「優しい子。でもね、人はそうやって狩りをして、今まで生きてきたの。私も動物の命を簡単に奪ってしまうのって好きではないわ。それでも生きていくための糧になるのだから、その子達も本望なの。カイルも少し強くなりなさい。そうすれば、守りたいと思ったものを守る強い人になれるわ。お父様のように」

そつとカイルの手を取る。

「お父上のように？」

「そう、あなたのお父様。陛下も心優しい方なのですよ。でも、一国のため、守る者達の為に、強くなる事を選んだ。とても強くて優しい方……」

細いミレディーの手に力がこもる。

「母上！ボクも母上を守るために強くなる。だから明日の狩り、一番をとれるように頑張る。きつと次の碧の日には、いい話を持ってやって参りますね」

「ええ、楽しみにしているわね」

しかしこんな会話が楽しく出来るのが、この日で最後になろうとは夢にも思わない出来事が待ち受けていたのであった。

#4 収穫祭

収穫祭

次の日は収穫祭を締めくくる最後の日であった。

収穫祭は一週間にも渡る長い日を経て、各人々の心に情熱と安らぎを与える。

この日はその中でも一番の好天気で、宮殿の若人に活気を与えていた。

そして朝早くから、陛下を従えて多くの者達が一同狩りをする平原で顔を並べている。

「本日は、誠に記念すべき日となりましたよ」

と、陛下に各従者達が唱える。

それは、『カイト皇子』の初めての狩りの日でもあった為であった。

そして、『エストラーザ』の誰もがこの事に注目していた。

「カイトよ、今日のこの日はお前の初舞台ともなる。どんな舞台にしてくれるか楽しみにしておるぞ」

「はい、父上。頑張ります！」

元気な返事をするカイト皇子に、軽く笑顔を見せ、それを合図に陛下一同それぞれの獲物を捜しに四方へと散って行った。

「カイト皇子、ボクがお供いたします」

そう進言したのはカイルであった。

「お前は？」

「カイルです」

「わかった。ついて参れ」

この時初めて会いまみえた二人はまだ幼い六歳と五歳の少年であ

った。

「この辺りで捜してみよう」

「はい、承知いたしました」

そういうと、カイルは獲物のいそうな場所でおびき出すかのごとく、辺りを馬で駆け回る。

『バサリ』という物音を立てると、鳥がはばたく音と共に羽根が辺りを舞い散った。

「カイト皇子！」

その瞬間を見のがすことなく、カイトの引いた弓は、その鳥目がけ一直線に矢が放たれた。

『キイー』という叫び声をあげて落ちたその鳥は、見事、カイトの矢が射止めていたのである。

「お見事です」

「なんてことはない。カイルのおかげだ。さあ次へ行くぞ！」

「はい！」

二人の呼吸はなんとも言いがたく華麗な旋律を描いていた。

次々と現われる獲物を追い落としては、土産のネタとなっていく。幼い二人には楽しい事この上なく、草原での狩りは、何時の間にか、北の地への入り口の森へと足を運んでいた。

暫くして、その事に気付いたカイルが、

「カイト皇子、この地は危のうございます。ここは一度引き返した方が宜しいかと思われます」

危ない地帯に入るとカイトを促す。

「なあーに。なんて事ないじゃないか。それに、こっちの方が獲物はたくさんいるしな！」

カイトは勝ち誇ったかのように次の獲物を探そうと躍起になっていた。

この北の地の領地には、蛮族と呼ばれる民族が住んでると聞かされてきた。その民族は、狩りを主にした食料で生計を立てているだ

けに、いたって獰猛な種族であると伝えられているからだ。そしてこの地の至る所に、そのための罠が張られていることも知られていた。

「カイト皇子、いけません。今すぐここを出ましょう!」

「どうした? あんなこけおどしの噂を信じているのか? それとも、腕に自信がなくて、恐れおののいているのか? それなら今すぐカイル。お前だけでもこの地を後にするがいい!」

カイトは、言っても後に引きそうにない。

「そう言うわけには参りません……分かりました。ではお供いたします!」

さつそうと馬に乗るカイル。

「別に無理する必要はない。恐ければそのまま立ち去れ! オレ一人でも大事ない!」

ほとんど意地の張り合いをしているかのようにだった。

しかしカイトが馬の背を叩く、その時だった。

一瞬、森の奥から『キラリ』と閃光が走ったのを感じ取った。それと同時に馬の嘶きが響き渡った。

その事に瞬時気付いたカイルは、

「カイト皇子つ、危ない!」

そう叫ぶと共に、カイトの前に馬を走らせその光の前に身を投じた。

「うわっ」

荒れ狂う馬から落馬するカイト。

「うっ」

『カッーン』と、背後で音がした。

呻き声をあげ、『ズルリ』と馬から落ちるカイル。

「何事だ!」

落馬して腰を打ちつけたのだが、ただならない呻き声に急いでカイトはカイルの傍に行き抱き起こしたのである。

「カイル!」

「カイト皇子……御無事……ですか……？」

目を押さえて苦しそうな呻き声をあげているカイルに慌ててカイトは、

「何を言っている。オレは大丈夫だ。カイル……そなた……目を……目をやられたのか！」

背後を振り返ると、一本の矢が木に刺さって揺れている。

「カイト皇子が御無事で何より……」

「莫迦！そんな事言ってる場合じゃないだろう！オレの馬に乗れ！今すぐここを立ち去る！」

抱きかかえるくらいななんとかなると思えるくらいカイトは自分を責めた。そして自らの馬にカイルを担ぎ上げカイト自身も馬を跨ぎカイルを前に乗せ今来た道を戻る。

「すぐに主治医に見てもらおう。今しばらく辛抱しろ！」

カイルとカイトを乗せた馬は、北の森を後に宮殿へと向かった。

それから暫くの間カイルを運び込んだ部屋からは誰も出て来る事もなく、静まり返った宮中は事の重大さを感じさせ『ひしひし』と周りをも包み込んでいた。

そこに陛下がカイルの部屋から現われたのである。

『コツリ、コツリ』と足音が廊下中に響く。

「カイト、一体何があったのだ？」

「父上……」

カイトは全ての事の次第を包み隠さず話した。軽はずみな自分の行動の果てに、罪の意識があったからだだった。

「つまりは、お前の我が儘で、カイルは負傷したと言う事だな」

「はい。そうです。すべて、オレの責任です！」

『ピンツ』と張り詰めた緊張した空気。

「お前はこれから先、お前の義兄、カイルの目となつて、行動を共にしろ。それが、私からお前に課す罰だ！」

そう言い残すと陛下はその場を後にした。

「……承知しました」

当然の処置に頭を抱えた。

まさかカイルが、第二皇子としての自分の義兄である事など今知ったという自分の情報の少なさ。これ程自分の身を疎んじ、落ち込んだことは今の今までなかった。無頓着な上に軽はずみな行動。それら全てに自らの反省点を幼きながら感じた。

それから、半時も立った頃主治医がカイルの部屋から顔を覗かせた。

「カイルの容体は？」

瞬時立ち上がり、カイトは駆け寄った。

「傷は大した事はないのですが……ただ、矢に毒が塗られていたらしく……それが『北の森』独特の物で、この地でとれるものではないようです。せめて解毒剤になる物が何であるのかが分かれば……治す事も可能なのですが……実に残念なことです……」

その言葉には威厳さえなくて……次の瞬間主治医を押しつけて、カイトはカイルのいる部屋に駆け込んでいた。

ベッドに横たわっているカイル。それを見て一瞬言葉を詰らせたが、意志を決め、駆け寄る。

「済まない。許してくれ……あの時カイルの言う事を素直に聞いていれば……カイル！オレのせいでお前の身にこんな事が起こるなんて事はなかったのに……！オレ、早く解毒剤を手に入れてきてやるだから……」

カイルの手を取り悲痛な声をあげるカイト。

「カイト皇子？そんなに気に病まないで下さい。ボクはあの時、当然の事をしたままでなのですよ。それより、皇子に大事がなくて良かった……」

あくまで、カイトの事を気に掛けて来るカイルの様子がなんとも印象的で、周りの従者達は悲しみに声をあげた。

「オレの心配はもういい。自分の心配をしてくれ！先程父上と話を

した。これからは、オレがお前の目になる。いつもお前の側にいる。だから安心しろ！」

「カイト皇子？…有り難きお言葉でございます……」

この先、約束通り、身の事以外のカイルの世話は、カイトが行う事となった。

何処に赴く時も共に行動をするようになった。

カイルが母を訪れる時も、散歩をする時も共に行動した。

表向きな行事に出席できないカイルに後ろめたさを感じる事もあったが、それでも、自分が犯してしまった罪に打ち勝とうと自分を向上させる目的に合わせて行事に参加する。

そんな日々がカイトが十五の歳になるまで続いた。

しかし、それが、カイル自身の重荷になっていく事をカイト自身考えてもみない事であったらう。

そして現在。運命の日がやって来たのである。

#5 キリアートン

『キリアートン』

冬の『キリアートン』は、秋の終わり頃から肌寒い風を呼ぶ。木々は冬模様。針葉林の山がまた寒そうな季節を告げてきた。

農作物を、切り開いた土地で刈り入れる事より、山に実る茸や、木の実などを収穫して生活を成り立たせていた。

冬における狩猟はそう簡単には望めないもので、秋の終わりになるまでには、食料となる獲物達を狩り取っては生計を立てていた。

この国は、もともと、『エストラーザ』に住んでいた者達の中から出没した山賊が作った国で、七年前にこの当時の棟梁であった八歳にも満たない少年が一代で築いた国でもあった。そして今、この地は十五歳になったばかりのその少年によって統治されている。

『キリアートン』の国王の名はグエイン・マイル・ド・キイル。国内でこの男程残忍な者はいないとまで称されるほどに、恐れられている者だ。

この男の命令に従わないと、辺りは血の海と化す。噂では有るが、それほどまでに凶暴な国王であるようだ。

この国王の独裁政治に、恐れをなした者達は、一目散で山を駆け下りた。が、すぐ見つけだされ、裏切り者の烙印を押される。

烙印を押された者は、一生陽の目を見た事はない。

それ程この男の国を統一する力は絶大で、それは日を追うことに顕著に現われていったのである。

『エストラーザ』に賊を送り込み、第一皇子を差し出すようにとの使者を送った事は、すべてを手に入れようというグエインの野望のはじまりである。戦えば、必ずと言っていい程『キリアートン』に勝敗はあがる。そこを無血で手に入れようとしたのは、珍しくこの王らしくない采配であると言えるよう。

「グエイン国王、この度の使者。これはなんとした事か？」

宰相メイディンは余りに急なことに王に詰め掛けた。

この男はグエインにとつて信頼出来る配下の一人である。

「無血で国の一つを手に入れる。これが我が考えだ。何か不満でもあるのか？」

「不満などございません。只、国王らしくない方法をとっているの
で疑問を持ったまです」

『チラリ』と様子を伺っている。

「しかし…… 『エストラーザ』は、この要求を呑むのでありましょ
うか？もしかすると、変わりの者を立てて来るかもしれませぬ」

グエインは、考えている事など分かっているとでも言いた気に、

「そうだろうな」

と軽く答える。

「そうだろうな……とはどう意味ですか？まるでそれを確信している
かのような……」

訝しげな顔でメイディンはグエインに向けた。宰相らしくない表
情だった。

「それを望んでいるのだ。そうすれば、この上なき楽しみが増える
というもの。偽りの皇子。そんなものをよこすとは何事だ……とな」

舌なめずりをして答えるグエインの様子にただならぬ冷や汗が額
を伝う。

「グエイン国王。初めからそれを目的に……？」

グエインは何を今更分かり切った事を……とでも言うように足を組
み直す。

「それで、どうなんだ。皇子をこちらによこすつもりが『エストラ
ーザ』にあるのかどうなのかわかったのか？」

グエインの少しイライラしたような様子に、

「明け方、使者が帰って参りました」

「して……如何なる様子だ？」

「承諾を得たようです」

「そうか、して、皇子はいつ？」

「半刻もすれば、従者三人を引き迎れてやってくるそうです」

『ふむ……』と考えるような素振りを見せるゲイン。そして一つ咳払いをすると、

「これより正装をする。侍女を部屋へよこせ！」

座を離れマントを翻した。

「承知致しました」

それだけ言うと、宰相メイデインは、ゲインとは反対の方へと歩き始める。

「国王が正装されるそうだ。早く用意をいたせ！」

そう言いながら、この部屋を後にした。

『コツリコツリ』と踏みならずゲイン国王の靴音が広間中を響かせてやって来たのは、

カイル第二皇子が到着して暫くしてからであった。

『エストラーザ』と比べ狭い広間のその奥。二、三階段を上った所に王座はある。少し暗い広間で、少しかび臭い臭いが鼻に付く。周りは、騎士と言うには程遠い豪傑な男が、鎧を身に纏い左右カイル達一行を囲んでいる。

暫くすると、右奥の扉から国王と宰相が現われた。

カイルの目にその姿は映らないが、靴音で想像するだけは出来る事であった。

「そちらにいるのが、『エストラーザ』の第一皇子であるか？」

宰相メイデインがまず声をかける。

「いかにも、私が皇子カイトでございます」

広間に響き渡る声高いカイルの声。

「間違いなく第一皇であるか？」

もう一度訊き返す。

「間違いございません。われこそ第一皇子でございます」

『しーん』と静まり返る広間。本当に皇子自ら出向いているとは信じられぬと言った感じだった。

「グエイン国王と申されましたな。我が皇子をいかなさるおつもりでしょうか？これは、契約違反と言うものではありませんか？我が国との不可侵条約は『サリバーン』を合わせた三国間で結ばれております。さすれば、今すぐわれらを解放して頂きたくございます」カイルの従者の一人、サハンは恐れ多くも第一皇子にこの申し出は不可解だとグエイン国王に詰め寄る勢いで。

「そんな規約はたった今破棄する。皇子……そなたはカイト皇子ではない！このグエインの眼を欺こうとは笑止千万！」

その言葉に周りかざわめいた。

「それは、どう言う根拠で申されるのでしょうか？私は第一皇子カイトに相違ございませんが！」

物おじもせず、一歩も引かないカイル。ここで引いたら、グエインの思う壺だと悟った。

「怖いもの見たさで参ったか……それも一興」

グエインは、カイルの前まで歩みでた。そして、カイルの顎を引き上げるようにして詰め寄る。

「お主がカイト皇子でない事は下調べ済みなのでな。判っておるのだよ」

再び謁見の間にどよめきが走った。

「よくその見えない目でやって来られたものだ。カイル皇子。褒めて遣わずぞ。しかし、約束の皇子ではない。これこそこちらの申し分に逆らった証拠！」

グエインは、カイルの端正な眼前に分厚い腰の剣を引き抜いて押し付けた。

それに怯む様子を見ることは出来なくとも感じ取る事ができるとおくびも見せないカイル。

「この者どもを引っ立てい！」

そうグエインは言い及ぶと、直ちに周りを取り囲んでいた従者ど

もが四人を捕らえた。

すれ違い様、グエインは、カイルの怯える事もしない横顔を冷静に見据えた。

少しも変わらないな……

目が見えない恐怖。この者にはそんな事はなんと云う事でもないであろうか……と、グエインは心中思ったのである。

「ただちにもう一度使者を出せ！偽者の皇子に三日の猶予だけ与える。それを過ぎれば、彼の者の命保証しないぞ。そして今すぐ平和な世を続けたくば、今すぐ考えを改めるんだな。とそう伝えてこい！」

そう言つと不敵に笑いながら身を翻し奥へと去っていったのである。

#6 エストラーザ

『エストラーザ』

カイル皇子と、供の従者三人が囚われの身になってから早半日が過ぎていた。そして、それを伝える使者がやって来たのは夜半過ぎの事であった。

「残念ながら『キリアートン』を騙す事はできなかつたようですね
宰相ケルトは頭を抱えていた。

「どこかに、我が国の事を見ている間者がいるのではないでしょう
か……そうでなければこうあっさりで見抜かれますまい」

皇子カイトを欠いた会が、ここ宰相の狭いお香がかつた一室で行
われている。

「しかしこの事をカイト皇子抜きで話されてもいかなものでしょ
うか……？」

皇子の側近、クルトがボソリと呟いた。

「カイト皇子に内密に事を進めるのは、やはりこれからの『エスト
ラーザ』にとって不運を招く事になるかも知れませんが」

同じく批判の声を発するカイトの従者、トール。

「しかし、今カイト皇子の耳にこの事が入ったとなれば、カイル皇
子奪還の戦が勃発することこの上ない。ただでさえ、カイト皇子は
この話が一番に反論を唱えた。しかしこの平和な国に、戦をする部
隊を育てている時間などないではありませんか？」

と宰相ケルトがこの申し立てを遮る。

「確かに、今、記憶さえも失くされている不安定なカイト皇子の耳
に入ったとなれば、自ら動く可能性だってあり得ます」

困ったものだと一同頭を抱えた。

「せっかくのカイル様の行為がすべて水の泡」

「どうするものか……」

「ここはカイル様に犠牲になってもらうのが、一番の良案なのだ
……」

「この国のためにか……それも致し方ない」

「しかし、この国を守るための算段がその後あるのでしょうか？」

とは、カイトの従者クルトの言葉。

「『キリアートン』のことだ、黙ってはいないだろう」

「ふむ。それはあり得る」

周りの者達は、またしても頭を抱える。

「やはり、一度カイト皇子に意見を求めましょう」

クルトがケルト宰相に言葉を繋ぐ。

「そうするのが一番かも知れぬな。どちらにしる、国の一大事。で
きれば、陛下も御一緒していただければいいのだが……」

だが、その頼みの綱の陛下は末期の病床についている。意見を求
められる程の余力がない。

「明日、議会を開く。皇子にその旨を伝えて参れ」

結局この決断を出した、が、しかしこの状態を向上するための算
段を思い浮かべる事は出来ないだろうと、宰相ケルトの頭にはあっ
た。

翌日。この議会の重圧の中、カイト皇子はさっそうと現われ、事
の次第を聞き入れた。

「だから言ったんだ！ああ……なんと言う事だ……」

そんなにもオレの心の中の義兄と言う存在では無いというのに、何
故かあの時のカイルの後ろ姿が脳裏を掠めた。

「『キリアートン』の国王グェインという者は、非情に残虐な性格
をしているそうだな」

「はい、一代にして国一つを統治した男で、年もまだ若いそうです。
確か、カイト皇子と同じ年ではなかったでしょうか……」

一貴族がそうのたまった。それに対し、

「さて皇子、いかがいたしましたでしょう。こうなった以上、一刻の猶

「予もございません」

「いらぬ事を……とでもいう風に、これからの事をどうするべきか？それを求めて宰相ケルトは促す。

「このままでは、カイル様共々我らの国は崩壊いたします」
事態の重さにオレ自身頭を悩ませた。

「オレには荷が重すぎる……誰か良い知恵を授けてくれないだろうか……」

などと、一言も発せられない自分に腹立たしさを感じた。そんな時ふと思いついた。

「確か、我が国と他の二国は、契約を交わしていると聞いたのだが……」

「確かに。一度我が国『エストラーザ』『キリアートン』『サリバーン』の間で、五年前不可侵条約を締結しております……ですが、一年程前からこの条約に反する輩が現われて参りました」

「それに対して、国は何をしていた？」

「……」

「黙っている所を見ると、明らかに、何の処置も施していないのだな！」

その言葉に、宰相ケルトが、

「しかし皇子、それらの者達が入りする通行手形には、何の偽装もございませんでした。何かを成すにもこの国の手形がある限り法には触れません」

と、少し自嘲げみに答える。

暫くの間周りにざわめきが起こっていた。

「しかし、今回の事は確かに侵略を受けているのだぞ！ならば、ここはもう一度三国間で話し合いをすべきではないだろうか？いやそうすべきだ！」

オレの言葉に静まり返る厳格な会議室。

「直ちに、二国に使者を出してこの『エストラーザ』にて話し合いを持つように伝えよ。これは我が国の皇子にして国王となるカイトの意志だ！さも無くば、オレ自身『キリアートン』へと出向き、グエイン国王と会い見える。それが嫌であれば直ちに行え！以上！」
そう告げると、オレは複雑な気分です席を立った。

その昼、直ちに各国に伝令が回った。『サリバーン』からは、その夜に使者が現われ受諾の返答を返して来た。

しかし『キリアートン』からは次の日になっても返事をよこす気配がない。

もう一日待つ事に決議は固まった。が、次の日になっても『キリアートン』からはとうとう使者は訪れなかった。

「期限切れだ。明日、オレが直接話をつけて来る。供は不要だ。グエイン国王の意志を直接訊きに参る。よいな！」

そうして、三日目の朝、オレは『キリアートン』へと旅立った。それが、この後とんでもない事のはじまりになるとも知らずに……

#7ゲインとカイル

ゲインとカイル

栗毛色の髪に白い肌。

そして、穏やかな緑色の瞳は今も忘れる事が出来ずにいた。初め、天使が自分の傍に舞い降りたのかとも思えるくらい、それは印象的であつた。

実の所『キリアートン』の国王ゲインにとってカイルは命の恩人であつたのだ。それは未だ、この地方が国として成り立たない頃の話。ゲインが山賊として、『エストラーザ』や各地を荒らしていた時の事であつた。

仲間の一団を従えて南下していた際、自ら張っていた狩猟用の罠にかかつて、負傷してしまつたゲインは、暫く、仲間とはぐれて敵から身を隠しつつ山を徘徊していた。

「くそつ。こんな時になんというドジをオレは……」
身に纏つた衣服を切り裂き、その布を負傷した足に巻き付ける。

こんな時に敵にでも見つかったら厄介だ

ただただ、そんな事を考えていた。

そんな折、足下から声が聞こえて来た。

「カイル！そんなに遠くに行つたら危ないよー！」

まだ年端も行かない同じ年齢くらいの少年の声であつた。

ちっ……なんて事だ、見つかるわけには……

そこに、『ガッツ』と、目の前の草を分け入る少年が目に入った。

栗毛色の長い髪を後ろで一つに束ねた少年だった。自分とそう年がかわらないのではなかるうか？いや？少し年下か？

「大丈夫だよ。この辺りは慣れてるから！早く母上に薬草を届けたいんだ！」

そう言うつと、足元に生えている薬草を手探りで探している。

「確かこの辺りに多いんだ。あとね、傷口を癒す薬草もあるんだよ。さつきカイト転んで怪我しただろ？ちょうど良いから一緒に探してあげる！」

草場の陰になっているグエインの姿は見えないらしい。とそう思い込んでいた。

「あれっ、そこに誰かいるの？」

息を潜めていたはずだった。それなのに気づかれた？

「変だな？なんだか気配がするんだけど……」

目が見えていないんだ……

と気付くのにさほど時間はかからなかった。

『ガサッ』

と小さく葉が擦れる音が響く。

「声を出すな！」

グエインはカイルの腕を取りその二の腕を後ろにまわし身動きがとれないようにした。

「ここにはお前だけがいるのか？」

と、声のトーンを落とし、小声で訊く。

「…うん。ボクともう一人、ボクの弟がいるんだ」

『ギュッ』と握りしめられたその手の力が抜ける。

「お前、目が見えないのか？」

と切り返す。

「うん、見えないんだ。幽かに光を感じたりはするんだけど……」

「そうか…悪いが弟君に、こちらには来ないように言ってもらえな

いだろうか？」

突き付けられた剣を背中に感て、事を察したカイルは、

「カイトっ！悪いんだけど、母上の所に戻って！半刻もすれば戻りますって伝えて来てくれないかな？ボク、もう少しここで薬草を摘みたいんだ！」

とつさに機転を利かせたらしい、それとも何か？カイトなるものに危害を加えさせないためか？

「なんだ？そんなに摘んでもまた一週間後に来るんだぞ。余っちまう！良いから早く帰ろうー」

不審に思ったカイトは『ガサガサ』と音を立ててこちらにやって来る。グエインは、この後の事を考え、剣をよりきつく握り締めた。「わかつてる。もう少しだけだから！良いから気にしないで、先帰っていて！ボクもすぐ帰るからっ……」

少し上ずったかも……ともカイルは思えたが、

「わかつたよ。それじゃあ気をつけるよ、慣れてるとはいえ、いろんな所に怪我する要因があるんだからな」

しょうがないなと言う声色を残して『ガサガサ』と音を立てながらその場からカイトは去っていった。

「ふう……」

カイルは息をつく。

「取りあえず一息つけるな……」

グエインもその事に少しだけ安堵を感じたのかもしれない。いや、この者を囷に逃げることにくらい出来たはずなのに、負傷した脚でそこまで融通は利かないのも事実だ。

「ねえキミ、どこか怪我をしてるんじゃないの？」

先程からこの場所を立とうとしないこの者の行動に疑問を持ったカイルは問う。

「見せて。と言っても見えないんだけど。ちょうど、傷口に当てるための薬草を摘んでいるんだ。少しは善くなるかも……」

カイルは籠からその薬草を選別し、取り出した。

グェインは、ためらいながらもこの少年の言う通り、傷付いた脚を見せた。

「かなり、傷口が深そうだね……」
巻き付けている布から滲んだ血がべつとりとカイルの手の平につく。その感触で判った。

「早くお医者様に見てもらった方がよいよ。この辺りって、狩りをするための罠が多く仕掛けられてるらしい。僕も以前その罠に掛ってしまっただ」

と、何故だか悲しく微笑むカイルに、そうなのか。と少しだけ納得した。

「知っている……所で、お前はどの辺りに住んでいるのか？」

グェインは。柄にも無く他人の事に興味を持ち訊いてしまった。

「母上がこの近くの山荘に身を寄せてるんだ。それで週に一度ボクがこつちまで足を向けている」

「目が見えないのにか？」

少し疑問に思ったグェインは問いかけた。

「弟が……と言っても義弟ただけだね…彼が、力を貸してくれてるんだ」

見えない目でどうかな？と先ほど巻こうとした布を外して薬草を傷口に刷り込むように当てた。

「イツ……」

「ごめん。本当は、この葉を摩って傷口に当てるのが本当なんだけど…今のボクの手ではこれが精一杯なんだ……」

傷口を塞いで、新しく自分の衣服の右裾を口で引き製きその箇所に巻き付ける。

「はい、できたよ。これで少ししたら傷口も少し楽になる」

そこにあるであろう。その少年の顔に徹笑みかけた。

グェインは戸惑うしかなかった。

「あ、あり……がとう」

普段言葉に出して言った事もないので、ぎこちない言い方になっ

た。

「お前の名前……なんて言うんだ？」

さつき叫んでいた少年の名前で知っていたはずなのに、自らが訊いておきたかった。

「名前？ボクの名前はカイト。カイト・ラ・シユメール。君の名は？」

その名を聞き、戸惑ったように答える。

「オレの名はグエイン。グエイン・マイル・ド・キイル。お前とはまた会う機会がありそうだな。行って良いぞ。次会う時は……」

その先が言えなかった。

しかし、緩んだ腕から離れたカイルはそのまま振り向く事なくその場を立ち去って行った。

運命とは、かくも残酷なものだろうか？『エストラーザ』の血筋の者に助けられる事になるとは……

しかし、時は流れていく。ただ一定の方向にだけ。

運命は変える事が出来ないのである。それはこの地方に語り告げられたものであった。

そんな事を思い出し、グエインは、溜め息をついていた。

「どうなされた。グエイン国王？お珍しい」

宰相のメイデインは意外なこの国王の様子にそう言葉を投げかけってしまった。

「本日、カイト皇子自らが参るそうです。これで我が国が『エストラーザ』を手中に治めたも同然ですな！」

勝ち誇ったかのように言うその顔はほころんでいた。

メイデイン宰相も、この国を建てた時グエインの側近くで仕えていた将校で、今では宰相の位にもなっていた。年もグエインとさほど変わらない。若くして実に優秀な宰相であった。

「今年の冬への貯えはどうだ？」

珍しくも国内の事を訊くとはどうした事か？メイディンは、疑問に思ったが、

「今年も例年になく守備は上々です。陛下が心配される事は何一つございません」

「そうか……」

グエインはそっけなく席を離れた。

「暫く一人になりたい。席をはずしてくれ……」

この時のグエイン国王の心中など何一つ掴み取れなかったメイディン宰相は、

「承知致しました」

とだけ言つてこの場を離れて行った。

この広い講堂に残されたグエイン国王は、もう一度座につき頭を抱えていた。

この国で、圧倒的力を有する残虐な王ともあるべき姿とも思えない程……それは余りにも小さい姿であった。

#8 サリバーン

『サリバーン』

年中真夏のように暑いこの地方は、西に行く程雨さえ降らないそんな地帯であった。民のほとんどは、『エストラーザ』寄りの東側に居を構えている。また、オアシスを求め歩く遊牧民は、夏は東に、冬は西に移動する。そんな、戦いを微塵にも意臓しない平和な国であった。

食料になる作物は雨期に麦を植えては取っている。しかし、それではほとんど生活が成り立たないので、隣の国『エストラーザ』に半分頼っていた。

現国王ハザウェイは、おおらかで懐の広い男である。一つ間違うと、民衆に埋もれても気づかれないほどに、国王としてより人間味のある人物かもしれない。

そのためか、民衆受けする人物でもあった。

そして、この人物の父の名はマクエル・ラ・シユメール。

つまり、『エストラーザ』の現国王ラシユエル・ラ・シユメールの弟であり、『エストラーザ』とは親戚格の国であった。

その、弟であったマクエルは、兄のラシユエルの政治の仕方に不満を持ち、配下を引き連れて、この『サリバーン』を建てた。

今では亡きマクエルの事を、その子ハザウェイは、勇敢な人物として後世の書に記してはいるものの、その政治とは打って変わった国政を敷いている。

つまりは、『エストラーザ』無くして、この国の政治、そして生活は成り立たなかつたのであった。

そして現国王には二人の子供が居た。

長男にフエンディ、長女にウエンディと言う子らを授かっていた。「お前達もそろそろ成人をする頃だな」

フェンディは今年で十五歳。妹のウエンディは来年十五歳になる。
「はい、父上！」

聡明な瞳をしたフェンディははっきりした口調で答える。

「私も、今年で十五になります。そろそろ、国内の仕事も覚え、父上の片腕になりたく思います」

そう答える姿勢は、この国を背負って立つ皇子として充分に足る程であった。

「はっはっは。よくぞ申した。近い内にお前には一働きしてもらおうだろう。心しておけよ！」

「はっ」

その隣に座している少し引つ込み思案なウエンディはその様子を暖かく見守っていた。

「それからウエンディよ、そちもそろそろ嫁に行く準備をしなくてはならんのだが……お前の方でこの男なら……という者はおらぬのか？」

突然自分に話を振られ戸惑うウエンディ。

「いや、何……ちょっとした縁談を考えてはおるのじゃが……そちに意中の男がいては、申し訳ないので……」

少し控えた言い方は、ハザウェイ国王らしい優しさを秘めていたりする。

「意中の男の方などと……そんな方おりません」

少し顔を赤らめたウエンディは恥ずかし気に下を向いた。

「そうか、わかった。それならば、父が探して来た男であっても良いと申すのだな？」

微笑みながら、ウエンディに聞き返す。

「実は、この国と『エストラーザ』の国間をゆるぎのないものにしたと思うてる。出来れば、国王となるであろうカイト皇子はどうであろうかと思案していた所だ」

下を向いていたウエンディその言葉を聴くや否やはすぐさま顔をあげた。

「カイト皇子と申しますと……一度『サリバーン』に、雨季祭で参られたあの方でございますか？」

「そうだ」

ウエンデイの頬が先程よりも赤らんだ。

「不満か？」

「いえ、とんでもございません……あの方が、私の夫になって下さるのでしたら喜んで、お受け致します」

と、そんな言葉がウエンデイの口からもれる。

「はっはっは。なんだ、お前も気に入っていたようだな。気に病む事などなかった。実は、そのような話を持って来た事があるのだ」

そして、今までのハザウェイが考えていた事のいきさつを伝えた。

「良い話じゃないか」

フエンデイが相槌を打つ。

「しかし、カイル皇子はこの事をご存じなのですか？」

少し不安そうに、ウエンデイは訊き返す。

「そのことであるが、皇子にはまだ知らされていないようだ」

「そうですか……」

『エストラーザ』からの緊急の使者が現われたのは、そんな平和な話をしている頃だった。

「それでは、『キリアートン』が、反乱軍をよこしたと申されるのか！」

ここ広間の一角で、一同にざわめきが起こる。

ここ『サリバーン』の広間に『エストラーザ』からの使者を迎えその報告を聴いていた。

「グエインめ、今を期に兵を挙げて来たのか……侮れん奴だ！」

「つきましては、二日後、緊急に三国問での話し合いを持つこととその旨をお伝えしたく参上つかまつりました」

「確かに、分かり申したと伝えて頂きたい。我が国は、今、戦をす

ることは望んでおらんなのでな。そう伝えて頂きたい」

「承知致しました」

『エストラーザ』からの使者が立ち上がり、広間から立ち去る。未だ、この事態を飲み込めない人々はざわめきを止めない。

「皆のもの、静まれ！」

この声の主フェンディは広間の中央に進み出て、制した。不安を漏らす者どもはその言葉に眼を向ける。

「この国は、誰の手にも渡さない。今までの平和な国を死守する事態の時が来た。グエインの企みを討つためにも我は、二日後の会議に望む！安心せよ！」

国王ハザウエイはフェンディの後ろの座から立ち上がる。

「父上！私もお供致します！」

フェンディがハザウエイを振り返った。此処で自分の今までの成果を見届けてもらいたいが為でもあった。

「ここは後学のためにも、私をお連れ下さい」

頼もしい面持ちのフェンディの瞳が、ハザウエイの前にあった。

「わかった。明日にでも『エストラーザ』に旅立つ。そなたも用意を致せ！なれば、我と、フェンディが不在の後のことは、宰相トレビユウに任せる。後の事、宜しく頼むぞ」

「ははあ！」

宰相トレビユウの声が辺りに響き渡った。

「皆の者聴いておるな！陛下のおられぬ間、全て私の意志が陛下の言葉と聞き入れよ。ここ『サリバーン』を統括する。気を引き締めて陛下の帰国を待つのだ！」

こうして『サリバーン』の民はこれからの事を念頭に置き、一つの心になる意志を固めたのであった。

#9 裏切り者

裏切り者

『キリアートン』への道のりはまさに長く険しいものであった。

オレを乗せた馬の息があがって来た頃、近くに流れる川の元で休憩をとっていた。

「よしよし、お前もよく走ったな」

今まで自分を乗せていた馬に思わず礼を言う。

実は道中、『エストラーザー』と『キリアートン』との国境で一度休憩をとっていた。

ここでもう一度休憩をとっておこう

そう決めたオレは、正直かなり疲れていた。体は覚えているとは言え、初めて馬に乗ると言うのに、この長く厳しい道を行く事になるとは……

大分冷え込んで来たな

朝、城をたつたのだがもう夕暮れだ。ここから先、どれだけ冷え込むのだろうか？そんな事を少し考えた。

しかし、自分もよく決断したな

この見知らぬ世界で、右も左も判らないと言うのに、供一人連れずここまでやって来ていたからだ。

一応地図らしき物を持ってはいたが、そうは役に立つ物でもなかった。きっと誰も『キリアートン』へと足を運ぶ者がいなかったの

であろう事をそれを見て実感した。

「さてと、急がなければ。日が沈んでしまっ」

呟くと、馬を跨ぎオレは『キリアートン城』へと動き出す。

『キリアートン城』に到着するのはそれから、二、三時間後の日も暮れた頃であった。

目の前には重厚な門が目の前に立ちはだかっていた。

周りには、城を守る兵が見下ろすかのように立っている。

「我は、『エストラーザ』のカイト皇子である！直ちにこの門を開け！ゲイン国王にお目通り願いたい！」

オレは馬を降り、辺り一面に響き渡る声で開門を要請した。

その『キリアートン』の兵は本当なのか？と訝しく何やら話をしているらしかったが、暫くすると、

「開門ー！」

と号令を出して、城内にオレを招き入れる。中にいる兵が、オレの周りを取り囲むように集まって来た。

「カイト皇子、こちらへ！」

中で一番格が上であろう兵が先導する。暫くすると、もう一つの門が見えて来た。

「『エストラーザ』のカイト皇子が参られた。開門願いたい！」

なんと嚴重な守りだ

『エストラーザ』の城の事を思い起こす。緑溢れる平野に、このよ
うな門は無い。有るのは、背の高さほどの門。

それだけゲイン国王は警戒心旺盛な人物だと窺えるな

相對した時の事を思い描いていた。

どう切り出すか、もう少し考えておかなければ……

第二の門を潜り終えると狭くはあるが開けた街が、眼前に広がった。

こうして、『クリアートン』の街に入り三十分後には、国王のいる広間へと導かれていったのである。

暫くすると、奥の扉が開いて待人が現れる。

「これはこれは、カイト皇子よ。よくお越し下さいましたな」

体格の良い少し隙湿な黒い面影を宿したグエイン国王の第一声はそう悪いものではなかった。が、気は抜けない。

漆黒の髪をしたグエイン。その表情は、何かを判別するかのよう
にオレを眺めていた。

「グエイン国王よ、この度のこの申し出、どう言う事であるのか説明を頂きたい！」

厳しい面持ちで、オレはグエイン国王に進言する。

「ははは、カイト皇子よ、何もそう目くじらをたてなくても良いではないか？」

まるで楽しんでいるかのように笑うグエインに『むっ』としたオレは、

「グエイン国王よ、笑って言う事ではないぞ！カイル及びその従者三人を返して頂こうか！そして、三国間の不可侵条約を破った件についての、返答をお聴かせ願う！」

既に頭に血を上らせたオレは話の神髄に言い及んだ。

「不可侵条約？はて、そんなものを結んだ覚えはないが……」
惚ける気か！オレは余計頭に血が上った。

「何を莫迦な事を言っている！ここにその訴状を用意して来た。御覧頂こうかな！」

『エストラーザ』に有ったその書状を突き付けた。
そこには、確かにグエイン国王の調印があった。

「これでもまだシラを切るおつもりか？」

グエインの横顔に笑いのしわが走る。

「あははは、このようなもの無効だ！」

大げさに手を広げると、高笑いをはじめ、腕を前に伸ばし、オレを指差した。

「何？」

「そんなことより、何故わが国の申し出に背いたのだ？確か、初めに、第一皇子を遣すように伝えたはずであるが？」

そう言つと、もう片方の手に握っていたのであろうか？ゴロゴロと言つ音とともに何かが転がってきた。

「！」

それが五つの首である事に気が付いたオレは、一瞬後ろに身体を反らせてしまった。

「！」

「驚く事はない。裏切り者の末路だ。裏切り者には死を。我が国の教えだ！」

「まさか……」

そう、まさか。

「我は調印などではおらん」

そういつと、立ち上がり、その中の一つの首の髪を掴み持ち上げる。

「この者が勝手にした事だ。我が弟のな！」

そう言つとその首をオレの前に放り投げる。その首を見詰めオレの脳裏を掠める様に出て来た言葉は、

「まさかこの他の首は……」

オレは立ち上がった。

「そう、お前が返して欲しがっているカイル第二皇子と、その供の者達だ」

吐き気が起こってくる。このようなものを見るためにオレはここに来たわけではない。

「うつ……」

「そなたも裏切り者のためにここまで来なければならぬとは……御苦勞な事だ」

「ば……莫迦な……」

「相対するグエインとオレ。考えの違いと言うものをそこはかたなく感じ取った。」

「それとも、偽者を遣わすよう言ったのは、カイト皇子そなたの意向か？ならばそれこそ問題だな！」

「オレの周りに豪傑な兵が取り囲んだ。」

「問題？」

「ぐつと我慢していたオレの表情は崩れていたに違いない。」

「国の事を考えてした、カイルの行為が問題だと言うのか？それともそれを許したこのオレの行動か！」

「まったく後先考えないオレの発言は、自らの災いを招いた。」

「カイト皇子！」

『ハッ』と気がついた。

「そなた、今なんと申した？」

『ニヤリ』と笑うグエインの顔がオレの前に突き出された。

「この度のこの考えを、そなたは許したのか？」

シマツタとばかり下を向くオレに、

「それならば、話しは早い！」

周りの兵はグエインの指図の通り動いた。

「カイト皇子を捕らえよ！」

このことが、『エストラーザ』の国民の耳に入るのは、翌朝の事であったのである。

#10 フェンディ

フェンディ

時間は前後することになる。

『エストラーザーに着き、カイト皇子との謁見を終え滞在のための部屋を案内された『サリバーン』の一行は、明日からの『キリアートン』の出方を待つべく体を休めていた。

「父上、『キリアートン』は、この申し出に答えてくるでしょうか？」

と、冷静な目で見据えたフェンディは、父ハザウェイに問いかけた。

「そうであればよいが……」

良い表情を見せない父ハザウェイに、

「と、申されますと？」

問いかけた。

用意された椅子に腰掛けた二人はお互いを確認するかのごとく対峙していた。

「『キリアートン』のグェイン国王は、何か確信を持って行動している感じがする。余りにも事の運びが不自然過ぎるのだ」

「確かに、今回の不可侵条約を簡単に見過ぎている気がしますね。

それに、『エストラーザ』の国内の事を把握しすぎている気がします」

フェンディは考えるように首を動かす。

「明日『キリアートン』が動かなければ、カイト皇子はどう出るのでしょうか？それが、この先鍵になる気がします」

国王ハザウェイも同感だと頷く。

「全ては、明日はつきりするであろう」

「はい」

かくして、『クリアートン』からの使者は来なかった。その事にフェンディは問う。

「このまま、カイト皇子をゆかせて大丈夫なのでしょうか？」

それはカイト皇子の判断が下されて、『サリバーン』の国王の耳に入って間もなくの事であった。

「わからん。が、しかしこのまま動かないでいるのは不味い。人質を取られている以上、『エストラーザ』に分^ぶがないのだから……」カイルの事を聞かされている以上、カイト皇子が動かざる負えないのだ。

「何とかならないものでしょうか？出来れば力をお貸ししたいのですが、好い方法が思い浮かばない以上『サリバーン』も動けません」確かに、事情が事情だけに手が出せない。ここは、カイト皇子に任せるしかあるまいな……」

従って、どう仕様もならないこの状況を嘆いたものの、『サリバーン』に手はないのである。

「父上、もしカイト皇子の身に何か起こるようでしたら、私を『クリアートン』に派遣させて下さい。出来れば、カイト皇子の後をついていきたいのですが、それが出来ないのであれば、いた仕方ありません」

この申し出を聞いてハザウェイは疑問符を投げかけた。

「何か策でもあるのか？」

「いえ。そう言う訳ではございませんが……ただ、『クリアートン』のグエイン国王に一度会ってみたくございます。会って、色々尋ねてみたい事がありますので……」

「グエイン国王は、残虐非道な人物だと聞く。それなのにそうやすやす、そなたを奴の元に遣りたくはないのだが」

フェンディの身を案ずるハザウェイの気持ちがそのまま言葉として発せられた。

「いえ、ご安心下さい。みすみす畏にかかろうなどとは思っており

ません。供の者と、間者を引き連れて参ります。実は、もしものために武力の温存をして参りました。できれば、役立たせたいのです」

息子フェンディの言葉に意外な面が見えた。まさかそのようなことを視野に入れ、事を運んでいるとは思っていなかったからであった。

「お主がそこまで言うのなら、考えておこう。ただし、無茶な事だけはするな！」

「心得ております」

こうして、『サリバーン』の、フェンディ皇子の決心が固まり、時は流れ、カイト皇子の事が『エストラーザ』中に流れた頃、カイト皇子奪還の幕が、切って下ろされたのである。

1 1 再生

再生

「気が付いたか？」

カイルにとつて、目を開いても何も変わらない暗闇。

「昔、お前に助けられた者だ。今回だけは特別お前を救ってやる。この近くにある山荘にお前のための場所を作ってやった。そこで生涯生活しろ」

「何故、ボクを助ける様な事を？」

幽かに動いた影に向かってカイルは問う。

「言っただろう。借りを返すためだ」

「それだけの為とは思えない。何を企んでいる？」

この声の主がグエインである事を悟り、残酷な事この上もない人物と謳われる、この男に助けられるとはカイルには納得が出来なかった。

「大きな声を出すな。この事は、オレと、お前之間にしか用いられない秘密だ！」

「何を言っている！？」

「いいから静にしろ！」

『キーツ、ガチャン』扉の開く音。

暫くすると、白んだ空気に触れる。鳥のさえずりが聴こえた。

「オレは、一日足りとも忘れる事が出来なかった。グエイン・マイル・ド・キイル。この名をお前は忘れていても知れないが、このオレはお前の名を忘れる事など出来なかった。カイル・ラ・シユメルよ」

「！」

見る見るカイルの驚いた顔がグエインの眼に見て取れた。

「キミは、あの時の？」

「もう少しで着く。話は後だ……」

グエインの手の平を右手に感じながら、カイルは導かれるまま歩いていった。

『スーツ、ガラツ』乾いた木製の物が擦れるような音がした。

「ここがお前の過ごす世界だ。たまに来てやる。さすがに食べるものくらいは、毎日用意してやるが……」

グエインが、カイルの両腕を掴み近くにある椅子に座らせるように導いた。

「ここに椅子」

そして、そこからという風に手を使って教えた。

「ここにベッドがある。この小屋にある生活に必要なものはこのくらいだ」

薄くて硬い、布の手触りを感じた。

「この場を提供してくれるのか？」

「そうだ」

カイルは考えるように顎下で手を組んだ。

「グエイン国王。あなたの考えてる事、それは一体なんなのだ？」

「カイル、お前を助ける事だ」

「助ける？」

「そうだ」

ますます分からない。

「これでキミに、何の得があるんだ？」

「得？」

グエインがベッドに腰をおろす。

『ギシツ』と鈍い、木が軋む音が聴こえた。

「オレにとつての得は、カイルと言う人物におつりが来る程の貸しを作る事くらいだな」

「それは、これからと言う意味か？」

次には冷めたような顔つきで、カイルはグエインがいるであろう方を見る。

「でも、オレはそれを貸しだなんて思わない」

グエインの眼はまるで愛おしいようにカイルを見つめていた。でもそんな事は、カイルには判らない。

「オレ自身に対しての、これはエゴだ」

さっぱり分らない。この男の言っていること自体、全てが矛盾している。

「エゴ？」

「そうだ。これはオレのエゴなんだ」

一瞬の沈黙。隙間から流れ込む冷たい風。それが肌に感じられた。過去の自分と、今の自分を愛して止まないオレの、罪と罰をこんなふうに補おうという、なんとも虚しいエゴだ！」

このグエインの心の内に潜む悲しい何かがそうさせているというのか？

それが、今カイルが幽かに感じたこと。

グエインは手の平で頭を抱える様に俯いた。

「オレには弟がいた。お前の様に義弟という訳ではないのだが……」

遠くで鳴る、鐘の音が聴こえてきた。

「オレは実の弟をこの手で殺めてしまった。この国を愛していた弟をな！」

鳴り響く鐘の音。

「あいつは、平和を望んでいた。しかしそれはこの手で葬らなければならなかった。聴こえるだろう？ あれは、オレの弟の死を知らせる鐘の音だ」

暫く静かに聴き入るようにグエインは黙った。

「おれたち兄弟は、双子の兄弟だった」

「双……子……」

それを聴いたカイルの顔に、不思議な影が落ちる。

「そうだ。知つての通り、双子というのは、凶兆の証だ。オレたち兄弟にかせられた証。産まれた時、兄であるオレは……未だ『キリアートン』の国を起す前のオレは……生きる証をもらう事が出来なかった」

「生きる証？」

カイルの言葉を無視するかのようにグエインは、話の先を続ける。「母は、兄として産まれたこのオレを殺そうと言つたらしいが、父はこの事を、政治的目的で生かした。利用出来る全ての事……あいつは、それをオレに求めたんだ！」

窮屈な場所でもがいている大きな生き物のような……そんな印象をカイルは感じた。

「オレはそれが許せなかった。飽くまでオレは弟の影としか生きられないのだから……」

「影……それでは、『キリアートン』を建てたのは……いつたい……」

「オレ達の名前は一つしかない」

「えっ？」

それは一体どう言う事なのだ？

「グエイン・マイル・ド・キイルこの名前しかないんだ」

たった一つの名前。それは人間の生きる証を排除した印といえよう。

「こんな事を、君は何故敵国のこのボクに話す？」

カイルは、思った。これは『キリアートン』の極秘事項なのではないか？と。

「だからエゴなんだ。このオレの……」

十三回日の鐘の音が鳴り終わった。

「カイル。お前の事はいろんな手段を使って調べた。お前の周りにオレの間者を差し向けてまでな……」

『ガタツ』と椅子が揺れるほど驚カイルは驚いた。そこまでして？「そして思った。お前は、義弟の事を妬ましいと思つた事はなかったのか？只でさえ側室の子として生まれ、あまつさえ目を見えなく

してしまつた……そんな義弟を憎いと思つた事はないのか？」

カイルは、グエインの真つ直ぐな視線を感じていた。

「それは……ボクに、カイト皇子のように産まれていれば良かった……と、そう言わせたいんですか？」

カイルの顔が鈍い色で翳つた。

「羨ましいと思つた事はないのか？」

グエイン国王が知りたかつたのは、こんな事だつたのか？

「羨ましい……と思わなかつたと言えば嘘になる……だけどボクは、カイトの事を憎いと思つた事は一度だつてない！」

何も映さない、緑色の大きな瞳が力強く揺らいだ。

「それがオレには分からない……何故そんなに、他人に優しくなれるのだ？」

今ここに、全く違う道を選んだ人物が相對していた。

「守りたいと思つる者達がいるから……そう言つたら分かるだろうか？」

「守りたい者？」

グエインの心に過つたものがなんだつたのか分からないが……微かに彼の心に何かが生まれているようだった。

「そう。守りたい者……それがあるからボクは強くなれた。今だつて守りたいとそう思っている」

考えるようにグエインは頭を下に向けた。

「オレには無い。自分を保つので精一杯だ……それがお前とオレの違いだと言つのか？」

それは、まるで自分が誰なのかまだ分かつていない……そんな子供に見受けられる。

「ボクは、この世の平和と、幸せを夢に見る。それは、どんなに小さくても、それがボクにとつての守りたいものであれば、毎日が楽しいから……幸せな気分になるんだ……キミはこういう気持ちは感じないの？」

どうしてだろうか？あやすようにカイルはグエインに問いかけて

しまった。

「幸せを感じた事など無い。すべて、自分のためになる事しか頭に無いからな……お前は……まるでオレの弟のような事を言う。あいつは、平和な国を作りたがっていた……しかし、そんなものなど何も面白く無いではないか！」

グエインは、吐き捨てるように言った。そんなものが何だというのだと！

「お、面白くない？」

その言葉にカイルは、憤りを感じてしまった。面白いから、面白くないから。そんな理由で国を、民を従える？そんなことが有って良い物では無い！

「そうだ、毎日同じ事の繰り替えしで、一体何が面白いと言うのだ？オレには理解できない……」

「それは、君が産まれ付いて、ずっと苦しい目にあっていないからそう思うんだ！」

その言葉に、グエインの目に妖しい光が揺らぐ。

「苦しい目にあってきていないだと？！」

「安らぎを感じる暇なく、自分を不幸だとしか思わずに……甘えてきたんだ！」

「まるで説教を受けてる様だな……」

静かに時が流れていく。これは、意味のある時間なのか？グエインはふと考えた。

「説教のつもりなど無い……ただキミは、逆らいきれない運命の中で生き、そして、まだ知らない優しさを欲しがっている……子供のように戸惑っているようにボクには感じられる。だから探してみればいいんじゃないかなと思う。自分にとって大切なモノがなんなのかを……」

まるで、子供に相談されている……そんな気がしてならない。

「オレは、子供なんかじゃない。既に、一国の『主』だ！」

そう言うグエインが子供だと、やはりカイルは思った。そして変

な気分になる。

何故神はこんな事をボクにさせるのか

「今日はここまでだ。明日また来る」

話はここまでだ……と言つように急にグェインは腰を上げた。

『ギシツ』と、言う音が聴こえたかと思うと、『スー、ガラツ、タ
ンツ』そして、少しだけ感じた光の海が再び闇に閉ざされた。

カイルは思った。

ボクにできること。それはここにいること。ただそれだけなんだ

……

時は余りにも早く動いていた……

12 気掛かり

気掛かり

暗い闇の中の夢を見た。

それは、死の臭い立つ草原に、二人の少年が対峙している。そんな夢だった。

それを外から見ているオレは、そんな二人をどこかで見た事あるような気がして、ただ眺めていた。

白い服を着た少年と、黒い服の少年。

暫くすると周りが明るくなり、次第に辺りの情景がはっきりして来た。

突如、それが何なのか？に気が付き吐き気がした。

周りには、積み重なるように首のない死体がゴロゴロとしていたからだった。

すぐにその視界から逃れようと視線をそらす。

目をそらした先には、またあの二人の光景が。すると、一瞬『キラリ』と光ったのが判った。それは、二人の間に差し出された剣。

黒服を着た少年が、先に切り掛かる。それを制するように白い服を着た少年が受け止めた。

そのの繰り返し返しが永遠に暫く続く。

オレはただ見ていた。声は発したくても発せられなかった。

何をそんなにこの二人はいがみ合っているのだろうか？

特に黒服の少年……闇雲にただ突進してる感がある。

『カキーン、カキーン』

辺りに響き渡る金属音。

どうやら、自服の少年が押されているようである。

かすかに声が聴こえてきた。どこかで聴いた事のある声。

「そろそろ諦めて、オレに切られる！」

「そういう訳にはいかない。ここでオレが引けば死んでいった者達が浮かばれない！」

こちらの少年は金髪をなびかせ、力強い言葉を発していた。そう、どちらも聴き覚えがあるような声。

「カイトよ、それがお前の本心なのか？」

黒い服の少年が尋ねる。

「当然だ！」

白い服の少年が答える。

「ならば覚悟しろ！お前に勝機はない！」

続けて追い込もうとしている。

「グエイン！勝機は、最後までやらねば分からぬ！」

オレは、この二つの名前に覚えがあつた。

カイト？グエイン？

我が名を忘れ、ただ浮遊してこの情景見ている……

「これでどうだ！」

カイトと言う少年の横っ腹に剣が差し出されるが、それを間一髪避ける。

しかし、またまた押されていくだけでこの勝負あつたかと思われた時、

「この勝負、待った！」

と、票毛色の髪の少年が割って入って来た。

「カイト、グエイン、こんな事して、何の実がある！」

中座させられる二人。オレはハラハラしながらそれを見ていた。

「決まっている。富みと栄誉のためだ！」

グエインと呼ばれた少年が何を今さら……というふうに、その少年を見据えて答える。

「こんな状態で……何が富みと栄誉だ！誰も居なくなっただぞ！」
攻め立てる栗色の髪の少年。

「カイル……」

カイル…？

その名前を聴いて何故だか胸に痛みが走った。
程なくして、目の前が真っ白になる。

『ピチヨン』

何処からか水滴が落ちる音を聴いた。そしてフェードインしてくる声を聴いた。

「カイト皇子！カイト皇子！」

その声に引き戻されるようにオレの意識は覚醒し始める。暗闇に微かに聞こえる声で。

そしてオレは目を開いた。

「カイト皇子！何と、ご無事でしたか！」

終に現実^うに引き戻された。

「かなり魔^まされていたようですが……気付かれて何よりです」
どうやら鉄格子の外からの声であるようだ。

「誰なんだ……？」

『キリアートン』の兵に捕まりそのまま牢獄に入れられてから、一体、何日？それともそう経っていないのか？オレには時間の観念に乏しかった。

「私は、『サリバーン』のフェンディ皇子の密偵で、ハイルと申します。あなたが、この場所に入ってから一日が経った。という所でしょうか！」

「『サリバーン』の…？それでは、我が国に加勢の手が回ったというのか？」

とオレ何となく判るような……と問う。

「そうです。『エストラザ』の危機は我が国の危機！今に、我が国のフェンディ皇子がやって参ります。御安心を……」

その男、ハイルは安心してくださいとでも言うかのように答える。「暫くこのまま我慢なさって下さい。必ずお助け致します」

すると『ガシャガシャ』と言う鎧を擦るような音が聴こえてきた。それを切っ掛けに、近付いて来た兵から身を隠すようにこの場を去っていった。

『サリバーン』とは何処の国なんだ？何だか聴いた事のある名前なのにはつきりと思い出せない

オレは暫く考えていた。そして、再びカイルの事が頭に浮かんだ。

オレにとって『エストラザ』という国。そしてカイル

未だこの世界の住人となってから、一週間も経っていないのに……

……この世界が大事な何かのように感じ始めている。

オレが、カイト皇子という一個人である事実がこの世界の秩序なんだと思ひ始めてきていた。余りにもリアルすぎる。これは、変えようのない事実なんだ……！と改めて自覚してみた。

オレはこの先どうなってしまうんだろうか？……

今のオレには頭では理解できない事が、実際、体では反応している事でも今の状況下でハッキリと分かった。馬に等乗れないはずだたのに……等色々と。

ならば、この世界のオレは剣術くらいは嗜んでいるだろう。と開き直る。

自分自身、剣術を嗜んでいたような覚えがあるし。だからだろうか？少しは見当はついている。

頭でも理解出来る事があって助かったと思った。
そして、ふと思いついた。既に一つ、失ってしまった者が有るの
だと。

でも、もう、カイルは居ない

この地に来て、もう守るべき者が居なくなっている気がして来た。

オレはどうしてここまでカイルの事を案じているのか？

あの時、投げ出された首の中にカイルの首を見た瞬間、確かに逆
上する程の怒りを感じた。そして今では絶望を感じている。

カイルはもう居ない

本当はカイル自身に否定して欲しかった……しかしもうその相手
は居ない。

誰かこのオレを救ってくれ！

何故なのか判らないが、切に心の底からそう思った。

オレのせいで、カイルは…

カイルの面影が脳裏を駆け巡る。

しかし、気掛かりはそれだけに留まらない。

『サリバーン』の使者としてやって来る一行の身に何か怒らねば
良いが、このオレのように……

フェンディ皇子、彼の者はこの状況下、如何なる策を講じている
というのだろうか？

自分のように、おろかな行為はしないであるうとは判っていても
心配になる。

どうか無事にこの国から出ていかれますように……

オレは自分の心配よりも、フェンディ皇子の身を案じた。

一度入ったら出るもの適わず……

何だかこの国はそんな国のように感じられた。

本当に運命は変えられないのか？この世界の教えの様に……

そうはなりたくはない。

運命は切り開ける。

オレはそう思った……

13 出逢い

出会い

再び、時間は前後する。

「では、父上行って参ります」

囚われの身となった、カイト皇子の事態を知り、フェンディ皇子はこの時が来たとはかりに身支度を済ませ、既に客間を離れ、庭へと赴いていたハザウエイ王に声を掛ける。

「気をつけて行ってこい。そして必ず戻って参れよ！」

「必ずカイト皇子を救い出し、戻って参ります。それでは！ハッ！」

さっそうと馬を操り、フェンディはカイト皇子が捕らえられている『キリアートン』を目指し数十人ばかりの供を連れて旅立った。

それは粉雪が『チラリチラリ』と舞う朝であった。

「ここから二手に別れよう」

『キリアートン』という国に何の面識もない一同は、まず周りの地形を知る必要があると、この場所で一度調査をする事にした。

「では、わたくしは東の奥のこの辺りを見て参ります」

簡略化された地図を見ながら、フェンディの片腕の一人、マーチンはそう言った。

「ふむ。ならば、私はこちらの北側への道を行くでしょう」

同じく片腕の一人、ユールが言う。

「フェンディ皇子、偵察となれば少人数の方が宜しいかと思えます。四方に別れて、四、五人の部隊で行動致しましょう！」

その言葉に合意したかのように、

「皇子の身の回りが手薄になり、少し心配かも知れませんが、その方が、『キリアートン』の連中には気付かれにくいでしょう」

従者リオンと、メイトが同意したように頷く。

メイトは、それを頭に入れて、
「我が部隊がフェンディ皇子の援護に回ります。皇子、宜しいでしょうか？」

メイトは、女だてらにこの部隊の大將をやったのけるほど剣と弓を使いこなせる女傑である。浅黒い肌に、黒くてこざっぱりとした髪。まさしく闘うが為に生きているといった感じだった。

「宜しく頼む」

話は決まり、実行に移される。

「それでは！」

各隊は、この場を立ち去ろうと馬に跨る。

「メイト、フェンディ皇子の身を頼むぞ」

「心配するな。判っている！」

各隊の者達は、メイトにそれぞれ声を掛け目的を果たそうと四方に散って行った。

「では、我が部隊も行きましょう！」

そして、フェンディと共に前進して行くのであった。

フェンディの部隊は、『キリアートン』の地の西に位置する森の中を進んで行った。

朝から降っている雪が木々の根に積もり、砂漠化の進んだ『サリバーン』の民にとって、この慣れない道を苦勞しながら進んで行った。

「寒いな……」

フェンディは吐く息の白さに『サリバーン』との気候の違いに少し根を上げそうになっていた。

「皇子、この布を……」

すぐ後ろを歩くメイトが、フェンディのその様子に気付き、予備に持っているという布を差し出した。

「メイト？」

「わたくしが余分に持って参ったものです。遠慮なさらずお使い下

さい」

「すまぬ。素直にそうさせてもらおうか」

ふと、メイトの馬に積まれている荷物を窺った。が、そんなものは無さそうだった。メイトの嘘が…心に染み入る。

「この辺りはまだ、開拓していないようだな……木々を切り倒した形跡がない」

そして、話を本題に戻す。

「『キリアートン』の国王グエインの計らいでしょうか？」

そのことに、答えるメイト。

「あり得るな。もともと山賊をやっていた人間だと聴く……地の利を持ってこのようにしているのだろう」

「そのようですな」

そんな会話を交わした後、黙々と五人の部下達を連れだしたフェンディは、西の地から少しずつではあるが中央にある『キリアートン』城へと歩を進める。次第に風が強くなり、降り積もる雪の深さで馬を操れない程になっていた。

「ここからは歩きだ。各自馬を連れて足下を取られないように進め
！」

フェンディが皇子として、そして、この部隊を率いる者として指示する。

しかし、視界を遮るように吹雪くこの『キリアートン』の領地。

自国『サリバーン』の中で育って来た者達にはこの国の気候に付いて行くだけで精一杯だった。

こんな木が多く覆い立っているのに、顔や頭に冷たい雪が叩き付ける。風と共に運ばれて来るのを腕で塞いで歩き続けた。

「このままだと、『キリアートン』に着くまでにここへ死んでしま
うな…何とかこの雪だけでも、止んでくれればいいのだが……野宿
する訳にも行かないし……」

余りの風土の違いに、流石にフェンディは根を上げてしまった。

「フェンディ皇子……ほらっ。あそこに小屋があります！少し休みましょう」

誰も住んでいないであろう様子の小屋がメイトの視界に入った。丸太を簡単に組み立てただけの小屋である。

「すまない。そうしよう」

フェンディ皇子の目にも入ったらしく、一行はその小屋目指し足を運んだ。そこに着くのに半刻の時間を掛ける程雪は深くなっていた。

「誰も住んではないのだな……もし誰がいるようだったら、直ちにその者を切らなければならぬ……」

小屋の前まで来たフェンディの一行はドアの前で中の様子を窺った。

「この時期こんな所にいる者などいないでしょう……もしもの時は、わたくしがこの場を受け持ちます」

「わかった。任せる」

背の低い屋根からは痛そうな氷がぶら下がっていた。どう見積もっても誰もいないであろう小屋だ。確かに人の動きがない。

『ガラリ』とこの小屋の戸が開けられる。

中は暗く人の気配が感じられなかった。と言うより、生活感がな
いと言った方が正しいのかも知れない。

奥にもまだ戸があるようだ。

『ギシリ』とフェンディは一步踏み入れる。

「誰がいるのか？」

『シーン』と静まった部屋の中からは、物音一つ聞こえなかった。

「良かった、誰もいないようだ」

『ホッ』と息を付く。

「中に入ろう」

五人の『サリバーン』の者達はその小屋に足を踏み入れた。それにしても、暗い。

「明かりを……誰か火を熾せ！」

「承知しました」

そう言つて一人の男が火を熾す。運良く近くに乾いた木切れを見
つけそれに点火した。

少し明るくなつた部屋の中。辺りの様子がぼんやりとではあるが、
そのおかげで判るようになった。

使われていない炊事場。埃を被っている。

「ひどいな」

自国の様式とはまるで異なつたこの様子に、少し戸惑いを感じた。

『サリバーン』の様式はもっと広々としているし、屋外食といっ
た感じた。

「フェンディ皇子、これを……」

と、食器の山をメイトが差し出す。

「これは、まだ新しい……まさか誰かがここを使用していると言つ
のか？」

その言葉に、一同が『スツ』と身構える。視線は奥の部屋へと向
けられた。忍び足でフェンディはその戸の前まで立つた。そしてそ
ろりと戸を開きかけた時、

「誰？」

という声が返つて来た。

今まで誰もいないものだと思つてきたにもかかわらず、その声を
確かに聴いたのであった。

フェンディは惜し気も無く『ガラリ』という音をたててその部屋に
のりこむ。

「メイト！誰がいる……」

「なんですと！」

少し部屋の中の空気が動いた。そこには確かに人がいる気配が漂
つた。それは何とも僅かな気配。

「可哀想だが、お主の命を頂く！」

明かりのない部屋の中、その気配を頼りにフェンディは剣を引き
抜き襲い掛かった。

『ザクツ』という手ごたえだけが感じられた。

「な、何を！」

それが、布を切っただけで人の感触ではない事に気付いた。

「これでは……火を持って！」

配下の一人が明かりを戸の近くまで持って来る。幽かに火に翳された中に見た者は、虚ろな目でこちらを伺っている。

「どなたか分かりませぬが……ボクは何も致しませぬ」

落ち着いた声が返って来る。

「そなたに姿を見られた。それが不運だったのだ！」

引き抜かれた剣は、薄暗い部屋の中逆光の光を受けて『キラリ』と弧を描く。それが、その目の眼前まで落ちて来た。それなのに、ピクリとも動く様子が見られないその主にフェンディは気づいた。

顔面寸前『ピタリ』と止まる刃。

悲鳴さえも無い静まり返っている部屋の中。

「もしかしてお主……目が見えぬのか？」

『ピクリ』とも動かないその様子に驚く。

「はい。見えません」

返って来る答えにフェンディは、なぜか胸をなで下ろした。

「目も見えないのに、こんな所で何をしている？」

なぜかこんな言葉を返してしまった。

「見えなくとも、大体の事はできるから」

意表を付いた言葉。

「メイト、この者の顔を見たい。火を！」

差し出される松明。

「お主の名前は？」

「カイル。カイル・ラ・シユメールと申します」

「何！」

フェンディは思い出していた。確か、目を負傷したということ、自らの姿を国政に出した事のない親戚がいるという事を聞いたことがある。フェンディにとって、初めて会った親戚に当たる者。

「カイル殿なのか？」

フェンディは愕然とした。もう少しでこの者を切っていた所だったからだ。

「しかし、カイル殿は『キリアートン』のグエイン国王の手で……」
そう聴かされたからこそ、カイト皇子はたった独りでこの地に赴いたはず。

「これは一体……どう言う事なんだ？」
フェンディはただ立ち尽くすだけしか出来ない。次の言葉が出てこないのだ。

「それは、ボクにも判らない。どうやら助けられたようです……」
一体どう言う意図でこのような事になったのかは判りませんが……確かにボクはこのように生きております」

落ち着いてカイルは話す。

「あの、グエイン王によって……か？」

噂にしか聴かない国王の名前。

「そうです。それも、彼の者が一日に一度訪れるんです。この小屋に……それも朝早く」

「なんと、ここにグエイン自身が来るのか？」

驚きを隠せない。

「ところで、あなたは？」

「名乗るのが遅れました。わたくしは、『サリバーン』のフェンディ・ラ・シユメールです。つまり、あなたの鳩子に当たる者です」

丁寧にお辞儀をする。

「あなたが、フェンディ皇子で？噂には聴いておりました。お会いできて光栄です」

と、カイルは右手を差し出した。

「このような所でお会い出来るとはこちらこそ光栄です。そして、無事なお姿である事も」

二人は手を取り合いながらこ度の事を話し合った。

「カイトが…いえ、カイト皇子がこちらに来ていると？なんとおろかな事を！」

カイルはこの事を批難した。

「カイル殿が捕らえられた事で、『エストラザ』との……三国不可侵を訴えに一人で交渉しに出向かれたのですが…残念な事にそのまま拉致されたのです」

その言葉に、沈黙するカイル。

「しかし我が国にあるこの書状を…グエイン国王の署名を、持って参りました」

それを見せようとカイルの前に突き出す。しかしカイルは依然として黙っている。

「これでもシラを通すならば、いっその事全ての兵を持ってしてもカイト皇子を奪還致す所存です……この事は今はまだ誰の耳にも入れてはおらぬ事ではありませんが……」

フェンディは、密かに静かな闘志を燃やしていた。

「それは少し待ってもらえませんか？フェンディ皇子……」

カイルは少し考える様子を見せた。そして先を話す。

「グエイン国王の署名はきつと何の抗力も持たない物だと思われます。というより、持たないのです！」

何を言うのかとフェンディはカイルの前にねじり込む。

「しかし、確かにこのようにハッキリと署名されております！」

「申し訳ない。ボクは目が見えませんのでそれを確かめる事は出来ませんが……それを書いたのは、前国王のグエインだとしたら……いかが致しますか？」

「何を莫迦な……」

「グエインは……」

とカイルが言いかけたが、フェンディはその言葉を聴かず自分の意を唱えた。

「カイル殿、もしもそうだとして、『キリアートン』としての国王が、この条約を破ると言う事は、前国王だろうが、現国王であろう

が、国としての威信に関わる事でありませぬ。決してこの書状を無効にする事などは出来ませぬ！」

「フェンディ皇子……」

カイルは言葉を詰らせた。

「あなたは、グエインに助けられた事で情が移ったのではありませぬか？今は『エストラーザ』……つまり、あなたが生まれ育った国の危機なのですよ！」

カイルはフェンディの言葉を聞き、この自分の中に隠された何かが生まれい出ようとしているものに気付く。

「確かに、フェンディ皇子の言う事は正しい事です……が、しかし、この書状を持ってしても、グエイン国王はきつと、承諾して話を聴く事はありますまい。そして只の戦乱を招く事になってしまう！それでも、あなたはこの書状を持ってグエインに会われると申されませぬか？」

カイルはなぜか話せないでいる。グエインの事を……

「もし、この書状が無効で、グエインの思うまま、戦乱を招く結果になっても、このフェンディは、立ち向かいます！」

フェンディは思っていた……ついにその時が来ているのだと。

「あなたは、それをお望みなのです……」

カイルは眩くように言った。

「そうなのかもしれない。以前より考えてきた。我が国『サリバーン』は、国土の広さでは三国の中では一番かも知れない……しかし、生活する民の苦勞は三国一です。もし適うのであれば、『エストラーザ』の豊かな土地を分け与えて頂きたいくらいだ」

心にある本音を隠す事なく言う、フェンディの身が揺らいだ。

「その豊かな土地を得るためにも、戦乱の世になってもかまわないと？そう申されるのですか、フェンディ皇子！そう望まれて、敢えて『エストラーザ』を餌にすると申されるのですね？！」

カイルは見えない相手を見据えて怒鳴っていた。

「もしそうであると言うならば、カイル殿はどうなされるのですか

？」

フェンディは、真剣に問うた。

「もし戦になれば我が国の力ではきつと叩き潰されてしまうのは必死……確かに、あなたの国の力が必要になります。まずこのボクはこのような身。国王となられるカイト皇子が捕われている今、指揮するのは誰にも出来ない……しかし、戦いで得られる物は只の虚しい力のみが支配する世の中……ボクはお勧めしかねます」

それだけ言うと、カイルの口は堅く閉ざされた。

「ならば、やむなく承知したとわたくしは取って良いのですね？」

フェンディは、さらに続ける。

「この、無血で国を奪い取る事がゲインの策略だったとしても、わたくしはやはり既に流された血をもう平和なものだとは思っておりません」

フェンディの目は既に遠くの未来を見据えている。

見えないまでも、カイルにはそう感じ取っていた。

「あなたは、国のために戦いを望んでいるようだ。それを止める事はボクには出来ません。既に、避ける事の出来ない運命の輪が回り初めている限り」

この言葉を肯定の意と取ったフェンディは、

「メイト！このお方を今から『エストラザ』に送り届けてくれ」

と、戸の前に控えているメイトに呼び掛けるフェンディ。しかし、

「申し訳ありませんが、ボクはここに残ります」

と、カイルの口から意外な言葉が出た。何故そんなことを？その言葉に、

「カイル殿！それは如何なる事だ？このような所にいると言うのは、みすみす『キリアートン』側の人質としてこの待遇を自ら受けいれると言う事だ。何故そんな事をむざむざと！」

フェンディは、入ってきたメイトの前に立ち上がった。座っていた椅子が軋む音が響く。

「ボクはこのような身。この『キリアートン』の地から逃れるとし

ても只の足手纏いになる。それに、ボクが今一番グエインに近い所にいる者だ…それなりの覚悟は出来ているさ……できれば、グエインの手の中で何かを操る事もできる……」

何だか、心にもない事を言っているかのようで、カイルは少し身を引いた。

「それでは何か策が有るとでも言うのですか？できれば話して頂きたい」

関心ごとに耳でも傾けるようにフェンディは、カイルの言葉を待った。

「策などない。ただ……」

「ただ？」

「あの者の心に住まう物の正体はつきりすれば…あるいは、戦をせずとも済むかも知れない……と思ったままでです」

「心に住むもの？……そんなものでこの状況が良くなるとでも思っているのですか？笑止！」

フェンディは立ち上がったままカイルを見下ろす。

「カイル殿は、このままここに滞在するそうだ。メイト構わぬ！」

フェンディはカイルを背にし最後に訊いた。

「今晚はすまぬが、隣の部屋を借りる。グエインは朝、いつ参る？」

「明けの六つには参ります」

「分かった、それまで申し訳ないが宿としてお借りする。では！」

そういうと、『ガラリ』という音を残しフェンディはこの部屋を後にした。

明け五つ前にはフェンディの一行はこの小屋を後にしていた。いっさいその痕跡を残さずに……

そしてただ運命の輪は回り続けていた。

#14 今日という日

今日という日

昨夜の事が嘘のように雪は降り止んでいた。外から聴こえる静かな水音がカイルの耳に届いた。

カイルは、ベッドから起き上がり大分慣れてきたこの小屋から外に出てみた。外は冷たい空気を運んで来るそれを肌で感じていた。

「おはよう」

誰もいないこの森の中でカイルは挨拶をした。まるで毎日の日課のように。

暫くすると、雪を踏み進んで来る足音を聴いた。カイルには、それが一体誰なのかを聴き分ける事ができるようになっていた。自信に満ち溢れるその足音。

「カイル、大分慣れたようだな」

聴き慣れつつあるグエインの声を聴く。

「ええ……そのようですね」

そう答えると、それ以上の会話は今此処ですることでも無い気がし、背を向け小屋の中に入った。

「今日の飯を持ってきた。食べ」

グウエインは何処で狩りをしてきたのかも知れない鳥を炊事場に置いた。

「肉は嫌いか？」

目の見えないカイルに死んだ鳥を脚を掴んでグエインは問う。

「嫌いではございません」

それが見えていないカイルは、どういふ状況かただ想像するだけで、頭をもたげて椅子に座る。

「という事は、好きでもないと言ふ事か？さすが、血を好まない奴だな」

笑って、グエインはまな板の上でそれを捌き始めた。

『ゴリゴリ』という、骨を切り捌く音が耳に入り、カイルは顔をしかめながらも静かに椅子に座っていた。

そして昨夜の事を思い出していた。

「昨日の夜、我が国『キリアートン』に『サリバーン』からの使者が来た。『エストラーザ』のカイト皇子を返して欲しいとのことだった……お主の義弟をな」

と、わざとらしく今まで隠し通してきた事をカイルに言う。

「お主の弟は、莫迦者なのか？ たった一人で我が国にやってきて、先に遣いを出した者達を戻せと申してきた」

「ええ……昨夜この小屋にも『サリバーン』の者がやってきました。その事を聞きましたので知っております」

「ほう、して、そなたは何故その者達と共に逃げなかったのだ？」

グエインは、『カイル』がこうして生きていると言う事を『サリバーン』に知られても驚く事もなく、ただ、逃げもしなかった事だけを問うた。

相変わらず鳥を捌く音だけがやけに響く。グエインは手を休めるつもりは無いみいだった。

「グエインという者の事が知れたからです」
するとグエインの手が一瞬だったが止まった。

「何故ボクを助け、しかもこのような事までしてボクを生かすのか？」

再び動きだすグエインの手。

「それは前にも申したではないか。只のオレのエゴだと……そんな事で逃げ出さなかったのか？ お主も莫迦だな」

『はっはっはっ』とだけ笑っている。その心中をカイルには計り知れない。

「そんな莫迦者達ばかりが『エストラーザ』にいるとするならばいずれ滅びる。そして、我が国『キリアートン』の世が来るだろうな……」

カイルは黙ってグエインの言葉を聴いていた。

「国を支配するのは、優しさだけではやっていけないのだ！時には冷酷非道な事も必要だ！」

「ボクはそうは思いません」

カイルは反論した。それは間違っているとそう信じているからである。

「民に平穏な世を送ってもらふ事を第一に考える事こそ、国王に必要な事だと思っております。そのためにも強くなる」

母ミレディーの言葉を思い出していた。

グエインは近くの鍋らしき物に捌いたばかりの鳥を放り込み、火を熾すとその上に鍋をかける。

「だから莫迦なのだ！」

炊事場から離れて囲炉裏に鍋をかけると藁わらの上にあぐらをかくように腰をおろしながら答えるグエイン。

「民に平和を教えると、その上にあぐらをかき、それが当然なんだと思いはじめる。しかしそんなものはなんの役にも立たない只の腰抜けだ。この意味がお主には分かるか？」

鍋の中をかき混ぜながら訊き返す。

「分かる訳ない。戦いは何も生み出さないから……」

「生み出すも何も無い。手に入れるのみだ！未来を……」

「…未来を手に入れる？」

「合点がいかない。」

「そうだ。運命はこの手に掴んでこそ初めてなし得るのだ。決まった道などない！」

力を込めたグエインの言葉は、全てを可能にしてしまうような、そんな勢いがあった。

「グエイン、あなたが望んでる世界とは一体どんな世界なのですか？」

その質問に、グエインは黙った。少し考えているようだった。

「このオレの欲しい世界は、果てしもなく広い世界の征服だ。その為には誰にも邪魔はさせない。こんな小さな国一つではなく、世界

あらゆる国の頂点を目指す……それがこのオレの夢だ！」

そこはかと漂って来るゲインの野望。

「それは、全ての国を支配すると言っ事なのか？」

ゲインはカイルの質問に戸惑うことなく、平然とそれが当然と言っかのように、相変わらずかき混ぜている。

「決まっているだろう。オレは、たった三つの国の頂点を狙っている訳ではない。特に、『エストラーザ』から出ている船はありとあらゆる国を行き来していると聴くではないか……まずそこからオレは前に進むつもりだ」

「……」

カイルは、この男の何がここまでの野心を駆り立たせているのだろうか？と言っ事だけが脳裏を駆け巡っていた。過去への反逆？

「この夢を、あいつには果たせない。そう思った……だからオレは今ここにいます」

そう言っつと、ゲインは器を用意してそれに温めた鳥肉とそのスープを注ぎカイルに渡すため立ち上がりその部屋を離れた。

「まだ熱い。気をつける」

そう言っつゲインの言葉は普通に優しかった。

「カイトはどうしている？」

それを受け取り、カイルは尋ねた。

「今は、地下の一室に閉じ込めている。今日には、『サリバーン』の者達がやってきて救い出そうと動き始めるだろうな」

「どうする気だ？」

「あいつは、大事な人質だ。そう簡単には引き渡すつもりはない。ただし、ある一つの申し出が有れば別だがな！」

「ある一つとは？……まさか、『エストラーザ』を支配下にできる承諾か！」

静かに時が流れて行く。

「決まっている。その通りだ」

ゲインは平然とベッドに腰を掛けながら答える。

「それはない。『サリバーン』の者達が承諾をするはずはない。ましては、戦いを招くだけだ！」

微妙なカイルの動きで、ひざの上に置いた器が揺れる。

「『サリバーン』の者達だけではないだろう……『エストラーザ』自身も兵を上げて来る……それがオレの望んだ道だ」

「そんなに戦いたいのか！」

カイルの左手の握りしめた拳が、『ガタガタ』と揺れ始めた。そんなことは許せない。

「オレは、生まれてこのかた戦う事だけを仕込まれてきた。そんなことは当然だ！」

余りにも違う境遇の二人。

「グエイン、キミには心の安らぎは必要ないのか？戦いばかりに気を絞りに続けていながらも……平穏でいたいと言う願望というものは？」

「そのようなものは、ない！」

言い切ると、腰を上げた。

「今日という日は、きつと最大の祭りだ。カイル、明日の朝を楽しみにしているんだな……それじゃ、また来る」

それだけ言うとグエインは、この陽の当たらない部屋を後にした。ただ、残されたカイルの小さな影のみがそこに残されていた。

#15夢であつたなら・・・

夢であつたなら……

暗闇の中で、オレはただ水の音を聴いていた。石に弾ける水の滴る音。

それは、光のないただの暗闇の中、それを一人でその音だけを聴いていた。

そうしていると、何となく自分がだんだんおかしいことに感じられてくる。

何故オレはここにいたのであろうか

そう。ただそれだけを考えていた。

幸せな日々を過ごしていたはずだった。それなのに……

これが只の夢で、明日になれば何もかも嘘であつたと言つのであればどれだけ良いであろう。

大分、慣れてきていたこの闇の中、四方を積み重ねられたレンガの石の壁に囲まれ、身動きもとれない。今にも狂いそうな気分だつた。

声に出して叫んでみたい。そんな心境である。

それでも、一度、『サリバーン』の間者が訪れてから少しだけ勇氣が出たのかも知れない。

時の感覚が失われてからも必死で意識を保とうとしていた。そんな事を考えていた時、遠くで鍵が開く音が聴こえてきた。

暫くすると、人の気配が感じられた。

「カイト皇子、出る！」

声と共に、四方の壁の一部から幽かな光が差し込んできた。

淡い光。甲冑を身に纏つた、『キリアートン』の兵が扉を開いた

ようだった。

「どういうことだ？」

その兵に問う。しかし何を訊いても答えは返ってこなかった。

沈黙の中、オレはその兵の後を歩いた。手首に架せられた錠が歩く度に、『ジャラジャラ』と音をたてる。空腹のため、足下がふらついていた。それでもそう見せないために、しっかりと地に足をつけて歩こうとした。少なくとも、ぶざまな姿を見せたくはなかった。そんなおり、

カイト星子……カイル皇子は生きておいでです

幽かではあったが、耳もとに流れ込んできた声。

詳細は申し上げられませんが、御安心下さい

その声が、以前に聴いた者^{ハイル}の声であった事に気付くのにそう時間は掛らなかった。

カイルが生きている？

暗い地下道を歩きながら、オレは嬉しい知らせなのに困惑していた。

フエンディ皇子が確認されました。確かにカイル皇子でございます

再び聴こえてくる。

いったい何処から聴こえて来るのであろうか？前を歩く兵に視線を送るが何も気付いていないようだ。

それでは、これにて失礼致します

そういうと、その声は二度と再び聴こえる事はなかった。
オレは考えていた。

オレが見たあの首は偽者？グエインによる或る仕掛けだった？

そう思うと、一気に力が湧いた。

暫く歩くと、立ちふさがる扉の前に来ていた。その扉が開かれる
すると眩しい光が瞳に流れ込んできた。眩しくて架せられた両腕で
それを退けた。ようやく慣れてきた時、眼前に温かな光を感じてい
た。外は昼間であった。

「これより、『サリバーン』の一行に会って頂く。こちらへ……」
促されるままカイトは歩いた。狭い廊下をひたすら歩いていた。

「グエイン陛下、カイト皇子をお連れ致しました」

あの日捕らえられた場所。

オレはハッキリと憶えている。屈辱を感じたあの場所だ。

「こちらに……」

そう促すグエイン。

オレはグエインの座しているその椅子の側へと導かれ歩いた。

「このようにカイト皇子は預からせて頂いております。何かござい
ますか？」

グエインの隣に導かれてやって来たカイトは、中央のその言葉を
掛けた者の方を見た。

銀髪の年頃がオレと同じくらいの青年が跪きこちらを見上げてい
た。

青い瞳が印象的に見つめて来る。それが、『エストラザ』を出
る前に会った事がある、フェンディ皇子だと気付くのにそんなに時
間は掛らなかつた。

「フェンディ皇子！」

考えるより先に名前が口から言葉が漏れ出した。

「これで御安心下さいましたかな？」

グエインは、フェンディにそういつと微笑む。

餓死するかと思う待遇をしいておきながら何を又ケ又ケと

オレは思った。

「ところで、この書状でありますか」

フェンディは、グエインの前に突き付ける。

「その事ならば、こちらのカイト皇子にも申し上げたが、無効な物。わたくしのサインではないのでね……」

その言葉を待っていたかのように、フェンディは答える。

「しかし、『キリアートン』としてのサインでもございます。これはどう考えても違反されたもの……すぐにも撤回致して頂かなければなりません。そして、カイト皇子を今すぐに解放して頂きたい！」

真実味の有る言葉がグエインに向けられて発せられた。

「ほう。確かに、『キリアートン』の物でありますな……しかし、そのサインを書いた者は、この国で既に処刑されております。我が国の裏切り者として」

片ひじを付きながらグエインは、高い所から見下ろしているかのようにゆったりとした仕種でフェンディの言葉を軽くかわす。

「それでは、申し上げます。既に血は流された。この状況を見て、誰もが思うであろう。『キリアートン』は、『エストラザ』及び、我が国『サリバーン』を敵とみなし反乱を起こしたと！それでも宜しいのですね？」

静かに、そして、熟のこもった言葉で威圧するフェンディ皇子。

「そう取られるのでしたらそれでも結構、今より戦いを決行すると言うのであればそれも構わぬが。立場上不利なのは、そちら側なのではございませぬか？」

相変わらず、落ち着き払っているこの一国の王に、フェンディは底知れない恐ろしさを感じていた。初めて逢い見えたこの男。噂以上だ……今ここを引かない限りダメであろうと考えたフェンディは、「それでは申し上げます。明朝より我が国及び、『エストラーザ』は、この国『キリアートン』に対し宣戦布告いたします。なればカイト皇子を解放して頂きます。それだけの事で戦況が乱れると有れば、『キリアートン』も大した事ないと認めますが、いかがなものでしょうか？」

言葉に対し、『ニヤリ』と笑うゲインの表情は言い尽くせない程不気味であった。

「そう来ましたか……それでは、我が国の威信に係わる。分かり申した。カイト皇子はお返し致しましょう」

辺りにざわめきが起こる。国の威信と有っては、それをゲインに強いる訳には行かない。

「本来ならば、裏切りの行為を働いたのは、そちら側であると覚悟しておいて下され。申し出に偽りの皇子を差し出し、あまつさえ、その事を認めておられたのですから……このカイト皇子は！」

そう言つとオレを解放するように兵に申し立てた。

『ガチャリ』と手枷が外れる。

「カイト皇子！ご無事で何よりです」

と、フェンディは開放されたオレに向かつて、自らの手を差し伸べた。その手を取る。オレは少しだけ安心と言う物が心に芽生えたが、その反面、これからの事を考えると不安が残る。

「では、約束通りこれより我が国『キリアートン』は、『エストラーザ』及び『サリバーン』に全面的に戦いを挑むことをこの場にて言い渡す。よいな、覚悟しておれよ！」

そういうと、ゲインは立ち上がると、マントを翻し奥へと下がって行った。それを追つかのように宰相のメイディンがイソイソその後を追った。

「メイト下がるぞー！」

フェンディが腕を横に差し出すと、『サリバーン』の一行と、オレはこの場を後にした。

#16 適わない想い

適わない想い

この日をどれだけ待ち望んだことだろう。

グエインは考えていた。過去の事など、とうの昔に捨て去っていったつもりでは有るが、次から次へと沸き出して来る過去の産物を薙ぎ払いつつ自室の大きな木の椅子に腰掛け笑いを隠しきれない。

しかし、ただ一つだけ彼の中に不安要因が残った。
カイルである。

このまま、あの地に止めていて良いものなのか？

『サリバーン』のフェンディ皇子の目にはカイルの姿を見たと言う事実が残されている。

あの場所は、もう知られている。ならば移動させなければならぬ。例えカイル自身が逃げ出さなくとも、グエインにとっては大切な一つの駒なのである。

あいつはオレのエゴで手に入れた駒だ。それも特上のな

しかし、そう考えれば考える程、グエインの中に憤りが沸き起る。

なぜ、逃げなかったのだろう。オレの事を探りたいのか？そして、『エストラーザ』にその情報を？

誰もが、やはりそう考えるであろう。それならば、道理が通るか
らだ。

もつと身近で、そして、強引にでも引き連れておいた方が良いのかも知れない

そうは言ったものの、一度死んでいる人間だ。ここで皆の前に連れだせるものなら……こんなに気にかかる事もなかった。

一度助け出している人間を陽の光の中に出す事は控えたい。

いっそ、違う人間として引き出そうか？

まるで、自分と同じ境遇のように見せかけて……つまり、この国の重要人物として祭り上げる。それが出来るとしたら……

何を考えているのだオレは……

いきなり自分の中で何か芽生えようとしている感情を、自力で押さえつけた。

もしそうだとして、それでオレはどうするつもりだというのだ

否定と肯定が、入り乱れる。

感脩と言つものは厄介だ……そんな事さえ忘れてしまったのか？

そう考える。しかし相談出来る者さえいない。

安らぎなど欲しくない

そう今までそうしてきた。これから先もそれに頼るつもりはない。そう決心できたからこそ今までやって来れたのだ。

明日から、オレは戦いの王者になる。それは望んできた事だ。今さら顧みる必要など、これっぽっちもないのだ

より高みへと上りはじめる。これはほんの序章に過ぎない。

不安の芽は摘み取るのに限る！

グエインは、決心を固めて立ち上がった。そして静かにこの部屋を後にした。

「もう寝たのか？」

ギシリと床の軋む音が聞こえてきた。

それが耳もとに届いた時、始めてカイルは目を醒ました。

「オレの『エゴ』ぎみ？」

グエインの声が耳もとで聴こえる。

「明日早朝にも、『エストラーザ』と『サリバーン』の連中はこの城に向かって動き始めるだろう。オレの思い通りにこの平穏な世の中は、戦乱の世となる」

「それでは、やはり……」

カイルは静かにその声の主に向かって覚醒しきれない様子で問いかけた。

グエインはお気の毒様とでも言いたい表情で、

「カイト皇子は無事、一度『エストラーザ』に帰還された…が、あの身だとまだ自由に動けないであろう」

「カイトが？『エストラーザ』の地を譲ると彼は言ったのか？そんな……」

カイルは困惑した。

「それはない。これから始まる戦での事だから……つまり、承諾は戦う事のみ、とあいなつた！」

「……………」

黙り込むカイル。

「そこでこれからの、お前の身の振り方だ。どうしたい？」

「一度死んだ身、いかようにも……………」

静寂の暗闇の中、カイルは観念しているように呟く。

それをグエインは、この暗闇の中でさえカイルの表情を読むがごとく眺めていた。

「……………」

「やはり、お主は他の者とは違う。普通懇願して来るものだ…殺さないでくれと」

今までがそうであった、最後には命を奪われる事を恐れ、命乞いをする者ばかりだった。所詮人間などそんなものよと高を括っていた。

「それはあなたがお決めになるものでしょう……………ボクは、今、『キリアートン』の…敵国の中にいるのですから」

俯くカイル。その様子に、グエインは動揺してしまう。

「…不思議だ……………やはり、オレにお前を殺す事が出来ないでいる。

これは一体どうした事なんだろうな…お前に生きてもらいたいとそう願う」

そういうと、カイルのいる所まで歩み寄り、肩を掴む。

「ボクは、何処にいても、不自由な身。いつそ、戦いの場に出て死ねるのであれば本望。しかし、それさえも適わないでいる」

「…お主の目は治る。解毒剤があるからな……………そうすれば、見えるようになる」

カイルがその言葉に反応した。

「この目が見えるようになる？」

「そうだ」

グエインの表情が曇った。それをカイルが感じる事は無い。

「もし目が治ったらカイル、そなたは如何致す？やはり、我と戦って、対峙すると申すか？」

「…そうしたい…と言えば、あなたの行為を裏切る事になりますね…そんな事ボクには出来ません」

力強く掴まれた肩の骨が軋む。グエインはその言葉に反応したかのように、力強く握り締めた。まるで、屈辱とでも言うかのごとく。「恩は返すと言うのか？」

的外れの言葉にグエインは心から癒されない憤りを感じた。

「何故そんなふうに見える？」

「ボクの身の振り方は、今ここにいると言う事で既に決まっています。運命には逆らえられません」

「オレなら、運命を変えてやる。と、そう考える…神の領分を超える事になったとしてもだ！」

有り得ない！グエインは思った。細いカイルの肩がガクガクと揺れる。

「グエイン、あなたは恐ろしい方ですね」

神をも恐れない闘志。それをヒシヒシ感じた。

「神などいないのだ。どこにもな…ならば何を恐れる必要が有る？」

信じようとしない者の言葉だった。グエインは、肩に引っ掛けていた物を下ろし、

「この服を着ろ。そしてオレの言うまま、今からお前は女として振る舞え…そうすればこの状況下、何の不利なく動きがとれる」

「どうしても、ボクを助けると？」

「お前にはまだ、やってもらわなければならない事が有るからな」

「やってもらいたいこと？」

「ああ、そうだ。今は言えないが…お前でなくては出来ない事だ」
そう言うと、グエインは立ち上り、この部屋を後にした。

暫くすると隣の部屋から、

「着替えすんだら、教える。我が部屋にお前を連れて行く」

カイルは、着替えだと渡されたその布を、ベッドの上に広げた。

この不自由な目で、何処まで思い通りにこの服を着こなす事ができるのだろうか？初めての経験であった。

母上は？他の給仕の女の人たちは…どんなふうに着こなしていただろうか？

ただでさえ、国が違うのだ。それなりの着こなしの違いだってある。

ここで、ゲインに、『着る事が出来ない』などとは言えない。決して言えないのだ。

「どうした…手伝わないといけないのか？」

カイルはその言葉に反発する。

「一人で十分。少し黙っていてもらおうか！」

確か……

と、思い出せるだけの女性の衣類の着方を思い巡らしながら悪戦苦闘する。

何となくこれのような……

手探りで屠蘇の布を頭から被る。

程なく広げられた布達はカイルの体を取り巻いた。

「準備は出来た」

そう言うと、壁伝いに隣の部屋へと向かった。

暗闇の中、この部屋に取り付けられた蠟燭の火がぼんやりとカイルを照らし出す。

悪戦苦闘したのが分かる着こなしに、

「やっぱり、手伝った方が良かった様だな」

と、含み笑いをするグエイン。

「ククク、後ろと前が逆だぞ！」

『えっ』と言うふうにかイルは服を触った。

「どれ、貸してみな……下の方はまあこれでも良いだろう」

と、一番上に来ている布だけをとってかイルに腕を通させる。

「すまない……」

なーになんて事ない。とでも言うふうにかイルは、それでも着こなしたかイルを眺めながら微笑んだ。

「髪……その後ろで結んでいる物は外せ」

「いや……これは……」

かイルが少し焦っているのを横目にグエインは、その結んである金属を取り外す。今まで固まっていたその茶色の髪は、柔らかなウエーブを描きかイルの肩を覆った。

「その髪止めを返して下さい！」

グエインに迫る勢いでかイルはグエインの腕を掴んでいた。

「何？そんなに大事な物なのか？」

少し興味深くかイルを観察しているようにじらした。

「ええ、そうです！」

それ以上は何も言葉を発さない。

「分かった。返してやる。ほら！」

そう言うのと、かイルの手を掴むとそれを握らせる。

「なんとか、化けられそうだな……戻ったら、お前用の侍女を宛がってやるう。」

「そんな事をすれば……ばれてしまうのでは……」

逆にかイルは焦っていた。

「何も焦る事はないだろう……かイル殿……お主の秘密くらいとうの昔に知り尽くしている」

かイルの焦りで周りの空気が蠢いた。微妙に揺れている蠟燭の炎。立ち尽くしているかイルが今にも崩れ落ちそうに顔色が蒼白にな

っていた。

「知っているって……な……何を？」

沈黙が続く。それは、この夜の静けさにも増して広がりを感じた。「何を？そのくらい、自分の事なのだから分かるであろう？カイル・ラ・シユメール？」

グエインは見下ろしながら優越感を感じていた。

「そんな……知っているのは、母上と、周りの侍女と……そしてカイト……」

ボソボソと咳く。

「オレが、『エストラーザ』に送り込んでいた者が教えてくれたわ」「ボクの……周りは徹底した防衛の中で。しかも、そうやすやすとは……」

混乱しているカイルは、今までの『エストラーザ』のことを思っていた。

「だから、大丈夫だ。どういう経緯でお前が男として、生きてきたかは知らぬが安心しろ……」

これからオレの元にいる限り何の心配もいらない」

グエインは、静かにカイルの手を取ると、燭台を持ち外へと促した。

「『キリアートン』では、お前は女として扱ってやるから、安心しろ」

凍えるような夜の星空の下、二人は秘密の穴を抜け『キリアートン』の城へと歩いた。

ただ、カイルの胸の内に知られざる恐怖が渦巻いていた。

山下、遠くで炎が燃え盛っている。それを、カイルは今はまだ知らなかった。

#16 適わない想い（後書き）

カイルは女の子です。

って、多分、此処で驚かれた方沢山いると思う。。。済みません・

・
男装の麗人風なイメージでここまで書かせていただいております。
後書き・・・最終話で書こうかなと思ったのですが、一応此処で書
いておこうかなと。。。

もしかして、男の子だとやはり思ってたらしやったらごめんなさ
いm(´・`・)m

って、ずっとそう言う風にしてたから、皆さんやっぱどんでん返し
食らってしまったのでは・・・

一応謝罪をこめて。

でも、あたし的には女の子でいて欲しいです望)

まだまだ続きますが、これからも温かくこのキャラたちを見守って
いただけると嬉しいです^^

#17 もう一人の自分

もう一人の自分

燃え盛る炎の中。泣き叫ぶ子供の声が辺りのとどろく。

オレが『エストラーザ』に到着して半刻も立たない頃のことであった。

宮殿の東に位置する街より出火した火のため、辺りは騒然としていた。

まだ、何も口にしていないオレは、連日の衰弱のため動きもとりづらく、足取りも重かった。が、この惨事に動かない訳にも行かなかった。

「カイト皇子！出火したのは東の外れの国境近くです。今、消火のため、村の長オーエンが中心となって活動しております」

「そうか、御苦労」

『キリアートン』の奴らだな

確信を持ってオレは思った。

早くも、行動を起こしてきたか

「オレも後で行く。取りあえず上手く鎮火する事を第一としろ」

そういうと、肩に力が入った。

「カイト皇子、少しお休み下さい」

ケルト宰相は、疲れ果てたオレに優しく声を掛けたが。そう言う気分になれるはずなど無かった。

「何、こうしていると少し気分が、落ち着く……それに、一国の大事に休んでなどおられん」

ここで今自分ができる事など限られる。幽囚ゆうきゅうであった時に自分の存在意義を考えたが、今の子の世界が自分のいる世界だ。夢などでは無いのだから。

「では、せめて食事だけでもとって下さい。見ている私達が困ります」

チラリと視線を流す。心配している周りの者達の視線が痛い。

「わかった……そうさせてもらおう」

軽く食事をしたオレは、再び広間にある椅子に座る。目の前には、『サリバーン』のハザウエイ王と、フェンディ皇子がすでに控えていた。

「カイト皇子、この度は御無事で何よりです」

「とんでもない。そなたの息子フェンディ皇子のおかげで今ここに
いる事が出来るのです。こちらこそ、有り難く思っております」

オレはフェンディの方に目配せをし礼を言う。

「どうやら、カイルの方も生きているとのことらしいが、その事を
詳しく聞きたい」

そう言うと、顔を上げてフェンディはその経緯をオレに伝え始めた。

「では、カイルは、そなたの助けを退いたと言つのか？」

オレの声に、周りでざわめきが起こる、

「カイル殿には、何か策があるようでしたので、敢えて、その意見を
尊重致しました。これで宜しかったのでしょうか？」

一度、フェンディはカイルの事の処置に付いてカイト皇子に訊い
ておく必要があった。

「カイルがそう言ったのであれば……それは仕方ない事だ。フェン
ディ皇子が気に病む事ではない」

そういうと、オレは少し考え込んでしまった。

「して、これからの事なのですが……」

と、ハザウエイ王は、先の事を安じてオレに進言してきた。

「既に、戦いの火ぶたはきつて落とされたのです。如何なる手段を用いて『キリアートン』を攻略するのかを考えなければなりません！」

「火付けが行われてしまっております。事実を曲げる事も出来なければ、この城内に、『キリアートン』の者が紛れ込んでいる事も考えられます」

フエンデイがその先を列ねた。

「そうです。今すぐにでもこれからの対処を練らなければなりません。できれば、会議を開く必要があります」

ケルト宰相も同意見で参列した。

「分かっている。ならば、会議室を設ける」

そう言うオレは、力強く立ち上がり会議室を案内した。

「こちらが『キリアートン』の城への地図となります。ほとんど言って、何処を通って行っても木々の中で、開けた道は南から抜けるこの道一本です」

探索も兼ねての奪還作戦だったと、テーブルに広げられた紙切れにあるのは自分が扱った物より少しだけマシに感じられた。

「一日歩き回ってみたものの、地の利を考慮された防御が引かれており、さすがに簡単には突入する事が難しいと言っほかありません」
フエンデイが、その地図を見ながら答える。

「ただ、カイル殿がいたのは、この辺り（西方面）で、ゲイン自ら足を運んでいるともなれば、この辺りに隠し通路なるものがあるのではないかと、そう確信ができるのですが……何ぶん、私の力ではその際、探し出す事は出来ませんでした。今一度、わたくしの密偵が情報を集めております」

フエンデイは言うつと、一礼をして一旦話すのを止める。

「きつと、ゲインの事だ、ここ以外にも多数の抜け道を作っていることであろう。その散策を試みる事は良い事かも知れぬ」

ケルト宰相がその後続いた。

「今一、謎に包まれた国でありますな『キリアートン』は……物資の運び入れなども、独自の方法をとっているらしく、こちら側から覗く事は出来かねました」

そう言う宰相の言葉は、余りにも意表を突かれた今回の出来事だとしても言うかのようであった。

「戦をするに十分な食料の貯えは、取りあえずの所安定はしています。ただ、我が国の兵力が足りるのかが問題です」

『エストラザー』の、兵を管理するマクベ大將が、答える。

「その件でしたら『サリバーン』も、協力致します。兵として、五千は出せます」

フェンディは自分の持ち部隊について話し始めた。

「何？いつの間に関それだけの兵を？」

国王ハザウェイは驚いていた。

「何事も、備えあれば……ですよ。父上」

我が息子の言葉の威厳を一瞬心強く感じられた瞬間だった。

「面目ない。それでは、我が国も募れる兵をすぐ準備致します」

そう言うのと、マクベ大將はこの場を後にした。『エストラザー』の沽券に係わるからであった。

「では、我が国『サリバーン』も、翌朝までにはこれだけの兵を用意するように致さなければなりません。この事に関しては、メイトに頼む。それでは具体的な話をして行きましょう」

メイトが下がったところでフェンディは話を元に戻した。

「どういふ風に戦陣を組むのか？だな」

オレはきつとそこに行き着く話だろうと感じたとおり答えた。

「そうです。出来れば、無駄に血を流すような戦いは避けたい。ならば、地の利を利用できないように、平たい丘に誘い出すような戦いをしていくのが無難です。あと、グエイン国王をしとめる事が第一目的だとすることです」

フェンディは自分の考えを、すらりと口に出して答える。

「此度の戦の火ぶたを落とした元凶は、彼自身。他の者達はただそ

れの傀儡と言った所でしよう……独裁的な国に近いのですから。ただし、そのために、すこぶる敵の力は強いはずです。その点は十分注意しておかなければなりません」

そして続ける。

「基本的に、この場所を拠点に敵を燻り出す事。きつとそう簡単には誘いには応じない事と思われませんが、一番有利に立つ筈と思われ
ます」

と指されたのは、『キリアートン』と、『エストラーザ』の国境に面する場所。

「確かにここであれば、少し開けた場所だし動きもスムーズにとれる」

『フム』というふうにケルト宰相が同感する。

「そして、もう一つは、この場所。北回りで、木々が茂っており実際に動きをとれるか分かりませんが、ここからの進出をなされると対応する者がいなければ『キリアートン』側に問題が出る所であると推測されます」

その地点は、カイルの母が住んでいる所の近くであった。

「実際、攻められると困るであろう場所と言つのも考えておかなければなりません。不意打ちで、焼き討ちにあつのはたまりませんか
らね……」

そこで、

「では、この反対に、焼き討ちをしようか
？」

ケルト宰相は一案を講じた。

「敵は、やや、山頂に拠点を構えております。いわば、籠城を決め込んで来る事も可能性としてあります」

「それは名案です。しかし、あの場所にはまだカイル皇子もいらつしやるのではありませんか？それに、必要以上に山を焼き払って行くのは、感心できません。国土のほとんどが木で覆われているので
すから」

フェンディの言葉にそれもそうであると言うようにケルトは捻った。

「なるべく、火は使わない方向で考えて行きましょう」

フェンディは、まるでこの場を取り仕切っている。

オレは考えていた。この者を敵にまわさなかった事だけは、確かな勝利への道なのではないだろうか、少し、自分の力のなさというものを感じつつも……

そして、引き続き会議は続けられて行く。

「では、カイト皇子。このような感じで話を進めてはきましたが、何か異存はございませんか？」

「いえ、この方法で行くのが一番良い策だとオレも思う。なれば、今少し体を休めこの策に順じた方法をとって行く準備をして欲しい。では会議はこの辺で終えよう。みなのもの、大儀であった」

締めくくると、会議は終結した。

「現地での細かい算段はその時に……」

と、フェンディは言い残しこの場を去って行った。

目まぐるしい……

とオレは感じていた。

今でもこの状態が本当の自分の姿であること事態が、夢でない事を悟ってはいるものの、未だ慣れない。

何やら深い海の底、重いヘドロが足に巻き付けているかのようにある。

オレは、もう一人の自分の世界に紛れ込んでしまったのか?!?

と、SFじみた事を考えては頭を抱えた。が、違和感と事実が確実に交わり始めていた。

もう、この世界で生きて行くしかすべはないのだろうか？

これから先に起こりうる全ての事が悪夢にしか成りえないこの状況。それを今、両手の天秤に掛け量ろうとしている悪魔の姿が脳裏を過ぎった。

もう考えるのはよそう。疲れた

オレは短い眠りに就く。

この日は何の夢を見る事もなく、深い眠りに就いた。そして朝はこれからの始まりであった。

18 眠りの狭間

眠りの狭間

手を取られカイルは、『キリアートン』のグエインの部屋に導かれていた。

『エストラーザ』にはない簡素な寝室である。それは、部屋に入った瞬間、厳格な空気を感じさせる何かを感じたからであろうか。

みな寝静まっているかのようで、カイルはこの不思議なグエインの行動と、主の考えを野放しにしている国の体制に改めて隙間風を感じた。

「安心しな。何もしはしない。今日はこの部屋を貸してやるからここで休め。明日の朝には、お前用の部屋をあてがうように伝えておく。何の心配もいらない」

「……何だか静かだ」

「侍女をこの部屋に入れるのは朝と掃除をする時ぐらいだ……滅多に入れるものではないぞ。感謝することだな。ま、実際その方がオレ的に安心するからな」

素直な言葉だ。感謝と言うのは、少し違う気がするけれど。

「ベッドは貸してやる」

何？それは。女だからか？

「それじゃあ……」

「オレは、そのベッドの寝心地が嫌いだからな……逆に清々する」と言うと、近くの椅子に腰掛ける。カイルは音だけで判断して、もうそれが当たり前なのだと思い、

「ありがとう」

そういつと、ベッドに腰をかける。

「まだ気になるか？」

「えっ？」

「自分が本当は女である事をだ……」

「何故こんな姿でいるかって事か？」

「ああそうだ」

グエインはまじまじとカイルを見ていた。

「今では慣れてしまつて気にもならない」

そう慣れてしまつてゐる。何てこと無い。

「しかしよくそこまで、『エストラザ』の者達を騙すことが出来たな」

「それは君だつて同じだろう？」

そう、似た生い立ちだつた。

「それもそうだ。しかし、オレの場合は皆が承知の上だつたからな」

「そうなのか……それでも、みんなはお前を選んだと？」

「かなり無理強いもしたかな」

グエインは笑いを堪えながら答える。

「君の年で国王と言う事は……両親はもう？」

「あいつらは、とつくに御陀仏さ」

「まさか殺したんじゃ……」

「当たらずとも遠からずか？御名答！さつさと死にやがれて思つてたら、ぼつくりとな」

「……」

その言い方はどうだろうと思う。

「それより知りたいもんだね。何故わざわざ男の格好をして偽つてゐるのかを」

興味津々に訊いてくる。

「人の勝手だ」

「つれないな……オレはとつくの昔に告白してるのに」

それは無いだろうと言う感じで問いかけられた。

「……何が知りたいんだ？」

「カイル、君の全部だ」

知つてどうする？得になる事などないだろうに。

「面白い事などない」

「そんなのはこのオレが決める事だ」

一息つくように深呼吸をするカイル。別に話しても自分にはどうこう言う事でもないだろう。そう知られて困る事も無い。グエインがこれを餌に何か企む様に感じられなかった。だから、

「ボクも、君と同じ双子だったんだ」

ボツリと咳くように話し始めた。

「まあなんと可愛らしい子なんでしょう」

と、ボクを取り上げた人が言ったそうだ。

「もう一人産まれるようだぞ！」

「何!？」

「大変、なんて事でしょう不吉な……」

しかもその子は逆子だった。

「大変だ、早急に取り上げないと母体がもたない！」

それでも何とか母上はその子を産み落とす事が出来たんだ。

「この子息をしていない！」

それは男の子でボクの弟になる子だった。

「泣かせるのよ、何としても！」

母付きの主治医が逆さにして叩いたそうだ。それでも泣く気配はなかった。

「残念な事ですが、この子は天命を全うできずに逝ってしまわれた。主よ、この子の魂に平安を……」

そして、ボクが弟の代わりに男の子として育てられる企みが、一部で起こった。

「同じ性をもって生まれなくても、只でさえ双子と言う事で不吉なものに……第一皇子としての男の子が亡くなったとあっては……なんとも不吉だ」

「ならば偽りますか?この子を男として育てる……そんな事……私には出来かねますわ……」

しかし母上は反対したそうです。只でさえ居心地の悪い宮廷で、正妻よりも先に子を授かった事で気持ちが悪気だった。

「大丈夫です。私達はミレディー様の御味方ですよ……決してばれないように育てます！」

多くの者達そう言っただけを納めていったそう。

「……分かりました。ならば、御任せ致します。この子に幸ある事を祈って……」

結局母上はうやむやに、その事を承諾されたのです。

「男として育てられたボクは、この時第一皇子になった……カイトが産まれて来るまではね……しかし、話の成りゆき上、父上が第一皇子をカイトにした事が母上にとって良い事だった……母上は、この嘘がたまらなくなっていたのだから」

「気が楽になったのか……」

グエインが初めて口を挟んだ。自分と同じ境遇の者に対する言葉であろう。

「しかし、それまでの心労が重なって母上は宮殿を後にした。何かと側室のくせにと人々は豪語したんだ……初めから何も生み出す事のないものなのに」

「……」

「静かに生きていたい人で……優しい所を兼ね備えていた母を味方する人はとてもボクに優しくかった。」

それだけがボクにも母上にも心のよりどころだった」

今でも感謝しているという、心の中の紐を解くかのような静かな表情がカイルの顔を綻ばせた。

「これが、ボクの秘密だよ。こうやって話すのは……これで二度目だ。初めて話したのはカイトだった」

眠りの狭間に垣間見た安らぎのように気持ちが優しく揺れている。

しかし今のカイトは、その事さえ忘れてしまっているから……

「お前は、カイト皇子を好きでいられるんだな……」

「好きだよ。義弟として考えた事はない。死んだ弟の生まれ変わりだと思つて今まで接してきた……今のボクにとつては男として生きていた中で二番目に大切なもの。一番は母上だから……」

「もしカイト皇子が死んだら……お前はとうする？」

「ボクは狂つてしまふかも知れない」

行き場のない感情。

「確か前に聞いたぞ。お前は大切な者のために強くなるんだと、それが狂つてしまふと言うのでは矛盾しているのではないのか？」

「大切な人がいなくなつたら、強く生きていても仕方がないだろう？ いるからこそ強くなれる！」

「オレは、自分のために強くなる。誰かのために強くなるのではない、自分で強くなるために！」

反論するグエイン。

「水掛け論だ。何を言つても君には理解が出来ないんだ……ボク達の間にはかなりの距離がある。きっと平行線のままの」

「交わる事のない？」

「きつとね」

「……」

もういい、というようにグエインは張り詰めた糸を解いた。そして、

「もう遅い、お前は休め」

そうして灯された火を吹き消した。買うかな明かりが消えた。

「忘れるな。明日からは戦だ。お前の大切な者達の命が消え行くのだ。そして、それが今のオレのただ一つの楽しみだ！」

グエインは捨て台詞を残してその場を離れたのであった。

19 戦い

戦い

明朝、火災を鎮めた頃、兵を集めた『エストラーザ』と『サリバーン』の一行は、国境近く に陣を張った。

「総勢三千足らずのこの軍勢をよく一晩でここまで集められたものだな」

オレは宰相ケルトに囁きかけた。

「国の一大事、皆その事を承知しているのです。中には志願して雇った兵もいます」

「愛を感じるな」

自国愛とでもいうのであろうか？そして、今こそ力を！

「今一度、忠誠を誓え！」

オレは慣れないながらも皆に誅す。

「我らが国の繁栄を。そして、永遠の輝かしい勝利を！」

この言葉に皆が沸き立った。

「ハザウェイ王、フェンディ皇子。この戦は私達だけの戦いではない、貴方達の未来をも賭けた戦いになる。それを承知でここまで来た……もう、後戻りは出来ない。ありがとう」

オレは脇に控える二人に敬意を表すかのように一礼をした。

「それでは、作戦を実行に移す。各陣、配置につくように！」

号令と共に各陣は己の使命を果たすかのようにその場を散って行った。

オレ率いる兵は正面南の坂を目指して歩をすすめる。

ハザウェイ王率いる兵は東を、フェンディ皇子率いる兵は、一度辿った事のある西を目指す。

この晴天の下、各々勝利を導くための行進がついに始まった。

食料を運ぶための兵は十分に備わっているようで、今は遠征をす

るにも十分な程である。

それでも、今は、先の事など判らない戦が事なくして済む事を望むだけである。そして、勝利を持ち帰る為に。

「カイト皇子！」

脇に控えていたマクベ大將が、馬をオレの側に寄せて来た。

「気付いておるか？」

オレは周りに悟られないように返す。

「人数は少ないものの、足の速い者達が、木々の間を伝い確実に我々の足取りに合わせ潜んでいます」

「今は捨ておけ。何かの算段があるのであるろう…その内しつばを出して来る」

「承知致しました」

マクベがゆっくり下がっていく。

密かにこちらの動きを観察してきている。

きっとこの先の少し開けたところで陣を引いている事だろう

一度辿った事のあるオレの記憶の中にその場所が見えていた。

その場で体制が崩れないようにしなくては…

オレは無い頭でその算段を考えていた。

開けたその丘は、見晴しの良い場所だ。狭いこの山道での対戦よ
りきつと立ち回りが可能な場所だ。

伝令をオレの前を往くツールに言付け、前線の歩兵達の今一度の
体制づくりを敢行した。

次第に近付いて来る丘。

オレの胸の内は鼓動をより高まらせていた。

しかしその後、オレのその考えは的中した。
「うわー！ーっ！」

前線から悲鳴があがって来る。

敵の弓隊が、矢を射かけて来たのである。

「落ち着け！なるべく多くの者よ、丘の中央まで歩をすすめる！弓隊より前へ！」

見た所、三千人に近い敵の兵力。そして確実な戦力は我が軍の数にまさるとも劣らないと言えよう。

地に不利なのは覚悟の上の事。だが、それ以上にこの場を有利に事を進める事。それが先決だ！！

押し寄せて行く大軍。暫くして、馬隊がその前戦を突き抜けるかのように追い込みを掛けてゆけるだけ先を進んで行った。

「カイト皇子！前線は大分疲労をきたしてはおりますが、このまま一気に畳み掛けましょう」
クルトが進言してきた。

「それはクルトにまかせる！オレも今考えていた所だ！」

オレの周りにいる騎馬隊は、今こそという風に駆け出して行った。そして数人の兵は、槍をたずさえオレを守るかのように控えていた。

「これで、五分五分になった」

開けた丘での戦闘は程なくして、終結を迎えようとしていた。

それは、オレ率いる『エストラザ』の勝利であった。

しかし、その兵の半分がその攻防により痛い打撃を受けていた。

数的に有利であったはずの兵力が、地の利をもった『キリアートン』の戦力に苦しめられた結果が今ここに顕著に表れていたのである。

「今日の所はここまでであろう…これからこの地に陣を引く。できる限り負傷した兵を休ませる」

オレは全ての隊に伝令を遣わせる。これ以上の兵力を今日のこの日に全て使い切る事よりも、少しでも『サリバーン』の動きに合わ

せた戦いに賭けていた。

フェンディ皇子の動向は逐一報告が来る事になっている…今はそれを待とう

オレはじつくり考えていた。カイルを生かしているゲインが使っていたであろう抜け道。それを利用し、城内からこの厚き壁を開けて中に攻め入る瞬間。これが全てのチャンスになるのだということ。

しかし、ゲインはこの事までをも見通しているのではなからうか？

何よりも得難いチャンスだと思わせておいて、絶望の底に叩き付ける。これはあり得ない事ではない。

あの王ならばやりかねない

周りに無残にも転がっている敵国及び我が軍の死体を見回しながら、オレは脳裏にその事がちらついてならない。

ただ、今はフェンディ皇子そして、ハザウェイ王の連絡を信じ、体を休めること。その他なかった。

「今日は、あの日のような天候でなくて良かったな」

フェンディは、数騎の兵を率いて山中を歩いていた。

フェンディが率いる『サリバーン』の一行は、途中数十部隊に別れ西の斜面を散策するかのよう歩いている。

「確かにこの天気だと足取りは速いのですが、その分見通しが良すぎて、敵に見つかる恐れがあります。気を引き締めて下さい、皇子」

「分かっているさ、メイト…それだけじゃない、敵のこの狩猟用の罾、これにも注意を払わなければならぬのだからな」

と、言ったその瞬間、木の根に張られた罾をまたいで越える。

そろそろ、あの小屋の近くまでに差し掛かっているだろうと、辺りに目を光らせながら進む…が、いまだその小屋は見えてはこない。

「そろそろのハズだが…」

「そうですね。足取り的にはあの日の天候を考えれば有ってもおかしくはないのですが…」

メイトが相槌を打つように返す。

一部隊を率いるフェンディ皇子の言葉は正しい。とでも言うつかのように頷くメイトは、優しい声色をもちながら鋭い視線を辺りに投げている。

メイトは、フェンディの三つ年上の女性で、フェンディ付きの近衛兵として参列するだけの實力を持つ男顔負けの大将である。

髪は短く切りそろえて剣を構える姿は艶やかな風情で人を魅了させる程美しかった。

「この作戦…上手くいくとお前は思っているか？」

作戦をたてた当の本人がこんな事を言うのはどうかと思う。がしかし、心無しある事を心配していた。

「カイル殿の事ですね…」

メイトは、その心配の真髄を見事当てて来る。

「……」

黙り込むフェンディ。

「今は信じる他ありません。あの方が味方である事を…」

フェンディの中で、渦を巻いているのはこの事だけであった。敵国グエインの足元にカイルが跪いてしまっていると言うのであれば、この作戦は成功し得ない。

我々を城中に引き込み、その足を止められたのでは、成り立たないものである。

「カイル殿を信じるしかない…か」

ひたすら歩き続ける一行。

その先に、暫くするとあの夜の小屋が視界の中に映り込んできた。

「一先ず訪ねてみるか」

そういうとフェンディはその小屋へと足早く進んで行った。

東の地を散策するように歩いてきたハザウェイ王は、川に沿った細い道をフェンディ同様何部隊かに別れて移動していた。

この川は上流にいくほど深みを増した緑色をたずさえて流れていた。

「この川の水はどうかやら『キリアートン』の主水になっているようで、時間が来ると城内に流れ込んでいるようです」

と、一度この地を訪れたマーチンはハザウェイにその旨を申し立てる。

「時間になると?」

「そのようです。常に外敵からの侵略を気に掛けているのではないのでしょうか?」

「ふむ」

「しかし、一つ面白い事に気付いたのですが…」

「なんだ?」

良案と目されたその策を聴いてみたい。

「その時間を利用して、流れ込む水嵩をいつもの倍にすれば城内に被害を持ち込む事ができるのです。つまり、水攻め」

「なる程…」

「これに乗じて、城内に忍び込む事も可能なのではないかと」

「しかし、それをするには、この川の流れを一時せき止めなければなるまい?」

「その事なのですが……」

と、マーチンは静かにハザウェイの耳元で語る。

「ふむ、面白い。ならば合流地点で作戦会議を開こう…あと、この事をハイルに伝え各陣に報告する手はずを整えるように!」

ハザウェイは、この事をマーチンに告げる。マーチンは、連絡するための狼煙を上げていた。

東と西の盲点を見つけたこの戦いの火ぶたはすみやかに切つて落とされようとし始めた。

しかし、この事を知らないカイルは未だ『キリアートン』の城中にいる。

そして全くこの時は、カイルにとって、これが悲劇の始まりだとは気付く由もなかったのであった。

#20 招かれざる客

招かれざる客

「グエイン国王。朝の支度に参りました」

静かで冷たい響きの声が聴こえてきた。その声は目覚めて間もないカイルの耳に届いた。

「入れ」

既に目覚めていたのであろうグエインは、その声に反応するように声をあげる。

「失礼します」

とその隔てたドアが開く。

「今日から、この者の世話を頼む。我は暫く戦場に赴く」

そういうと、カイルの手を取りベッドから立ち上がらせた。

「この方は？」

見かけない者に驚く女中。

「我の客だ。名はジャステイ。失礼のないように接客しろ」

前もって用意していたかのようなグエインの言葉。

そして、未だ信じられないものを見たかのように女は大きな目を見開いて自国の王グエインを見ていた。

「オレが、女を連れ込んでいるのがそんなに不思議か？」

その立ち尽くしている女中に軽く皮肉を込めてグエインは言う。

「いえ、失礼いたしました。お言葉に背かないように努力致します」

一礼をし、カイルの元にその女は足を進めた。

「彼女は、目が不自由なのでな。少し手間取ることだとは思うが宜しく頼む。後で良いから薬師に診てもらおうように取りはからっておくように。オレはこのまま一度会議に出る」

それだけ言うとグエインはこの部屋を静かに後にした。

女はそれをただ訝し気に見送っていた。

それから暫くすると、侍女は動き始める。

「ジャステイ様。それでは、こちらへ」

カイルの手を取りその侍女は、部屋に案内するという風にこの部屋を出るようにと導いて行った。

「ゲイン国王は、何故こんな時にこのような女に現を抜かしているのだろう……」

カイルはわざとその手を引いている女に聞こえるように言葉を漏らした。

「…分かりましたか？」

女は答えた。隠す気は無いらしい。

「そう言う事は誰もが感じるであろう？ 実際、ボ…私がそなたでも感じる事です。所であなたの名前はなんと？」

『カッソーカッソー』二人の足音だけが石廊下に響き渡る。

「メイと申します。以後御見知りおきください」

「ではメイ。一つ聞きたい事が有る」

「なんでしよう？」

「何故、あんなゲイン国王のような男に従っているのだ？」

何を？ いぶかし気な表情でメイは、

「異な事を…誰もが恐ろしいからにございます……」

「恐ろしい？ そんな国王をよく奉って来れましたね……謀反を起す者はいないのですか？」

「謀反者など居やしませんよ。そんな事を考えるだけの力を持った時には、それこそ国王の偉大さを身を持って痛感する事になりましたようから」

「…立ち上がる者はいないと？」

「立ち上がる必要などございません。強さこそが全てです。あの方がいらっしゃるから今の今までこの国はあつたのです」

それこそ当然な事で有るともいうかのようにメイは語った。

そして、こちらにとでも言うようにカイルの手を引くメイは右に

曲がる廊下を指し示した。

「まず、浴場で御くつろぎ下さい…その様子ですと、何日も入られていないでしょうから。それから、貴女様のお部屋に御案内したくございますゆえ…」

そう言つとカイルは御呂場へと導かれて行く羽目になった。

戦場に赴くグェイン国王。彼が背負う者達は、ただ一途にも自分の王を信頼している？

湯舟に浸かつたカイルは、立ち籠める湯気の中一人考えていた。

ここ、『キリアートン』では、平和イコール、グェイン国王の政治の仕方。を心から信じているのであるのか？ならば、戦争を招いても誰一人として逆らう事などないかも知れない。いや、まだ成り始めた国一代。その事がすべてそう思い込ませるのかも知れない。もしそうで有るのであれば、これから起こる悲惨な出来事をかの者達はどう思うであろうか？

「お湯のお加減は如何ですか？」

控えているメイが声を掛けてくる。

「ありがとう。気持ちの良いお湯です」

響き渡る声が耳に心地よい。

カイルは、思う所をズバリ聞いてみたくなった。

「メイ、ところで、平和な国とはどのような国を言うのだと思われ
ます？」

先程の続き、メイはまたそんな事かという風に、

「我が国、グェイン国王が統治しているこの国こそを言うのに決ま
っております」

「本心か？」

カイルは、それが訊きたかった。

またもや訊き返される。こつも自分の国の事を訊かれると流石に

認し気に思いメイは返す。

「ジャステイ様。あなたは一体何が言いたいのですか？あたしは、グエイン国王に貴女様の事を預かった身では有りますが、あまりに不躰ぶしつけな事を訊かれます…もしや、あたしを謀反人に仕立てたいのですか？」

少し語尾に険が籠っている。それを察知した、

「ごめんなさい。そう言うつもりはないのです…ただ、あなたの事が知りたいと思ったから…」

カイルは、誤魔化すのに骨を折る思いであった。

「そうですか。ならば結構です」

メイがそう言うと、湯舟に流れ込んで来る水の音だけが辺りに響く。

メイにとっても、この国にとっても、ボクという存在は招かれざる客なんだな…

そう思いながらカイルは暫くゆったりと湯舟に浸かっていた。

程なくカイルは、メイに導かれこれから先自分が身を置く部屋へと向かったのである。

#21 キリアートン会議

『キリアートン』会議

会議にはグエイン国王及び、宰相メイディン、そして大将クラス
の騎士達が集まっていた。

「…ですが、この人数を持ってこの場を保たせるのはいささか困難
なではありませんか？」

響き渡る大将の声。

「いや、この人数で良い。敵もこれ以上は攻めては来れまい。ただ
足留めをすることと、敵への打撃を考えての配慮だ」

グエインは、その、大将アランにその心の内を明かす。

「確かに、開けた台地としてのこの場所は、我々にとっても、敵に
とっても一斉攻撃を仕掛けるのに都合が良い場所でございます。そ
して、地の利としても高台を持つ我らが有利にことが運びます。一
時敵の足を止めるにはこの地が最良かと…」

弓隊を率いるモラン隊長は答える。

「多分敵は、東と西に面した地より攻撃を仕掛けてくるでしょう」
メイディン宰相は地図を広げているその場所を指し示す。

「正面より侵入するのは、決して容易ではない事は、『エストラー
ザ』のナイト皇子が承知しているはず。無闇に行動を起こす事は決
して有るまい」

グエインは正面の門の強固なる場所を指し示す。

「『サリバーン』の者は、一度我らの城の周りを調査した形跡が有
る。もしかするとその盲点を突いてくるかも知れない。心しておく
ように各部隊に伝令をまわせ！」

その言葉に各将校はざわめく。

「特に西側の陣は見張りを厳重にしておけ」

これは、隠し通路のことをグエイン自らの意図も含まれてはいる

のであるが、誰もその事には触れないようにしていた。

「承知致しました」

そう言うと、一致団結を決意する返事が返って来る。

「一段落する頃、またこの城を出て、『エストラザ』の街に、火を放て！敵はこの城にばかり気を取られているはずだ」

そう言うと、グエインは座に腰を下ろす。

それを合図に、

「では、我々は各部隊に連絡致します。これにて失礼致します」

会議は一段落を終える。各隊将は、この場を後にした。

「グエイン王、手始めにと言う事では有りますが、この作戦は後に尾を引く事はございませんか？」

少し心配気なメイディン宰相は言葉を濁しながらグエインに忠告する。

「大事ない。籠城を決めこんでの戦だ。ただ、今は物資の事のみが我の安堵出来る物であれば、そう安々と、打ち崩れる事はないと確信しているからこそだ」

グエインの言葉を聴き、メイディン宰相も素直に従う決意を新たにす。

「承知致しました。そうやすやすと、敵の思う壺になる事はないでしょう。今は、王の意志を尊重する事が、我らの志気を高める事となりましょうから」

弟のグエインを頭としてやって行く事より兄の方をとったメイディン宰相の策略は好する事でなければ成らない。今だからこそ、皆は信じているのである。

「それでは、私もこの場を失礼致します」

短い会議ではあった。が、静かにそれは幕を下ろす。

独り残ったグエインは、確かな勝利への道を、感じ取っていたのである。

#22 予告

予告

フェンディ一行が、小屋を訪れてみると、中はもぬけの殻であった。

はじめ、これがカイル皇子の不在を意味するのであるのか。それとも、既に『キリアートン』に人質として捕われた事を意味するのか皆目見当が付かなかった。

「フェンディ皇子、これは一体どう言う事なのでしょう？」

一人歩きをするだけの気量が、彼にあったのか？否、ないはずだ。「あの目だ、そう遠くには行く事は出来ないはずだ。なれば、人質として囚われていると解釈するのが妥当であろう」

フェンディは小屋の中のある所を見回す。

別段荒らされている様子もない。この前訪れた時と変わらない内装であった。

そこに、背後からハイルが現われた。ハイルは直ぐ様フェンディに跪く。

「フェンディ皇子、カイル様は昨夜グエイン王に連れられて、『キリアートン』城に入られました。今は城内にいらっしやいます…」
最後の方は語尾が聞こえづらく、何とも言いがたい表情である。

「どうした？何かあったのか？」

その様子を不審に思い、フェンディは、ハイルに問い返す。

「…いえ大した事ではございませんが、ただ引っ掛かった事がございましたので…」

少し勿体ぶつた物言いが、フェンディにとって気に入らない事のように思え、

「何？言いたい事が有るならば申せ！」

と少し口調を荒げる。只でさえ、大切な『エストラーザ』の第二

皇子がいなくて緊迫している時であるのだ。

「実は、彼は…カイル皇子は女性である様なのです」

「何!？」

「グエインが単に、女装させたのであれば気にもならない事なのですが…実際、敵国で、目を不自由な身をさらす事から気に見守っていたのですが、侍女をつけ且つ女として振る舞える事ができるように、配慮されている点が……」

「わかった。それが、『エストラーザ』にとつてまた、カイル殿の隠し事とあるかも知れないと申すのであれば、我らは、少し考えずして行動する他あるまい。男であろうが、女であろうが関係はない。見間違っただけはするな!」

フエンデイ自身驚きの表情を隠す事は出来なかった。しかし、誤った行為を避けなければならぬ事だけは事実なのである。

「承知致しました。それから、ハザウエイ国王側からの伝言が有ります」

そう言うのとハイルは、事の次第をフエンデイ一行に伝えた。

「分かった。御苦労であった。また何かあつたら連絡をくれ」

「それでは……」

ハイルはその場をすみやかに立ち去る。

「ハザウエイ国王も、難しい手を考えつかれましたな」

メイトは、フエンデイの側に仕えたまま言葉を発する。

「東側でこれからやることの前に、我々も気を引き締めておかなければならないな…それに成功すれば、一気に正面からと、この西からの攻撃を果たさなければ成らない」

「…カイル皇子を助け出すだけの余裕は有るのでしょうか?」

おくびにも見せてはいなかったが、メイトは気にしているようだった。

「そのためにも、ハイルには気を配ってもらわなくてはならない…大事な事だ」

そう言つと、小屋から出ようとフェンディは歩き出した。

「どこかに、抜け道が有るはずだ……しかし、この状況下で見つけたとしても、ただ畏にかかる事になるかも知れない。よつて、下調べをするだけに止めておこつ」

そう言い残すと、東側の動向を待つてからの行動を出来るだけしておこつとフェンディは、『キリアートン』の者らに気取られないように城周りを重点的に見回るよう伝令を出したのである。

城、正面側で待機をしているオレ達は、今は只これからの算段を味方に伝える事で持ち切りであつた。

一通りの事は、やつていた。あと残つた兵力。そして、生け捕つた『キリアートン』の者から情報を聞き出す事は、ほとんど終わつていた。

「ゲイン国王の手の内は大体分かつたが……すべて、向こつこの思ふ通りの策にはまつている。焦りは禁物だ！」
オレは思つていた。

もし、東側の攻略までをも配慮していた時にはどうする？

ただ不安に駆られていた。

この高台での戦略は既に深い痛手を負っている……きつと、西側の方も計算に入つている事であるだろう

きつと、その事は、フェンディ皇子の方で対処している事では有ろうと考え、まずは、

「ユール殿、申し訳ないが、一時『エストラーザ』に戻り、『キリアートン』の夜盗が出て来ていないか調べてきてはくれまいか？」

オレは、『エストラーザ』に、緊急の兵力を置いていない事に気が付き、『サリバーン』の将校に遣いを出そうと思ひ立つた。

「承知致しました」

「伝令を伝えたら、またこの場に戻ってきて頂きたい」

ユールは、その言葉に返事をする、来た道を馬で駆け降りて行った。

もう日も沈もうとしている頃であった。

三日後の夕刻。ハザウエイ王の策。これが、最後の賭けになるであろう事。それを頭に入れオレは自らの体を休める事にした。

#23 緑色の瞳

緑色の瞳

水しぶきの音が聴こえる。それは新緑の中。雄大な青空を従え、オレは城近くの泉で水浴びをしていた。

「気持ち良い〜！」

光り溢れる中、水しぶきはその光を浴びて『キラキラ』と光っていた。

その泉の淵で、静かにカイルは素足を浸している。

「どうだ、カイル！足が付く所までなら入って見ないか？」

オレの言葉にギョツと驚くカイル。

「いいよ。ボクは……」

遠慮するかのようにカイルは答える。

「遠慮するなって！オレが手を引いてやるから……気持ち良いぞー！」

そう言うと、オレは、カイルのいる所まで泳いで来る。

「本当に良いてばっ！」

ただ遠慮しているんだとばかりに思い、オレはカイルの手を取り、泉のままで引きずり込む。

「ちよつと、カイ……」

拒絶する間もなく、滑り込むかのようにカイルは肩まで水に浸かっていた。

「いつもオレが泳いでいるのを待っているだけじゃつまらないだろうが！」

と、言いかけたオレは、カイルの様子を顧みた。

「カイル？」

そんなカイルの様子がおかしい。衣服のまま引きずり込んでしまった。

「そんなに嫌だったか？」

無言のままであった。頭まで被った水が滴り落ちている。

「ごめん……悪ふざけし過ぎた」

オレはしょんぼりと肩を落とす。

「でも気持ち良いだろ？」

そうやってオレが宥めているのにカイルは黙っている。何もそこまで怒らなくても。

「わかったよ。悪かったって！機嫌直せよお」

どうすれば良いのかに困ったオレは、そう言いながらカイルの手を引き陸へとあがった。

しかし、カイルは、オレに背を向けて座り込んでいる。

「どうしたんだ？本当にそんなに嫌だったか？」

しぶとく謝っているにもかかわらず、カイルの機嫌がなおらない様子なので、オレは頭を抱えていた。

「いいから、こつち見ろって！」

手を取り振り向かせようとするオレ。

その手を振りほどこうとするカイル。

余りにも尋常にならないカイルの行動に、オレはついに怒りを覚え始めていた。

「何だよ……そんなに拒む事ないじゃないか……」

言った後に表情を無くした。

「お前……」

胸元を押さえているカイル。そこには少し膨らんだ胸元が、濡れた衣服の上から覗いていた。

「……女……」

ただ、カイルの緑色の瞳が揺れていた。

ここで、『はっ』とオレは目を醒ました。

戦場で仮眠を取っていたオレは、岩影で跳ね起きる。まるで、思出の中に真実の一コマを見た気分であった。

夢？

いや、これはきつと事実なのだ。

まるで見た事のあるそれは、実際、己の中の大切な何かである事だと言う事をおぼるげながらも悟った。

オレの中に、この世界の何かを思い出しかけている

何と言う事であるのか？

事実、記憶喪失と言う病症の縁に立っていたのは誠の事であるのか？

それさえ、何が真実か分からなくなっていた。

しかし、こんなにもカイルの事を思っている自分は、異常な程である事は前々から悟っている事ではあった。

オレの中で、沸き上がっている感情

これを押さえる事が出来ない。

カイルが女？

なればこそ、こんなに心配している？

もしかしてオレは……

頭の中で言葉を無くした。

あの時、カイルは言った。

『全て忘れてくれた方が良いのかも知れない』

オレはもしかしたら？

この世界に来る前のこと……

そんな覚えのない事に、引き込まれている想い。それは、気付かぬ内に、行動としてにじみ出ていたのかも知れない。

オレが知らないオレは、カイルを愛していたのかも知れないというのか……？

頭の中で響き渡る音。

まだ明けない夜。

独り静かに起き上がっていたオレは、再び眠りに付く事さえ出来ず考えていた。

振り返る記憶に有る過去。

今まさに自分自身の悩みの種である全てがここに来て明らかになりつつあったのである。

「薬師をお呼び致しました」

メイはそう言つと、ベッドに横になっているカイルの元に、薬師を呼び寄せた。

「ところで、そなたの症状はいかがなんでしょうか？」

分からない事ゆえに薬師は尋ねる。

「幼少の頃、毒で目をやられたのです」

「毒で？」

「弓に細工してあったようで……実際どう言う物であるのか分かりません。ただ、私の視力は暗闇か陽の当たっている場なのかを判断する事は幽かに出来る程度でございます」

そう言いながら、半身を起こしカイルは簡単ながらも答える。

「それは難儀な事でございますな」

気の毒に思つた薬師は、それだけ言つと、何やら薬草を取り出し

煎じはじめ。そのなんとも言えない薬の臭いが部屋中に充満し始めた。

「今さら効くかどうかは分かりませんがこの解毒剤を作りますので目に当てておいて下さい。決してはずさぬ事」

そう言つと、布にその薬をしみ込ませカイルの緑色の瞳に軽く押し付け、布で巻き付ける。

「もう暫く安静にして下さい。言っておきますが、必ず効く物だとは努々思われない事でございます……」

それだけ言つと、片付けを済ました薬師は速やかにこの部屋を後にした。

その後、暫くすると、

「一先ずあたしの仕事は終わりましたゆえこのまま引きあげます。何かございましたらお呼び下さい。それでは夕食の時に参ります」

と言いつと、メイもこの部屋を後にした。

残されたカイルは、体を起こしベッドの端に腰を下ろした。瞳に施された布が熱い。

この日まで一度たりとも外界を見た事などなかった。

もちろん、初めから期待などはしてはいない。

でも…もし見えるようになる奇跡を願わざるおえない期待。

少しでも、見えるようになるのであれば、これほど嬉しい事はない。と今まで心の奥に仕舞い込んでいた想い。

今まさにその先に来ている。

しかし、それは悲惨な光景を見なくてはいけない状況下。

……これは見えない方が幸せなのか？

カイルは考えていた。

光が、宿る。その瞬間は、実は闇なのかも知れない

カイルは再び床に横になった。

#24 夜明け

夜明け

清らしい朝は、変わる事無く訪れる。

一体昨日とどう違うのか？それさえ疑問なカイルであった。

「おはようございます。ジャステイ様」

メイが社交辞令のように挨拶をする。

「ここは、昨日から使用しているカイルの部屋。シンプルで、『リアートン』独特の石レンガで囲まれている。」

「本日もまたよい天気でございますよ」

と、唯一ある窓の閉ざされていたカーテンを開く。

しかしその様子など、明かりの加減でしか見当も付かないカイルは、

「おはよう。それは良い事ですね」

とだけしか答えられない。

「本日は、グエイン国王不在のため、あたしが全てお世話をさせて頂きます」

カイルの前で一礼する。

「少し風に当たりたい。外に連れ出して頂けますか？」

この動きのない部屋に居ては、気分も優れない。それも、既に戦乱の火蓋が切っておとされている今なればこそである。

「結構ですよ。外の空気を吸うのは体にもよろしい事でしょうから

…ただし、お先に朝食を召し上がってからですよ」

そういうと、食卓に手を取って案内してくれた。

「三千の兵より、二千の兵が戻ってきたのか…」

第一の門の近くに引き返してきた兵を迎えながら、グエインはモラン率いるその隊を眺めていた。

「敵は五千の兵を動員していて、なるべくこちらの被害を避けたためでございます」

「して……敵の被害の程は？」

「五千の半分はしとめた次第でございます」

「まあ、妥当な所だな」

その言葉に反してグエインの表情は堅い。

「少し兵を休めろ。また、夕刻に奇襲を仕掛ける。準備は怠るな！」

「承知致しました」

それだけ伝え終わるとグエインは第二の門へと足を向けた。

「国王も、寝ずの番をしている。それでもオレ達の帰りを待ち望んで下さっているのだ！それに報いるため立ち上がるぞ！」

モラン大將は、そう言つて味方の兵を煽っている。

「城壁の外で不穏な動きはないか？」

各城壁の場にグエインは赴いて情報を聞きに回っていた。

「今の所はまだ何も！」

アラン隊將以下の兵は口々に言う。

「ならば良い。これからも辺りの様子に気を配れ。よいな！」

「はっ。もとより承知してございます！」

そして立ち去る。

「グエイン国王。少しお休みになって下さい」

メイディン宰相は、そんなグエインの行動をたしなめるように進言した。

「なあに、心配するな。戦線に立っている訳ではない。本当だったら、オレが全て取り仕切っていた所だ！」

「お気持ちは分かります。ですが、今は一国の王であらせられます。その自覚を少しお持ちください！」

そうは言われるものの。野生の魂がグエインを掻き立てているのである。

「ところで、女を匿われてとか聴きました……国王は一体何を御考

えなのですか？」

早くもメイディン宰相の耳に入ったらしい。

「気にする事では無い。只の退屈しのぎだ」

その言葉に、何を真迦なという風に、

「あれは、『エストラザ』のカイル皇子ですね。生かしていらっしやったのですか？誰の目をも誤魔化したとしても、この私の目は誤魔化しきれませんぞ！」

「それがどうしたという？大した事ではないぞ。捕虜が一人増えたまでだ」

「捕虜の待遇とは思えませんが？」

「邪推な事を聞くな。オレが気に入っている。只それだけだ」

「…目を不自由にしていると聞きますが、一体この『キリアートン』に何の得が有ると言うのです？！」

「人質にはもってこいの人物だ。しかも上玉のな！」

「確信あつての事なのですね？」

「当たり前だ」

「それならば、お言葉に従います。しかしもし、災いをもたらすとなれば、この私が黙ってはおりませんぞ。心して置いてください！」
そう言つと、メイディン宰相は一足先に城の中へと立ち去る。

災いだと？あの者にそれだけの器量などありはしない。只の玩具だ……

グエインは、再び城外を視察するために辺りを見て回った。

城外は簡素な木々を取り巻くだけで、何の変哲もない。が、遠く

木霊する木を切る音。

『カッーンカッーン』

一瞬何事かと思う。

「おい、あの音は？いつから鳴っているのだ？」

近くに控えている兵に声をかける。

「昨日からでございます」

「……………」

何か考えるように腕組みをするグェイン。

「におうな……………」

「すみません。一昨日から風呂に入っていませんもので……………」

そんな事を聞いているのではない。と思っただが、

「気をつける。何かの前触れになるかも知れない」

「はっ？」

「見張りを厳重にしると言っただんだ！」

「はっ。心得ました」

この時グェインの頭をかすったのは、まぎれもなく、これから先の末路への一つだったのは、言うまでもない事であった。

その木霊は、三日三晩に続き聴こえるのであった。

「まあ、綺麗！」

庭を歩いているカイルとメイ。

冬の『キリアートン』の肌寒い風に誘われて、二人は庭を歩いていた。

「こんな所に春蘭が！春も近付いてきているんですね？」

そう言うメイは一房花を取りカイルの耳に挿す。

「お綺麗ですよ。ジャステイ様」

少し照れているのかカイルは顔を赤らめながら答える。

「ありがとう」

少し香りの強い花のようでその臭いを楽しむ。そこに聴き覚えの有る足音を聴いた。

「慣れ親しんできたのかな？ジャステイ殿」

その足音を聴いた瞬間、それが、グェインのものであると確信した。

「まあ。グェイン国王。こんな所に足を運ばれるなど、お珍しい」
メイは、その姿を見て感嘆の声をあげる。

「ええ。メイ殿が、お誘い下さったんです。外は良い陽気のようですね」

皮肉にも軽く挨拶をかわす。

「薬師に、治療してもらったらしいな」

カイルの目を見てその様子を感じ取る。

「ありがとうございます。しかし、治るか治らないかは、期待せぬように忠告を受けました」

「時が経ち過ぎておるからな」

一度治るといった手前、

「そのようです」

「それより、グェイン国王お休みになって下さいよ……みな心配されているのです。国王が、ここぞという時に寝込まれでもしたら困りますから！」

メイは、力強く忠告をする。

「分かってている。メイ、お主の言いたい事は、メイディンの口からも聴かされたわ……」

頭をかきながら、答えるグェインの様子は余りにも年相応の普通の少年のようであった。

カイルにはその姿を見ることは出来ないが、声色が優しく感じられた。

「良く似合っているぞ……ジャステイ」

なんとも形容しがたい様相のカイルを見ながらグェインは少し照れくさそうな声色でカイルに語る。

「ええ、メイが取ってくれたのですよ。似合いますでしょうか？」

「似合っている。本当に……」

カイルは少し違和感があるものの、グェインの口からも聴かされる言葉に嘘がない事は感じ取っていた。

「何だか変な気持ちですよ」

カイルは未だ少し顔を赤らめていた。

「西の空に、雨雲が立ち籠め始めた。早く城内に入れ、一雨来るぞ」

「あら、本当。さあジャステイ様、お手を……」

そう言うと、メイはカイルの手を取り城内へと向かった。

「オレも少し休む。ジャステイ、話したい事が有るオレの部屋へ来い」

その言葉をメイは聞き入れ、カイルをグエインの部屋に導きその場を離れた。

「宰相のメイデインが、お前の事に気付いた。なるべく城外に出る事は控えてもらいたい。まあ、縛り付けるつもりはオレはさらさら無いから気にしてはいないのだが、我が国の士気に乱れが出ては困る」

「ボクは、『エストラザ』の者ですよ。そんな事気になどしてはおりません」

「敵なのは承知の上で言っている」

グエインは、椅子に腰掛け対峙しているカイルを傍観しながら答える。

「もともと、オレのエゴで、助けたのだから、何も困る事など起こりはしない事は重々承知の上だ。しかし、あまり自由に動かれたら、人質として匿っているオレの身が怪しまれてしまう」

「本当はそんな事などどうでも良い事なんでしょう？」

心の内を読まれた。が、グエインは動じずにカイルに告げた。

「お前をこの城に招き入れた道筋を『サリバーン』の連中は血眼になつて探し当てる事だろう。いや、既に見つけているかもしれぬ」「畏を張っているんですね」

「そのような事は、もう既に分かり切っているからな。敵も注意している事とは思いますが、隙あらば何か策を考えて行動に移すであろう」「女でこの身の上。もう、助けなど送る事は無いでしょうに……」

カイルは、思っていた。それが当たり前であると。

「いや、カイト皇子はそんな事考えてはおらんである」「しばしの沈黙。」

「カイトは、カイト皇子は、ボクがこんな身で有ったとしても確かに助けようとするかも知れませんが、『サリバーン』の者がそうやすやすと危険をおかししてまでボクを助けようと動くことは無いでしょう」

動じずに答える。今動じてしまったら、何か策を講じてやって来る『サリバーン』の者達に立つ瀬が無い。

「本当にそう思っているのか？」

「あの時逃げなかったボクの事など気にもしてはいないでしょうか……」

「……」

「そんな事より、籠城を決め込んだのですか？」

戦場に赴いているはずのグエインが今ここにいる事が疑問であった。

「我が国の城壁を破って来る事などできはしないであろうからな」

「甘いですね」

「何を？甘い？」

語尾を濁らせるグエイン。

「物資は余り有る程に豊かなのだ。後は日にちを置いて敵の物資を減らして行けば事足りる。そこに、付け入って一気に国境を越えて叩き潰すのみだ」

「なるほど。そう言う事ですか」

カイルは今ここにいるグエインの考えを知ってしまった。

「本当に上手くいくのでしょうかね？」

「決まっている。オレを見くびるな」

「見くびっていたりしませんよ。ただ、『エストラーザ』や『サリバーン』の事を甘く考えているようですから忠告しただけです」

ここで、『キリアートン』を卑下してみる。

「ふんつ。まあいい。奴らの戦力のなさは、分かっている。後は、奇襲しか無い事。うちの千の兵力に三千近い兵力を持ってしか太刀打ちできない様じゃ、たかが知れている」

その言葉をグェインは何とも思っていないらしい。自らの兵力を過信しているのかそう告げた。いや、勝てると確信を持っているのだろう。

カイルの鼓動は高鳴った。

「既に血は流されたのか？」

「ああ、高台の地だな。ぶざまなもんだなあカイルよ。たかが弓隊にやられているようじゃ、言葉もでないぞ」

「……ボクはここで一体何をしているんだろう？この目さえ見えていたら戦いに出て……」

「そう望んでも詮方なきであろう？この地で、己を恨むが良いわ足を組み換えるグェイン。」

打ちふせられたカイルの様子を楽し気に眺めていた。

「これからが楽しみであるよな。カイル？」

「楽しくなど無い！今ここに剣があればお主を切り捨てられるのに……」

カイルの手が小刻みに震えていた。

「笑止。もしお主の目が見えていようと、そんなに容易く切れる事など無いわ！」

『わはははは』と、高笑いするその声があたりに響く。

「もしできたら？その口をへの字にしてくれる！」

「待っているぞ。楽しみになー！」

「……」

怒りのためこれ以上話したく無いと思ったカイルは、腰をあげた。

それを合図に、

「メイ！ジャステイ殿が、部屋に戻られるぞだ。手を貸してやれ！」
グェインは立ち上がり、扉を開いて手を打ちメイを呼ぶ。

「それではごきげんよう。ジャステイ殿」

カイルは、グェインの手を振り払いドアが有る方へと歩いて行った。

「今の言葉、覚えておいて下さいね！」

捨て台詞のつもりだった。

「ああ、覚えておいてやるっ！」

しかし、返ってきた言葉は、自信の有る言葉だった。

#25 奇襲

奇襲

この日は、朝から夕刻まで、兵の看病と統率に余念なく行動していた。

一日中管理体制をしいていた兵は、見張りも交代制で上々である。見張られてはいるものの敵の動きは一向に無い。

「一体『キリアートン』の者は何を考えているのでしょうか？」

クルトは疑問だとオレに話し掛ける。その答えが欲しいのだろう。

「本日は、戦う気が無いのかも知れない」

「……にしても、見張りは絶えずこちらを伺っておりますね」

「ああ、だからとて気を抜くな。いつ奇襲をしかけてくるかも分からない」

「ええ、その事は皆承知の上です」

まだ、物資の余裕は有る。また何かをしかけられてもその算段を怠ってはいない。

「もし、仕掛けてくるとしたら夜半であろうな」

オレは確信していた。

疲労している兵。休んでいるのはなにぶん夜の者達が多い中、攻められて困るのは夜であった。

刻々と日が暮れる。

この一日が長く感じられた。

早く約束の日が来る事を願って止まない。

オレは昨夜、余り休む事が出来なかつたから、今頃眠気が襲ってきた。

中央で焚き木を絶やさないように兵が寝ずの晩をしている中、岩影でオレは『うつらうつら』していたそんな時であった。

地鳴りがしてきたのである。

「我は、『キリアートン』軍大将アランである！カイト皇子の首を貰い受けに参上つかまつった！」

騎乗した兵とその配下の者たちが一気に坂を駆け下りてきたのである。

「カイト皇子！」

身近に控えていたクルトがオレを揺さぶり起こす。

「敵の兵が参りました！」

慌ただしく退く『エストラーザ』の兵達。再びの戦闘。闇の中戦い慣れない『エストラーザ』には、分が無い。

「この闇に隠れているようでは、何と腰抜けの皇子であろうぞ！」

敵はと言えば、言いたい放題言っている。

「クルト、オレは出るぞ！」

その言葉に一気に頭に血が上ったオレは、すばやく立ち上がり、剣をたずさえてその音のする場へと走り出した。

「カイト皇子！」

叫ぶクルト。しかしその言葉も聴こえないため、オレは中央の灯りがある場所まで走り込んでいた。

「お主がカイト皇子か？」

「いかにも。オレがカイトだ！」

「腰抜けかと思っただが、少しは骨の有る奴の様だな？」

アランの口元が笑いのため釣りあがるのを見落とさなかった。オレの血が滾たぎった。

「では、覚悟！」

剣を鞘から引き抜き襲い掛かるアラン。

周りでも他の兵がそれに続く勢いで突進して来る。

『カキーン』と、一度刀を重ねる力と力の勝負が続く。でも後に引かないオレに、

「少しはできる様だな」

「ほざけ！」

息巻くオレ。この有様を見ていると、イラついてしまった。そし

て瞬時後ろに飛び退く。身を翻すアラン。

再び重ね合う剣。馬上で身を翻すアラン。

「馬なんかに乗っているから動きもままならんってか？下りて戦ったらどうだ！」

「きさまごとき、このままで十分だ！」

その言葉に、馬に切り掛かった。オレはかなりムキになっていた。

「姑息な！」

足を負傷した馬が、前のめりに倒れ込む。

「これで、対等に戦えるな！」

転げ落ちるアランを見下ろす。これで、対等だ。それを見て、アランはすぐさま身を立て直す。

「後悔するなよ、カイト皇子！」

再び切り合いになる両者。

誰かが森に火を放ったのか、辺りはいつの間にか、火の海になっていた。

『カキーン』閃光が走る。

『ギリギリギリッ』力押し of 剣は、オレの頭上を掠める程間近に迫っている。どうやらオレは力負けしているようだ。再び、後ろに退く。

こうしてみると、アランの方が背格好から見ても有利である。

足下を狙って懐に入る他無いな

オレは大剣を操っているアランを一睨みして構えを改める。

汗ばむ手の平。

そこに、クルトが走り込んできた。

「カイト皇子！この者の相手は私が致します！」

そう言つと、オレと、アランの間に入り込んで来た。

「邪魔をするな、クルト！」

「皇子には、他にやるべき事が有るはずですよ！もう少し御自分の身

をお考え下さい！」

その言葉に打ちのめされた。

「自分の身？」

「あなたがこの場で打たれでもしたらこの先の『エストラーザ』はどうして繁栄して行くのですか!？」

クルトの背中を眺めながらオレはその言葉を聴いていた。

「オレが？」

『カキーン』ぶつかり合う剣。大きな背中がアランの剣を阻止している。

「……………」

「皆はあなたに、未来を託しているのですよ！」

アランの翻るマント。それがオレを掻き立てる。

「カイト皇子！お逃げください！」

「させるか！」

『キーン』離れるアランとクルト。後ろから見ていても互角の二人。……すまない。わかった……しかし決して死ぬなよ！生きてオレの元に戻れ！」

再び重ねられる剣。

オレはその姿を最後に見届け、坂を駆け上がった。周りに居る味方の兵と共に。

道すがら敵の兵がオレ達の前に立ちふさがった。が、今のオレは、後の者達の事を考えては、ここで踏ん張る事こそが生きている証なんだと思い、その剣は冴え渡った。

「『エストラーザ』の兵よ臆するな！進め進め！」

燃え盛る火の勢いに負けじとオレは先を急いだ。

それは当て所も無い道であった。

一中夜、火は辺りを朱色に染めていた。それは、夜空さえも飲み込んでいた。

やっと東の空が白む頃、敵の兵の追っ手も途絶え、オレは近くの木にもたれ掛かるかのようにして倒れ込んでいた。

夜露が鼻先を滑り落ちる。

『ピチヨン』と言う音で目を醒ました。

木の葉の間から霧雨のような雨の雫が体の熱を奪い去って行った。目の前には霧が立ち籠めていて、身動きもとれない。

「カイト皇子、お目覚めですか？」

マクベ大將が、オレの側でその様子を見守っていた。

「ああ……ここは？今は何時だ？」

「森の中に迷い込んだようです。少し歩けばもとの道に戻れるとは思いますが……時間の方も分かりません。多分、明け六つ程ではないかと……」

「他の兵は？」

「みな、四方に逃げましたので、今の所は十余名と言った所しか判りません」

「そうか……ご苦労であった。お主も少し休め。疲労しているだろう？」

「……」

「オレは、少し見回りをして来る」

「では、私もお供します」

「良いから休んでろ！これ以上の犠牲は出たく無いんだ！」

「…承知致しました。お気を付け下さい」

そう言うと、マクベは木に寄り掛かるようにして、仮眠を取る体勢を取った。

オレは周りを徘徊していた。

歩けば歩く程、辺りは疲れ眠りに就いている味方の兵に出くわす。

こんなになってまでする戦とは一体なんだ？一国を守るため？平和な世の中にするため？

そのためにこんなに犠牲を出さなければならぬのか？
オレは知らない。こんな時代なんかに生きた事は無い。そのはず
だ！

早く終わりにしたい！

この世をそして、『キリアートン』のゲインをこれほどに憎い
と思う事は無かった。

オレは、何のためにこの世に生を受けたんだ？神よ、教えてくれ
！

オレは天を仰ぎ見る。しかしその返事は返ってはこなかった。

#26 涙の軌跡

涙の軌跡

「昨夜の奇襲は上手くいったようであるな？」

グエインの顔が少しほころんでいるかのようであるのが皆にも伝わっていた。

「ハッ。カイト皇子の首こそはとれませんでした。敵が、辺りに火を放ってくれたおかげで四方に散って行ったようでございます」
アラン大将が、謁見の間で、事の次第を伝える。

「これで、敵の数も半減したであろう。それに、伝令の出し方も変わって来る。動きづらいであろうな」

「十数部隊に別れてしまつては、集まるのに一日を費やす事でしょう」

「敵の物資も昨日の戦闘でそろそろ尽きてきている事でしょうな」
宰相メイデインが口を挟んで来る。

「あんな所に腰を落ち着けているんですから当然ですよ」
弓隊長のモランが言葉を紡ぐ。

「事の次第は分かった。これからの行動を逐一観察しておけ。また何か考え付き、行動を起こすやもしれん。心しておけ！」

それを告げると、昨夜も寝ずに居たグエインは、寝所へと足を運んだ。

「それにしても、あの敵のクルトと言う者は、敵ながらあっぱれであつたな」

「と申しますと？」

「カイト皇子を逃がす算段後、一步もオレの足を前に動かす事かせなかつた」

アランが、褒め言葉を漏らすとは、よほどの人物だったのである

うと、モランは話に聞き入っていた。

「最後には、このオレの肩口に傷さえこさえて行きやがった」
甲冑に血が滲んでいるのが見て取れた。

「取り逃がしたのですか？」

「残念だが、余りに火の回りが速く、戦う所では無かった」

モランそれはそれと言った風に、

「それは残念でしたね。カイト皇子の側近であれば、名だたる騎士であつた事でしょうに」

「そうだな。再び会い見える事を楽しみにしているよ」

「この度はお疲れ様でした」

「それじゃ」

マントを翻しアランはその場を去つた。

残されたモランは、その後ろ姿を見届けはしたものの、直ぐさま自分の配下のもとへと足を運んだ。

「お目覚めかな？カイル殿？」

昨日の事をもう忘れたのか、自然に振る舞つて来るゲインにカイルはあつけに取られていた。

「女性の寝所に不躰なのではございませんか？」

カイルはそんなゲインに嫌みたつぷりに返してやった。

「戦況報告など如何かな？」

相変わらず、薬師の手ほどきを受けた目の布はカイルの目を覆い隠していた。

「戦況？」

「昨夜、あなたの寝静まつた頃の事だよ。我が勢は奇襲を掛けたのだ」

「奇襲？」

テールへと足を運ぶカイル。その足取りは『フラフラ』としていて、危なっかしい。

「そうだ。高台は火の海で、早朝の雨が鎖火させてくれたが、焼け

跡は見るも無残なものだ」

「高台と言つと、カイト率いる……」

カイルは確か。と頭を巡らせていた。

「そうだ。三千近い兵がその半分になつていゝるだらうな。そのうえ、塵尻に分断されては、この先苦勞する事だらう」

「カイトは？皇子は無事なんでしょうね！？」

「死体の中にはカイト皇子らしき者は居無かつたらしい。無事であらう」

片肘を付き口元をゆがめている。その姿は、カイルには勿論見えないが、楽しんでいゝると思つた。

「カイト皇子は、この雨の中、森を彷徨つていゝる事だらう……少数の部下を引き連れて」

「……もう止めてしてくれませんか？これ以上の血を流す事は無意味です」

カイルは憤りを隠し切れなかつた。

「いいや、それは無理と言つもの。敵が降参しない限り、この戦いは続くのだ」

「なんと無意味な！」

「そう思つのは勝手。しかし、敵国は『エストラーザ』や、『サリバーン』の連中は、少なくとも無意味だとは思つてやしない。そう、自国の誇りを懸けての戦いであらうから……」

「皆、誇りなどのために命さえ投げ出すと言つのか！」

「所詮、平和主義のそなたには、男のロマンなど解からない」

「解かつてたまるものか！」

両腕で、テーブルを叩く。そんなカイルを見つめながら懐から一本の剣を取り出す。

「この剣をそなたに差し上げよう」

と、グエインは、簡単な装飾の施されてあるダガーを、カイルの手に握らせる。

「カイル殿。そなたが、この剣をどう扱つか見届けさせて頂こう。

今ここで、切り掛かっても結構。自害して頂くのも結構。それがどう使用されるのか、オレは見てみたい」

その言葉に、鞘を引き抜くカイル。

「そんなに、ボクがどう行動を起こすのか興味がありますか？」

半分まで引き抜いた所で、その剣を鞘に戻しながらカイルは問う。「そうだな、最後にはどういう行動をするのか？言葉と行動……それに興味が有る……」

暫くの沈然が、雨の音でかき消された。

「分かりました。これは預からせて頂きます。前にも言ったようですが、きつと、これをボクが使う時は、あなたを切る時だと言っ事を覚えておいて頂きたいですね。きつと後悔しますよ！」

「ははは、その時を楽しみにしているぞ！」
そういうと、カイルの頭に手を乗せてからゲインは立ち上がった。

「きつとお前には、無理だな！」
カイルの胸の内、怒りと、憤り、情けなさが一気に込み上げていた。

言葉で頭で心で……このゲインを殺したい程の憎しみを抱いている。しかし、人を殺す事。それは、もしこの目が見えたとしても決して出来ない。そう、魂のどこかで解かっていた。それを見ずかされている。読まれている。どこかで、警報が鳴っていた。

ボクは、根っからの憶病者だ！

覆われた布の下から一筋の涙が流れてきた。

それは、自らの愚かさの証であるんだとここに来て改めて知ったのである。

#27 嵐

嵐

待望の三日目は、嵐であった。

斜めに降りしきる雨は全てを叩き潰そうとする程に痛い。

この分だと夕刻の合図に、狼煙さえ上げられないかもしれない。

もう一日、日を待つ方が無難であろうか。と、東に位置したこの場所での時を待っているハザウェイ王は考えていた。

しかし、この天候を利用するのはいかにも都合が良い。

「ハザウェイ王よ、この天気は今だけの物です。夕刻には晴れるでしょう」

こう言ったのは側に控えたマーチンであった。

「そうか。それは誠に都合が良い。時に、水嵩は普段の倍だ。これは、なんとも言い切れない程の好都合だ。ここに来て諦めるなど勿体無い。天は我らに味方した！」

昨夜、カイト皇子の軍が、『キリアートン』の奇襲があった事は報告済みであった。

ここは、この夕刻までに、隊を復興してもらいたいものである。密偵ハイルの伝達だと、ほぼ、三分の一の者達が復帰していると言う伝達であった。

「こちらの準備はほぼ完了しております」

「わかった。今は時を待て！一気に形成を逆転してやるぞ！」

ハザウェイ王の勝利への準備は心に決まっていた。

「大丈夫か？」

オレは各兵に声を掛けて回った。それが今の俺ができること。

「この天候だと、夕刻までには上がる見込みは有る。皆、疲労している身で申し訳ないが、ここは一つ頑張ってくれ！」

刻一刻と流れる時の流れが、流れ行く雲の様子で今は刻まれて行く。

「クルト、よく無事で！」

オレはクルトの姿を確認すると、迎えるように肩を抱き合った。

「カイト皇子こそ。一時はぐれた隊をよくここまで召集して下さいました」

「何、こうして、皆が生きていた事を確認するのが、一国の皇子としての使命だ。それに…… なんだか、嬉しい。命の責さを今、実感できている事が何よりのオレの生きている証のようで……」

「皇子…… 成長なされましたね」

「そうか？ 実はオレもそんな気がしてる」

少し照れくさい気がしてオレははにかんでいた。

「ははは」

その様子にまだ幼い表情を見た。とクルトは、笑い声を上げた。

「後は時間の問題だ。皆、疲労が並みの物では無い」

「立て続けに奇襲を受けたのですから。それは仕方有りません。それに、皆分かっております。後に引けない事くらいは」

「そうだな……」

分かつてはいても、こう天候の悪い状況の上に疲労が重なると、人間精神的に参ってしまうものだ。

時に、志願兵などに関しては、鍛え抜かれた体とは言えない。心配にもなるというものだ。

「皇子は休まれたのですか？」

「ああ、少しはな。でも、体力的に疲れていても精神的に休む事はできないもんなんだな」

ほんの一时间そこの睡眠で目が覚めてしまう。

「クルト。お前は休んだのか？」

「え？ ええ……」

「その様子だと、休んでいないな！」

オレは思わず声のトーンを落として威圧してしまった。

「分かりましたよ。少し休んでおきます」

「よし。聞き分けが良いやつだ。ここで休んでいる！オレは、もう少し先を見て来る。できる限り味方の兵を捜して来るさ」

「お気をつけて」

オレは、木々の影から足早にその場を離れた。

少しでも休める場所をと、『キリアートン』城の街道の近くの森に潜むように陣を張った。

雨は木の葉の茂りでその力を弱めるためでもある。

この作戦。天よ見守り下さい！

オレは心から天に願った。

一方、西に位置する城の周りを取り囲んでいたフェンディ皇子一行は、城壁の兵に気取られないように、密かに秘密の抜け道を探し当てていた。

それは、この道が畏である事はかくも承知であるかのように、ただその側に陣を張る事だけにとどめていた。

「フェンディ皇子、如何致しますか？」

メイトは、降りしきる雨に対し布を被る事で遮り、静かに辺りの様子を伺いながら、フェンディに問う。

「これは畏だ。それを承知で夕刻の号令と共に一気に攻め込む。今はそれを待て！」

「畏で有っても、この地より攻め込みますか？」

「少しの動揺が命取りになることは分かっているだろう？きつと、紛れ込む事ができる。それを待つのだ！」

「承知致しました。ならば、わたくしが先頭に立ちます！」

「メイト？」

「何、心配はございません。皇子は後ろに控えていて下さい。約束でござりますよ？」

重ねられる瞳。それで全てが決まった。

「……わかった。お前に任す！ただし、一步も引き下がるなよ。オレはお前をおぶさる事なんて出来ないのだからな！」

フェンデイは、顔を背けてメイトに伝える。

「……ええ、分かっておりますよ。フェンデイ皇子」

一瞬であったがメイトの頬に赤みがさしていた。

降りしきる雨は一時雷雨をも伴う程荒れていた。

しかし、この流れる雲の様子だと、あと半時もすれば、青空を覗かせるであろう。

そして、勝機を掴む！

誰もが、そう確信を持って今は静かに息を潜めていた。

#28 最期の決戦

最後の決戦

次第に弱くなる雨足は、霞の中ゆつくりとハッキリとした視界を映し始めた。

空は、今まで重圧の黒雲が淡味をかもし出し、ついには虹をも東の空に従え、晴れ渡った。

ハザウエイは、森の木の影から、日に一度開かれる水路を眺めつつ、今かと時を待っていた。

そして、城壁に立っている兵が合図を出すその瞬間を見逃さなかった。

「今だ！」

隠されていた三日三晩切り倒していた木を上流と、下流に投げ込む。

そのため、逆流を含むいつもに増した水が一気にその水門めがけて流れ込んで行く。

激しく流れ込む水は、大きな音をたて、城壁にぶつかった。すると、今日の今日まで崩された事の無かったであろう、その城壁が一気に崩れ落ちたのである。

「今だ！突撃！」

各部所に控えていた兵千余名が、その水流を泳ぐようにして、突入したのである。今まで城壁の上に居た兵は、崩れ落ちる壁と共に落ちて行く。

「うわ！！！」

幅、十メートルもの穴が開いたその壁は、今崩れる音と共に、破壊されていた。

「狼煙だ！合図だ！兵をあげろ！」

正面の門を見上げている形で今かと待ち望んでいたカイト皇子一

行は、一気に門下へと走り込んでいた。

門の上では、東の城壁に気を取られていた兵が慌てふためいているのが視界に入ったが、そんな事二の次と言うかのように、

「打ち落とせ！そして、門をこじ開ける！」

千にも足らない兵ではあったが、皆気持を一つにしてこの場を盛り立てる。

その思いが叶ったのか、第一の門が大きな音と共に開かれて行った。

その様子を啞然と見下ろしていた敵兵はそうはさせるかの勢いで、弓を打ち放つが、既に開かれた門は『エストラザ』及び、『サリバーン』の兵を飲み込んで行っていたのである。

「うわ！！」

逆に、打ち落とされる兵。次々と、門下へと降り落ちて来る。

第一の門を潜ると、壊された東の水門の一部がむき出しになっているのが確認できた。

そこから、膝上までにも及ぶ水が流れ込んでいた。

第二の門は簡単に打ち落とせた。というより、見張りの兵が既に打ち落とされていたのである。

そして門を開こうとする。

「カイト皇子！水が……」

門から水がしみ出していた。

「少し待て。この門は、内側に開く仕組みになっている。今、中は……」

押ししても引いても門は動こうとしない。

流れ込んできている水が、押し止めているのだと悟った。自然の力と言うのはかくも恐ろしいものであるのだと、痛感した。

「フェンディ皇子！」

「メイト！皆、行くぞ！」

「はい！」

今か今かと待っていた西側でも、ついに動く。

あの隠された隠し通路。底の前で待機していた。

遠く東の果てで、轟音が鳴り響いていた。

その中、五百の兵が列を作るかのようになだれ込む。

暗い一本道。しかし、メイトの目にはすぐにその道より、ぼんやりとした光を感じ始めていた。

進む途中、何人かの兵にぶつかるが、勢いで次々と切り倒して行く。その上をなだれこんでいく『サリバーン』の兵達。

程よく進むと、二つの道に別れていた。

「メイト。お前は左の道を行け！オレは右の道を行く！」

すかさず指示を出すフェンディ。

「承知致しました！」

ここで二手に別れることとなった。

一度も足を踏み入れた事の無い道。少し湿気を帯びた道は、足下を救われそうになるがそんな事を気にもしないで一気に駆け込んだ。

どっちが、正しい進なんだ？

下調べをしておけば良かった。と、心の中で思いもしたが、今さらそんな事を思っても詮方なき事である。

フェンディが進んで行った道は暫くすると蠟燭のともった石畳の通路に出た。

これだ！

確信を持って進んで行った先には明るい広げた部屋へと出る。そしてその先には、辺りを包み込むほどの慌ただしい悲鳴が沸き起こっていたのであった。

オレは時を待っていた。しかし一向に、門は開かれない。逆に、漏れ出て来る水の量が増した。

「危ない！カイト皇子下がって下さい！」
ハツとしたクルトが叫んだ。

その刹那、『ドーン』と言う音と共に、城壁の一部が崩れ落ち始めたのである。

「皇子！」

一気に水がオレ及びその配下を飲み込むかのように流れ込んでくる。

「うわー！！！」

という、人々の叫び声が沸き起こる中、只無我夢中でオレは逆流の水の中を泳ぎ切っていた。

暫くすると、水嵩は減り、流されなかった兵は、二の門の中へと腰まで浸かった体を前へと進んで行く。

「クルト！！無事か！？」

「ええ、何とか。数十名の兵が流されたようですが……」

「仕方ない。オレ達は前に進むぞ」

「はい！」

オレ達は、向かい合ってお互いに頷く。

「カイト皇子！」

遠くからオレを呼ぶ声が聴こえてきた。

「ハイル？」

「御無事で何よりでございました」

「心配掛けて済まない」

「これ以上の水は流れ込まないよう、東の地で、対処致しております故、今は御辛抱下さい」

「わかった。お前には本当に色々迷惑を掛けたな」

「そのようなお言葉……もつたいない」

「では、これより城内に攻め込む！！！」

「はい！」

流れに負けないように、下半身に力を込めてただひたすらオレは足を動かした。

その姿を見る者は、皆思った。これが、これからの『エストラーザ』を担っていく男の姿であるのだと。

#29 未知なる城

未知なる城

「カイル皇子！！何処にいらっしやいますか！！」

広間に出たフェンディは、この騒ぎの中、自分の使命を全うしようとカイル皇子を捜していた。膝上にまで及ぶ水が、この城の中心まで流れ込んでいる。歩く度に思うのは、着込んでいる甲冑を投げ出したくなる程に動きづらいということだ。

「カイル皇子！」

後からこの広間に入って来る兵は、四方に別れて、襲って来る兵や逃げまどう人々を選び分けながら城内を巡回して行った。

こんな時カイルがいれば……

カイルこそが、この城内を知り尽くしているであろうと思いきや一瞬心が揺らぐ。

もっと、情報を聞き集めておくべきだった

フェンディは、自分のいたら無さに歯がゆい気持ちになっていた。その時、カイルが、女性として扱われているという事をふと思いつ出した。

ならば、逃げまどう女から訊き出す事ができるかも……

一か八か賭けに出る気持ちで、フェンディは、出会う女に声を掛けて歩いた。

「お主、目の見えぬ女を知らないか？」

何が起こったのか分からないこの状態。ただ、パニック状態に陥っている者に声を掛けたところで、はつきりした答えなど返って来る事など無い事は分かっているのにフェンディは一人一人訊いて回った。

「そんな者知りません。誰か助けて!!!」

「何が起こったの？イヤー!!!」

返って来る答えなどこんなものである。

しかし、フェンディは諦めなかった。暫く、辺りを落ち着いて見回した。

左奥から、女中らしい者達が広間へと流れ込んで来る。

この奥か？

フェンディは確信に似た物を感じ取った。

オレが二の門をくぐり抜けた先。街は、水浸しであった。屋根に上って命乞いをしている者の姿が見える。

凄まじい

オレは思った。

敵とは言えども、今まで平和に暮らしていた者も居ただの。

それを考えると、政治的理由でこんな戦をしている自分達はなんとも罪深い者のように思われる。

「後少しで、城内です!」

「一度来た事が有るから分かる。広間に……いや……謁見の間に向かう」

「カイト皇子!くれぐれもお気をつけ下さい!」

「わかっているさ!」

暫くすると、少し高台になっている階段を上る。膝下までの水嵩でなんとか動きも楽になった。

グエイン、覚悟している

オレは、今一度見える『クリアートン』の王に今度こそ恥ずかし目を受けない勢いで前を急いだ。

一方、フエンディ皇子と別れて行動していたメイトは、牢獄の有る通路へと足を踏み入れていた。

「どうか、そこのお方……お助け下さい!!」

湿った石畳の上に横になったり、うずくまった男達が牢の中、口々にメイトや他の兵に声を掛けて来る。

「お主達は？」

「私たちは王の怒りをおかした者共です」

「鍵は？」

「その角を曲がった先の所に居る兵が持っています」

「わかった。今暫く辛抱している！」

メイトは兵に指示を出し、兵を倒す算段をたてた。

「遠くで叫び声上がる。

「ぎゃー」

暫くすると、悲鳴と共に足音が聴こえて来た。

「メイト様！鍵です」

「今すぐ出してやるぞ！何処へなりとも逃げるが良い」

「助かった〜!!」

「ありがとう、ネエちゃん」

いろいろな声上がる。

そんな中、メイトはこの先に通路があったかを、鍵を取ってきた兵に訊く。

「今の兵の奥には道はあったか？」

「いえ、行き止まりでございました」
その言葉に、

「全兵よ！もと来た道を進め！！そして、先程分かれ道があった逆の道に急いで進むのだ！！」

しまった

とメイトは思った。

フェンディ皇子……早まった行動は決して為さらないで下さい！

味方の兵の列の後尾。一人メイトはこの成りゆきを焦る気持ちで見守るしか無かった。

「カイル皇子！！」

フェンディは、女達が騒いで逃げて来る道を逆行していた。時々そんな女達に声をかける。

しかし、誰一人として、その言葉に耳を貸す者は無かった。

暫く行くと、いくつかの部屋前を通り過ぎるようになった。その部屋をくまなく見て回る。

しかし、既にもぬけの殻であった。

このまま行くと、最奥の間に行き着く……

もしかしたらと思う一心で、重い足を動かした。

暫くすると、日差しが当たる渡り廊下に出た。

「カイル皇子！何処ですか！？」

もうここまで来ると逃げまどう者もいない。

一番奥の部屋だ！

フェンディは、そのドアの前まで来ると思いのたけを込めてそのドアを開いた。

水の重みもあつたため、『ズズズ、ギーッ』という音がした。

「カイル皇子!？」

その部屋を見回す。暗い部屋。先程の渡り廊下で、既に辺りが夕日のために赤く染まっていた事を初めて知った様な気がした。

「フェンディ皇子か? 久しいの。ここまで来れるとは……してやられたわ!」

聴き覚えの有る声。

「グ、ゲイン……」

フェンディの目の前には、女の胸に剣をたずさえた格好のゲインが、立ちはだかつていたのである。

#30 勝利の果てに

勝利の果てに

喚き立てる城内は混乱の渦と化していた。

立ち向かって来る兵は、一時立ち止まりながらもオレはなぎ払って行く。

女や、兵で無い貴族の者達は逃がす。そのつもりでこの城内に入ってきた。

『パシャパシャ』と辺りは水の弾ける音と泣き叫ぶ声で他には何も聴き取れない程であった。

「そろそろ、謁見の聞だ」

オレは足早にそんな事を考えながら走っていた。

暗い通路を右に曲がる。

そこにあの時の光景を見た。が、実際に捜している姿は無い。

「カイト皇子！グエインが居ません！」

「一体何処にいるというんだ！」

ここにいると踏んだオレだからこそ、一早くこの場に赴いたのである。

しかし奴はいない。

城の奥か？王ならこの場にいるのが当然だろう！

悔しい気分に陥る。

その時、頭の端に嫌な思考が流れた。

カイル！

この時のための人質だったのかとばかりに、しまったと言う表情

を浮かべ、階段を駆け上がる。

「ゲインはこの奥だ！」

確信を持って、オレは走った。

確かあの時、ゲインはこの扉を開いて奥へと下がった！きっと、この奥に居る！

「卑怯ですね……ゲイン王ともあろう者が！」

フェンディは、この場に及んで人質を取ってまで引きこもっているこの王に不様な姿を見せてくれるなど言いたかった。

「何とでも言え！この者が、カイル皇子である事は、そなたも知っているであろう」

ゲインは、鼻で笑っていた。

「知っている。本当は王女である事も」

「ならば早い、邪魔だ！そこをどけ！道をあける！」

ゲインは、前に進むために足を一步踏み出した。

「弱りましたね。ここであなたに逃げられては困る。しかし、カイル殿を殺されても困る……」

フェンディは、ゲインの行動を静かに見守っていた。

「フェンディ殿！ボクの事は気にしないで下さい！ここで死ぬこそ本望です！」

カイルはそんな心遣いは無用とでも言うようにフェンディに伝える。

「そう言う訳には行かないんですよ、カイル殿。私の使命は、あなたをお助けする事なのですから！」

「しかし……」

カイルは戸惑っていた。

「しょうがないですね、ゲイン国王。あなたの言う通り、この場を引き下がらしましょう」

フェンディは道をあける。

「悪く思つなよ」

グェインは、フェンディに背を向けないようにこの部屋を出て行った。

その後を追うフェンディ。

再び渡り廊下に出る。

西の空は血のような赤い夕日色で染まっていた。

そして流れ込むその光は、三人を赤く染め上げていた。

『バタパタバタッ』

「カイルっ！！」

そこに、オレとクルトが走り込んで来た。

「これは、これは、皇子様のご到着でございますよ……カイル殿？」
静かにグェインは皮肉を言った。

「カ、カイト？」

「無事だったのか、カイル！」

「そう言う雰囲気ではございませんが？」

と後方からフェンディが水を差す。

「卑怯だぞ、グェイン！その手を離せ！そして降参しろ！」

オレは無意識的に叫んでいた。一陣の風が吹き抜ける。揺れる髪が、幽かに頬を撫でて行った。

「もう、勝敗は決まったも同然だ。潔く負けを認めろ！」

クルトが追い討ちをかけるかのように言い放つ。

「まだこの戦いは終わってはいない。カイル殿の身は、我が手に有るそして、我が命も！」

「何を言っている。未だそんな事を言っているのか？いいかげん周りを見る！こんな状況下で、何が出来るというのだ！」

オレはこの道に来る途中に見た光景が、未だ目に焼きつけていた。

こんな莫迦げた戦いはこれで終わりにしたい

「周りはどうあれ、オレはまだ負けを認めてはいない！」

グエインの瞳には未だ宿る野心が火をつけていた。

「民の事を考えない王など……オレは認めない！お前の考えている世界は、ただの屑だ！」

「言ってくれるな……カイト皇子？」

それでもグエインは怯む事がない。

「ああ、いくらでも言ってもやるさ！屑には屑なりのけじめをつけつつて事をな！」

静かに時は流れていく。

「喚かないでくれるか？頭に響く」

「判らない頭に言っても聞かせてるんだ！そのくらいよく聞いておけ！」

うんざりだともいうように、グエインは首を捻った。

「ならばわかった。いいから、どけ。決着をつけよう！」

「決着？」

「こんな所ですか？」

「何を莫迦な。王としての決着をこんな所でつけられるか。王座に
来い！」

オレは王座と言う言葉で理解した。

「わかった。ならばこちらにも尋常に勝負する。だから、カイルを離
せ！」

その言葉に、グエインの手からカイルが解き放たれた。

「グ、グエイン……」

カイルは弛んだその手から抜け落ちる。そして、その主を仰ぎ見
るかのように見えない目でその方を見た。

「誰も手出しをするな。これはオレと、グエイン王との一騎討ちだ
！」

そう言つとオレは、今来た道を引き返した。

フェンディ皇子に手を引かれたカイルは途中、
「すみません。フェンディ皇子」と声を掛けた。

カイルが心に決めた事。

「申し訳ないのですが、この瞳に巻き付けられた布を取りたいのです。ほどいていただけませんか？」

少し屈む形で膝を曲げた。今、今見なくてどうする？でも見えるのか？

「……承知しました」

それは、ゆっくりと取り外されていく。

暫くすると、真白い世界は少しずつ形有る像を成し、今、カイルに奇跡が起こった。

「……見える……」

「えっ？」

フェンディは不思議そうにカイルの後ろ姿を見下ろした。

「お手をありがとう。ここからは独りで歩けます。御迷惑おかけ致しました」

あの時から十年の月日が経っていた。

十六歳の冬。初めてみた光景。

それは、忘れもしない金色をした髪のカイトの成長した後ろ姿。

そして、初めて見る漆黒の髪の色をしたゲインの後ろ姿。それは、望んだ光景であったのか？

ボクは…やはり悲劇を見なければならぬ運命にあったようだ

五人の後ろ姿が夕日に飲まれ黒い影となり城内へと消えて行った。

城内は、未だ水が引かない状態であった。そして、光の無いこの部屋は暗闇のようである。

「何故窓をつけない？」

「暗いのが好きだからだ」

オレへの答えは、ごく個人的理由であった。

「今、蠟燭に火を灯して回る。この薄晴がりになんともドラマチックであるかな。どうだ？残った方が、この火を吹き消すつてのは？」
グエインは『ニタリ』と笑っていた。

「悪趣味な演出ですね……でも悪くは無趣向だ」

売り言葉に買い言葉。オレは暫くの間、グエインの行動を待った。

四方には、ゆうに五十本もの太い蠟燭が壁掛けされていた。

「これで少しは明るくなったのでは？」

「まあな」

「それでは参ろう」

「よし」

両者は自らの剣を引き抜く。

オレよりひと回り太い剣が蠟燭の明かりでキラつく。

細みの剣を持ったオレの剣は鋭利な光を放っている。

「はっ！」

『カキーン』

重なり合った二つの剣は押し合いをし始める。

すると、一度『ヒュッ』と退いたオレは横っ跳びにグエインの腰

めがけて剣を走らせる。

しかし、その魂胆を見抜いたグエインは、上からその剣を押しと

どめる。

白と黒のマントは、その度に舞い上がる。

どこかで見た光景だとオレは思った。

この感覚。あれは…

押しとどめられた剣を素早く引く。

そして間合いを取る。

緊張と、これまでの疲労の為か額に汗が伝う。『ジリジリ』と足

が忍ぶ。

それから、下段に剣を構える。

振り上げられる剣。再び辺りに金属音が鳴り響いた。

その交わった剣がオレの右頬を掠めるように引き抜かれた。

『ツーツ』と一筋の血が滴り落ちる。

「力では勝てんぞ？」

「言われなくともわかっている！」

どう見積もっても小柄なオレが力で勝てるとは考えられなかった。

機動力を生かさなければ、負ける

オレは、再び間合いを取った。

再び下段の構えから剣を振り上げると見せ掛けて、剣を突く構えで突進した。

それは、グエインの胸目掛けた太刀筋であった。が、上手く弾かれた。

夢で見た光景だ。でもあの時は……

『パシャー』と水しぶきが上がる。

足をずらす。その度に足に纏わり付く水の重みを感じた。

遠くの方で、人のざわめきが聴こえてくる。

「なんだ、何をやっているんだ？」

男達の声であった。

「あれは、カイト皇子！」

「グエイン国王！」

散り散りになっていた者たちが、今再びこの地に戻ってきたのである。

「フェンディ皇子、御無事でしたか！」

メイトが安心したという表情で声をかける。

「ああ」

「これは何を？」

「二人の尋常の勝負だ」

「良いのですか？」

「構わない。これで全てが終わるのであるのだから」

「えっ？それは……」

辺りに見物者が現われて、気が散る。ついには煽る者達まで出てきた。

オレは、今まで静かに打ち合っていたのが、その人々の勢いと共に剣の呼吸を短く保ち始めた。

『キーン。カキーン』

激しく打ち合う両者。

確か外から見ていたはず

息が上がりに始めた。小回りを利かせて動き回っていただけに息が持たない。

そしてあの続きは……

気づいた時には左腕にも傷が付いていた。吹き出している血。

しかし痛みなど感じない。生きるか死ぬか。その瀬戸際で、緊張感だけで精神力が続いている感じであった。

ここに来るまでに費やした体力は並外れたモノだ。

しかし気力だけでこの場は保っている。

汗で手の平が滲み、今にも剣を落つことしそうだった。

絡んだ剣。『ギリギリッ』と音を立てている。

「そろそろ限界か？カイト皇子！」

「なにを……！」

と弾き飛ばすように剣を引いたつもりだった。

「あつ」

しかし、不幸にも剣は…オレの剣は、手許から吹き飛んだのである。

「これで最後だな！楽しかったよ。カイト皇子！」

そう言つと、剣を拾おうとしたオレ目掛けてグエインの剣が真直ぐ振り下ろされた。

「うっ！」

と身構える。

『ガキーン』

しかし、降り下ろされた剣がオレの頭上で止まった。

「カ…カイル？」

オレの頭上に鞘を抜かないダガーを両手にしっかりと握りしめたカイルが立ちはだかつていた。

「カイル殿。これは二人の尋常な戦いだ！邪魔は為さるな！」

グエインは静かな闘志をたぎらせていた。

「至極承知しています。しかしこの勝負、ボクは敢えて間に入らせて頂きます」

剣を下ろすグエイン。

「そのダガー。今ここで使用すると言うんだな？」

その言葉に、

「いいえ。違います」

「なぜ？オレを殺したい程憎んでいるんだろう？良い機会ではないか！」

片腕を腰に当て、一息つく仕種をするグエイン。

「ボクには、あなたを殺す事は出来ません。それはあなたも御存知のハズ……」

「では、何故この場にシャシャリ出てきた。邪魔だ！どけ！」

片手でカイルを引き剥がそうとする。

「ならば、ボクを今ここで切り捨てて下さい。あなたに殺されるの

でしたら男として生きてきた甲斐が有ったというもの
しつこく抵抗するカイル。

「……カイル。どけ！」

「いいえ、僕はここを退くつもりはございません！」
対峙する二人。

「カイトを殺す前に、ボクを殺してください！一度はあなたに助けられた命です。これも運命だと思っていました。運命の輪からは逃られないのだと。しかし、抵抗してみる、自らが決めた生き方を
する事で逆らってみる決心が出来ました！」

カイルは叫んでいた。

「戦場で死ぬことが出来る。こんな嬉しいことは無い。さあ、切つて下さい！」

そのカイルを仰ぎ見ていたオレは、立ち上がりその手を引き寄せた。

「カイル！退け…お前は見ていれば良い！」

「カイト？」

「まだ立ち上がる元気が有るのか？カイト皇子様？」

「ほざけ！」

「カイトこの剣を使って！」

と、握りしめた剣をカイトに渡した。

「えっ。こんな物で奴を倒す事なんか…」

焦る。ありえない事だった。

「違うよ。この剣でボクを殺しなさい」

「な、何を莫迦な！」

「ボクはね、『エストラーザ』に戻る資格など無い。ならばこの地で葬って！」

「……何を言つて……」

「国に返ればボクは嘘偽りの皇子を演じていた罰を受けなければならぬ。そうなる前に殺して！ここで死ぬ方がまだましだ！」

沈黙が訪れた。それはオレの心に深く重く。

「……で……出来る訳ないだろ……このオレに……」
オレの手が震えていた。

「でもやらなければいけないんだよ。君の手で！ボクのこの命を奪わなければ同罪になってしまふんだから……」

カイルの瞳は落ち着いて澄んでいた。そして今確かにオレを見ている。

「大切な者を守るのって、本当に難しい事なんだって、今痛感したよ。ボクにとつて、誠の弟のように思つて育つてきたカイトと、自らのエゴだと称してまでボクを救ってくれたグェイン王。ボクにとつたらどちらもかけがえのない大切な者だ」

「……カイル皇子」

「……カイル」

「どうする？どちらがボクを殺してくれるの？今更人一人殺す事くらい、簡単なことなんだろう？だったら、早く殺してよ！」

「……」

「ハイイ。ちよつとストップ！」

この緊張感を崩したのは、『サリバーン』のフェンディ皇子であった。

「これは『エストラーザ』の皇子カイト殿と、『キリアートン』の王グェイン殿の尋常な対決だ。カイル殿の入る余地などないでしょう？素直に戦わせれば良いのです。違いますか？カイル殿？」

「そうですね。しかし、ボクは、見ていられない……どちらにも死んではもらいたくはない……だから……」

「止めに入った……というのですね？しかし、それは止められるものではない。もう多くの者が犠牲になった。それは我が国『サリバーン』の者達をも巻き込んでいます。ここで決着をつけてもらわなければならない。それが、一国を背負う者達の定めなのです」

「ですがこの対決が何の幸せを招くのですか！？これで負けた者たちはまたその恨みをぶつけ再びの戦を生むのです。そんな事はあつてはならない！」

そして、一息つくくとフェンディは続けた。

「カイル殿？あなたは私的な感情で動いている。これは政治なのです。負けた者が、勝った者の支配下になる。強い者こそがその栄光を勝ち得るのです。御理解下さい」

「では、あなたは勝った者につくと言うのですか？それとも、カイトが負けて『エストラーザ』の報復を考えると言うのですか？」

「それは、この戦いが終わってから決めることです。今の私はただの傍観者であるのですから」

何とも客観的な言葉。

「ならば、この『キリアートン』の今の姿を御覧になって、復興する余地を与えられると云うのですか？『エストラーザ』の味方をしていて負けたらその民を囚人扱いして……新たな国を創ると言われるのですか？そんなのは余りにも酷い仕打ちではありませんか！」

「カイル殿……」

「どうして、もう一度三国の平和協定を結ぼうと誰も唱えないのです！？このまま同じ三国で元のように、平和な世にしようと考えないのですか！」

「……もう、歴史は動いてしまったのですよ。それを変える事は出来ない事は分かっているはずですよ？カイル殿？」

「ああ……」

崩れ落ちるカイル。その瞳には止めどもなく涙が溢れ出していた。「だからあの時、私の配下、メイトと共に逃げになっていればよかったのです。賢明なあなたなら分かっていたはずだ。自らの祖国『エストラーザ』と、少しの間でも身を寄せてしまえば移つてしまふ『キリアートン』の両方の国をその手で天秤に掛けてしまふ事を！」

静まり返った広間。その広間にまたフェンディの言葉が流れる。

「しかし、グエイン王よ！一つ聞きたい事が有る。なぜ、先程、カイル殿を人質に取った時、剣を只構えているだけだったのですか？どうみても、壊れ物を扱うようなあの身のこなし……必要な剣先は何処を向いていたのでしょうか？」

話の鋒先は、いきなりグエインへと向く。

「……何が言いたい？」

「茶番だと申し上げたのです。あなたは、カイル殿に剣を向ける事などではしない。ましては、既に負けをも認めていた……つまりは、カイル殿を人質に取るつもりなど、いつさい無かった」

「……」

「あなたも、私情を挟んでの戦いをカイト皇子に挑んでいる。違いますか？」

「何の事だか、さっぱり解からないが？」

「不思議だったから訊いたまですよ」

「何も不思議ではない」

「そうですかね？今となつてはもう、国の事などどうでもいいのでは有りませんか？」

「そんなはずある訳がないではないか！」

「そうですね？ここで一つ言っておきますが、私は、もしあなたが勝ったとしても『エストラーザ』側に付くつもりです。私情を挟んでいる者には用は有りませんから……」

「フェンディ皇子？」

思わぬ事を聞いたとオレは驚いていた。

「それでも、人を見る目は有るんですよ。私には。さて、お引き止め致しまして申し訳有りませんでした。続きをどうぞ？」

ざわめく観衆。

「フェンディ皇子！あんな事を言っているのですか？」

メイトが囁く。

「もう決着は付いている。我が国は『エストラーザ』を支援する。

『キリアートン』は滅びの道を転がって行くまでだ」

「しかし、あのカイト皇子が勝つ確率は無いに等しい……」

「メイト、もつと洞察力を身に付けた方がいいぞ。カイト皇子は勝つ。『サリバーン』は『エストラーザ』を支援する」

そう言ったフェンディの横顔は自信に満ちていた。

改めて再開された二人の戦い。

脇に退くカイル。もう、誰にも止められない。

オレは、先程落とした剣を拾い上げ、再び力強く握り直した。

向き合うカイトとゲイン。

重ねあう剣は光を取り戻していた。

それをはね除け、オレはゲインの背後に回り込む。そうはさせ

まいと振り向きざまに剣を降り下ろすゲイン。

「カキーン」

受け止められる剣。

この戦いで死んで行った民の分もオレは……

カイト皇子の背中にはオーラを見た気がした。思わず退くゲイン。
ン。

なんだこいつ、先程より……

オレの足は、素早く動く。再びゲインの背後に回る。

斬り付けては撥ね付けられる剣。その繰り返しだが、もう何度となく繰り返された。

オレは、勝たなきゃダメなんだっ

その繰り返されていた剣が、ついにゲインの脇に刺さったのである。

吹き出す血飛沫。

「うわー」

その瞬間、歓声が上がった。

オレの剣がゲインをしとめたのである。

そして、倒れ込むゲイン。

「オレの勝ちだな。ゲイン王よ！」

その姿を静かに見下ろしながら言う。

そして沸き立つ『エストラーザ』の兵達。

その横を、カイルは走り込んでゲインを抱き起こしていた。

「首を落とせ！こんなナリを兵に見せたくはない！！」

それを無視するかのように、宣言するゲイン。

しかし、オレは、その事を否定した。

四方に取り巻かれた蠟燭の火。初めの予告通りオレはそれを吹き消して回る。しかし最後の一本にさしかかり、吹き消す事を止めた。

「何のつもりだ？カイト皇子！一思いに殺せ！！」

ゲインはカイルに抱き起こされながらも床を這いずるかのよう
な仕種でオレを見上げた。

「その傷はそう深いモノではない。直に血も止まる」

「なぜだ……」

「お前も一国の王なら、この荒れ果てた地を再び建てなおせ。生きてな！！」

「……」

黙って聞いているゲイン。

「カイルと共に……」

「……カイト……」

見上げるカイル。その先には、偉大なる王となる姿を見た。

「カイルよ、お前は今日より『エストラーザ』の第二皇子ではない。何処へなりとも去れ！只今をもってこのオレにより国内追放の処分を下す。『キリアートン』でも『サリバーン』でも好きな所に移住するがよい……でも、オレは……お前を心からいつまでも兄だと思っっている事に変わりがない事は……覚えておけ……」

それだけ言い残すと、オレは、暗闇になったこの広間を兵達と共に後にしようとした。が、

「言い忘れる所だった。『キリアートン』の王よ。その傷が癒える頃、今度こそ本当の不可侵条約を締結したい。必ず、一週間後には我が『エストラーザ』にお越し頂きたく思う。待っているぞ！」
『ギーツ、ガチャン』と、扉は閉ざされた。

ただ一本の蠟燭の火のみのこの広間は暗闇に閉ざされる。

残されたグエイン、カイル、そして、その他の『キリアートン』の兵や侍女たちは、横たわる自らの国王を取り囲んでいたが、直ぐさま薬師を呼び寄せようと動き始めた。

「カイル殿。完敗だな……オレの」

「そうですね、ボクもカイトに愛想をつかされました……」

「これで良かったのか？お前は……」

今まで剣を握っていたその手で、カイルの髪を撫でる。

「ええ。ボクの国はこの地です。あなたさえ良ければ……」

「何を言う。できれば、この地に留まって欲しい。オレと共に、二人で……平和な国を創ろう」

「……はい。グエイン国王」

「そういえば、いつまでも、カイル殿じゃなんだなあ。ジャステイという名で良ければもらってやってくれないか？」

「素敵な名前です。ボクも、いえ、私も言葉遣いに気をつけたいといけませんね」

にこやかな笑顔が二人の間でかわされた。
それはまるで、暗闇から明るく灯る『キリアートン』の明るい未来を暗示しているようであった。

「カイト皇子、本当にこれで良かったんですか？」
道すがら、フェンディは問いかけた。

「……………」
「あなたも本当は、カイル殿を……………」
「ただ、言葉をはばむかのようにオレは言う。」

「これで良い。オレは『エストラーザ』を担う皇子だ。帰還したら、戴冠式をも迎えなければならぬ身だ。それに……………」

「それに……………」

「弟だと思われていたんじゃないかな……………」

「よし！帰ったら、祝賀会でも開きますか？」

励ますつもりでフェンディは、他の兵と、オレを見る。

「いいな、それは！」

「周りから歓声が上がった。」

「ところで、我が妹がカイト皇子の事を気に入っているんですが……………」
「いかがです？今度お会いになって頂きたいんですが……………」

「そうか？会ってみるのも良いな」

「本当ですか？喜びますよ！」

「それじゃ、祝賀会にでも参加してもらおうか？」

「おっと、気が早いですねえ」

次第にその声は遠ざかって行く。

カイル……………幸せにな……………

オレは、心の中で小さく呟いた。

#31それから・・・エピソード

エピソード

「海斗！海斗！」

誰かが耳元で叫んでいる。以前にもあったような場面だ。目を開けると、白い天井が見えてきた。

なんだよ、五月蠅い！

全身で寝返りをうとうとしたその時、ままならぬ痛みが走った。

「よかった、目を醒ました！」

感嘆の声だと気がついた。

なんだ？

「海斗、安静にしてなさいよ！まだ動ける体じゃないんだから！それが聴き慣れた声だと分かった。」

「ふ…風香……？」

「風香？じゃないわよ。もう、どれだけ心配したことか……一週間近く眠り続けてたんだからあ」

「ここは？」

「病院よ！海斗いきなり車の前に飛び出して衝突したんだもん。驚くわよ！このくらいで済んだだけ、幸運だったわよっ！」

見える範囲で目をこらしてみる。

足先に包帯が巻き付けられて吊るされているのが目に入った。

「あばらも折れてるのよ。寝返りも打てないでしょう」

「ああ、痛いよ」

「先輩が救急車を呼んでくれて、素早く処置してくれたのよ。今度

会ったらお礼を言いなさいよね！」

「げっ。オレあいつ……苦手」

「苦手でも何でも、お礼はしてよね！」

『シャツ』とカーテンを引く音がする。

「見て御覧なさい。今日はなんて清清しい朝なんでしょう」

眩しい光が目に入り込んできて痛い。まだ覚めやらぬ何かがおレの中で渦巻く。

「風香、お前毎日来てくれてたのか？」

傍にある花瓶に生けられた花を見ながら、テレながら訊く。

「うん」

「そうか……そう言えば変な夢を見たよ」

「どんなの？」

「えつとな……」

それは、時間の狭間。夢ではない本当の出来事。

「海斗」は『カイト』で、同じ時間軸の異次元の世界に入り込んでいたのである。

そんな事とは露知らず、恋人の風香にその話を語りはじめる。

カイトが入り込めないでいた肉体は、実際の海斗の中で眠りに就いていた。そして、夢を見る形でその出来事を記憶していた。

それから先は……異次元のその後の世界のことは、再び海斗の夢の中にでて来る事になる。

『エストラーザ』 『サリバーン』 『キリアートン』の三国は一週間後、約束通り平和条約を結ぶ。

その一年後、カイトと、『サリバーン』のウエンディは結婚。それから一年後、ウエンディは男の子を出産。名は、カイル。後に一国の王となる第一皇子が誕生。

『キリアートン』は、半年の内に国を再興し、二年後、グエイン国王と、ジャステイの間に女の子をもうける。

その一年後、第一皇子を出産。不思議な縁で、年頃になり第一王女と、『エストラーザ』の第一皇子がめでたく結婚。

そして、平和条約によって、『エストラーザ』の貿易港が使用可能となり、多くの国を行き来出来るようになる。

実際、王グエインは、その多くの国を視察して、念願の国土拡張をはかる。

『サリバーン』のフェンディ皇子は、配下のメイトを正妃として結婚。

子宝に恵まれメイトは五人の子供を産み落とす。

男の子三人と女の子二人。同じく平和条約にて、『エストラーザ』の一部の土地を借り受け、作物を大いに収穫していた。

この平和は、一世紀続くが、再び戦乱の世を招く時が来る。それは、まだ知られていない未来の出来事であるので、また今度の機会にでも。

#31それから・・・エピソード（後書き）

これで、カイトが主人公としてのお話は完結です。

確か、五、六年前に書いた作品なのですが、今見ると、会話文が多くて、世界観が描けてなかったなと反省するのですが、今回はそのまま。少しだけ気になってた所だけを加筆して、お届けしました。でも、個人的に、フェンディとメイト。グエインと、カイル（ジャスティ）のお話など改めて違う方向で書けたら本望かなと。

特にフェンディとメイト。この二人の過去と未来など加筆したい気分です。

また、読みたいなって方いらっしやいましたら、こっさり教えていただければ幸いです。

それでは次も、ファンタジーでお送りします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8461c/>

エストラーザ戦記

2009年3月28日23時09分発行